
妖怪禅師

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪禅師

【Nコード】

N4058I

【作者名】

雨宮雨彦

【あらすじ】

『妖怪禅師』とは、妖怪退治を専門とするお坊さんのこと。さまざまな妖怪や死者の霊に立ち向かってゆきます。

妖怪出現

「なんじゃと？ 君は駅の自動改札機に嫌われてしまった、と言うのかい？」

ゼロ禅師が目丸くしたのも無理はないかもしれません。ススムが話した内容はそれほど奇妙だったからです。

ススムは毎日、学校へ行くのに電車を利用していました。定期券を持っていて、一日に何回か自動改札機を通ることになります。

「そのたびに毎回、僕は意地悪をされてしまってます。今日だって買ったばかりの新しい定期券なのに、『これは期限切れだ』とブザーを鳴らし、ゲートをボタンと閉じられてしまいました」

「ほう」

「まわりのお客さんからじろじろ見られて、僕はどれだけ恥ずかしかったか」

「駅員はなんと言ってるんだね？」

「駅員も首をかしげるばかりなんです。定期券を新しく作り直してくれましたが、自動改札機に入れると、またブザーが鳴りました」

「自動改札機の故障ではないのかい？」

「僕と駅員が首をひねっている間にも、他のお客さんはみんなすいすい通り抜けていくんです。自動改札機にはまったく異常がないん

です」

「それで？」

「このあと何をやっても、やはりだめでした。自動改札機は、どうしても僕を通してくれません。これはもう、機械が僕を嫌っているとは思えないではありませんか」

この奇妙な事件をさっそくゼロ禅師が調査し始めたのは、いうまでもありません。数日後ススムの家を訪ね、ある知恵を授けたのです。

翌朝ススムは、胸をときどきさせながら駅へと向かうことになりました。ポケットの中の定期券には、ある細工がしてありました。

スーパーマーケットへ行き、ススムはワサビを買ってきました。定期券にワサビをたつぷりと塗りつけてから自動改札機の中へ入れるように、というのがゼロ禅師の指示だったのです。

もちろんススムはその通りに実行しました。

するとどうでしょう。いったんは定期券をのみ込んだのですが、ブザーを鳴らす間もなく、自動改札機の様子が大きく変わったではありませんか。

ランプをしきりに点滅させ、ゲートをバタバタと激しく開閉するさまは、まるでのどをかきむしっている姿に見えなくもありません。

次の瞬間、自動改札機が突然立ち上がるのを目の当たりにして、目を丸くするどころか、ススムは恐ろしさを感じるようになりました。

た。

自動改札機がフラフラと歩き始めるだけでなく、音を立てて鉄のボディーを床へ脱ぎ捨ててゆくのを、ススムは呆然と見つめたのです。

その下から姿を現したのは、なんと巨大なキツネだったではありませんか。

しかし、なんという大きさのキツネでしょう。

でもススムをぞっとさせたのは、それだけではありませんでした。怒りに満ちたその目がランランと輝き、彼をにらみつけているのです。

ススムは逃げ出さなくてはなりませんでした。

だけど足がすくんでしまい、駆け出すどころか、ススムは一步下がることすらできなかったのです。

背後から声が聞こえてきたのは、その瞬間でした。それを耳にして、ススムがどれほどほっとしたのか。

「もうあきらめい。おまえの悪事もそこまでじゃ」

もちろんゼロ禅師の声です。

どうやらキツネは、ゼロ禅師がいささか苦手だったに違いありません。

舌打ちをしたかと思うと身をひるがえらせ、脱ぎ捨てた自動改札機を再びガラガラと騒がしく鳴らして、妖怪ギツネはあっという間に姿を消してしまったのでした。

ススムは、やっと口をきくことができました。

「ねえ禅師」

「なんじゃなススム君？」

「あのキツネを何とかできないの？　今日はこれですんだけれど、いずれまた僕に嫌がらせを仕かけてくるんでしょう？」

「くるだろうな」

「ねえ、何とかしてよ」

「そう言われても困るな」

「だってさあ……」

「ならばススム君、やつを君の家族の一員として迎えてやってはどうじゃね」

「どうして？」

「ふふふ、それがやつの本心だからさ。そもそもこの悪さはすべてはじめてから君の関心を引くためのじゃよ。家の中へ受け入れてやれば、もう二度と悪さはせんじやろっ」

「家の中へ入れるって?」

「興味があるのかな?　ならまず、君のご両親に相談しよう。そのほうが話が早い」

そのままススムは、ゼロ禅師を家へ案内することになりました。両親の前に通され、ゼロ禅師はすぐに口を開いたのです。

「おたくのススム君は、妖怪ギツネに目をつけられております」

「なんですって?」

手短に、ゼロ禅師はこれまでのいきさつを説明しました。両親が目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「しかし、なぜうちの息子なのですか?」

「それは、このおうちの住所と関係がありましような」

「『ギツネ火ヶ丘』ですか?」

「そうです」

お父さんに向かって、お母さんが文句を言い始めました。

「だから私は、ここに家を建てるのはイヤだったのよ。何か悪いことが起こるんじゃないかという気がしていたわ」

ゼロ禅師は説明を続けました。

「いやいや奥さん、少しお待ちなさい。この家が『キツネ火ヶ丘』の中心に立っているのは事実です。名前の通り、ここはかつて妖怪ギツネのすみかだったのでしょうか。」

古巣ですから、やつはここへ帰りたがっているのです。だからスラム君に悪さをするのです。ならばこの家の中に住まわせてやればよいではありませんか」

「妖怪ギツネをですか？ 私たちはどうなるのです？」

「ははは、心配はごもつともですが、ご家族には何も起こりません。それはそうとご主人、そこにあるのはなかなか立派な柱ではありませんか。私もいろいろなお宅にお邪魔するが、これほどのものはそうそうお目にかかれません」

立ち上がり、手を伸ばして、ゼロ禅師は家の柱に触れたのです。お父さんの顔がほころびました。

「新築する際に奮発して、特によい材料を選んで立てた柱ですよ。なにしろ私と同じで、一家の大黒柱ですから。それをケチってはいけません」

「ええ、この柱ならやつも気に入ることでしょう。どうでしょう？ やつをこの柱の中に住まわせてやってもらえますまいか？」

この話に一番強く反対したのは、お母さんでした。家の中に妖怪を置くなど、やはり不安なのでしょう。

しかしゼロ禅師には考えがありました。

「ところで奥さん、キツネを住まわせている家は大きな金運に見舞われる、という話をご存知ですか？」

「なんですって？」

「住まわせてもらうお礼として、キツネがあなた方にくれるものですよ。家賃のようなものと思えばよろしい」

「本当に大金が得られるのですか？」

「実を言うと、このわしがあやかりたいぐらいでしてな。うちの寺もなかなか貧乏でして、いつも苦しい生活しております」

「そんなお寺のことなんかより、お金の話は本当なんですか？」

もう同意は得られたも同じでしょう。おなかの中で、ゼロ禅師はニヤリと笑うことができました。

だからゼロ禅師は言葉を続けようとしたのですが、ここで邪魔が入ったのです。

最初に目に付いたのは、ゼロ禅師の服が突然大きくふくらみ始めたことでした。まるで中に風船でも入っているかのように、どんどん大きくなってくるのです。

これにはみんなびっくりしてしまいました。

「これこれ、まだじゃ。気の早いやつじゃな」

ゼロ禅師も驚いた顔で、ふくらむ部分をトントんとたたこうとしました。だけどふくれ上がるペースはおとろえようとしません。

バリン。

音を立てて、とうとうゼロ禅師の服は破れてしまいました。その中から、いったい何が姿を現したと思います？

もちろん妖怪ギツネでした。ゼロ禅師の言いつけを守って体を小さくし、服の下に隠れて会話に耳をすませていたのでしょう。

だけどついに我慢できなくなり、出てきてしまったのです。

悪気があったわけではないでしょう。ただあの柱の中に住むことを認めてもらえそうな雰囲気だったからです。

ギツネは空中に飛び出し、ジャンプしてヒラリと向きを変え、あつという間に柱の中へと消えてしまったではありませんか。

本当に一瞬の出来事でした。

全員が驚き、息もできない様子でしたが、最初に口を開いたのはゼロ禅師でした。

「ギツネもこの柱を気に入ってくれたようで、何よりですな」

だけどもちろん、お母さんの関心は別のところにありました。

「それよりも金運はどうなりました？」

「それは楽しみにお待ちなさい。キツネも悪いようにはしないでしよう」

ゼロ禅師はウソつきではなかったようです。

翌日、思いがけずお父さんは道でサイフを拾い、もちろん警察に届けたのですが、なんと中には50万円も入っていたのです。

落とし主はとても喜び、1割のお礼をくれたのでした。

この日から、お母さんは日課が一つ増えることになりました。妖怪ギツネの大好きな油揚げを店で買い、家の柱の前に置くことです。

小皿に乗せてお供えるのですが、ほんの5秒でも目を離そうものなら、もう皿は空になっているのです。

この家での生活がキツネも気に入ったようでした。その後は二度と悪さなどしなかったのは、いうまでもありません。

お母さんの正体

異変の始まりは、朝早くから『猫坂市』中の人々が知ることにになりました。テレビやラジオのニュースがそれ一色になってしまったからです。

学校も会社もこの日はすべて閉鎖され、市民全員の避難が決定されました。

最初の数時間はなかなか足並みがそろわなかったのですが、昼を迎えるころには事態の深刻さが知れ渡り、避難はスムーズに行われるようになりました。

両親と一緒に、もちろんススムも避難する人々の群れに加わっていました。

持ち出すことが許されたのはカバンが一つきりで、ほんの少しの着替えや貴重品のほかは、そのまま家に残しておかなくてはなりませんでした。

それほどの緊急事態だったのです。ゼロ禅師のことも気にはなりましたが、どうすることもできませんでした。

いささか信じがたいことですが、この日の朝から猫坂の町全体が、何万匹もの妖怪たちによって占領されていたのです。

まるで図鑑から抜け出てきたようなさまざまな妖怪たちで、雪女や狼男、牛鬼といった正体のわかる物中にもいましたが、名前も知らず、ススムでさえ見たことのない妖怪も多かったのです。

それらが突然、猫坂の町を満たし、人々を追いつ出しにかかったのです。

武器も持たない市民たちは、町から逃げ出すほかありませんでした。混乱はありましたが、夕方までには全員が安全な場所へ移動を終えることができたのです。

ススムたちも、無事に市の境界線を越えることができました。これを超えると、さすがに妖怪たちの姿はなかったのです。

両親と共に、ススムも親戚の家に身を寄せることができました。

ほっとしたのでしょう。家族と顔を見合わせ、思わずススムはため息をついたのです。

そうやって3日間があつという間にすぎたのですが、猫坂市の状況に変化はありませんでした。人をまったく寄せ付けず、市内で何が起きているのかを知る方法はなかったのです。

ゼロ禅師の消息も不明でした。市外へ脱出することができたのか、まだ市内にいるのかさえ、わからなかったのです。

両親に話すことも相談することもできないまま悩み続け、とうとうススムは決心しました。

靴をはいて、ススムは親戚の家の玄関を出たのです。

もう夜遅い時間でした。家族にはついさっき「おやすみ」を言ったばかりです。ススムが家の外にいることは、誰も知らないはずで

した。

ここは田舎の大きな屋敷です。庭のはずれの暗がりにも身を隠すのは簡単なことでした。

ススムは、ポケットの中にある物を隠していました。ゼロ禅師から教えられたとおりに、今から使用するつもりなのです。

それは危険な仕事であり、ゼロ禅師がここにいれば絶対に反対したことでしよう。

しかしこれほどの緊急事態なのです。自分の身に降りかかることなど、もうススムは気にしている余裕がないのです。

ススムがポケットから取り出したのは、なんと鏡でした。

丸い形をし、化粧に使うコンパクトのように小さなものですが、フタを開き、ススムは呪文をとなえ始めたのです。

となえ終わると、ススムは鏡の表面に目をこらしました。そして待ったのです。

ススムは待ち続けました。

でも何も起こらないではありませんか。ゼロ禅師の話とはだいぶ違うようです。

こんなはずはないのになあ。

ススムは思わず首をかしげましたが、背後から突然声が聞こえて

きたのは、そのときのことでした。

「ススム、こんなところで何をしているの？」

振り返るとお母さんがいました。いつの間にやってきたのかそこに立ち、ススムを見つめているのです。

「ああお母さん。僕はどうしても気になったんだよ」

「おまえが何を気にするというの？」

「もちろん禅師のことだよ。もう何日間も、禅師からは連絡がないじゃないか」

「おまえが手に持っているその小さな鏡は何なの？」

「これは魔鏡といって、禅師からもらった不思議な道具なんだ。この魔鏡を手に、ある呪文をとなえると……」

「どうなるというの？」

「鏡の魔力が、一番近くににいる妖怪を、今すぐ僕の目の前へ連れてきてくれるんだ。妖怪ってね、よく人間に化けて、何食わぬ顔で町の中で暮らしていたりするんだよ。こんな田舎の町にも、一匹ぐらいはいるだろうと思ってね。」

魔鏡が、それを目の前に呼んできてくれる。呼ばれた妖怪は、僕の頼みを一つだけ聞いて、働いてくれるんだよ」

「だがススム、妖怪に頼みごとをしたなら、後で礼をしなくてはな

らないだろう？ 悪い妖怪であれば、『おまえの命をよこせ』と要求してくることだってあるだろうに」

「それはあとで考えることにしたんだよ。とにかく緊急事態なんだもん」

「それで妖怪はやってきたのかい？」

「それが変なんだ。呪文をと覚えてだいぶたつのに、まだ気配もない。僕は呪文を間違えているのかな？」

「いや、呪文は悪くなくろうよ」

「どうしてわかるの？」

「なぜってススム、現に私が、ここへこうして来ているではないか」

「お母さん？」

次の瞬間、とても恐ろしいことが起こったのです。ススムのお母さんはあつという間に姿を変え、なんと巨大な妖怪ギツネになってしまったではありませんか。

毛は長くフサフサとし、関節はやわらかく、身のこなしはまるで猫のようです。ゆっくりと顔を近づけ、妖怪ギツネはススムの体の匂いをひとしきりかぎました。

「驚いたかい、ススム」

「あんたは僕のお母さんじゃないの？」

「お母さんさ」

「どうして？」

「私がおまえの家の柱に住むようになったいきさつを覚えているか？」

「うん」

「その後もおまえの母は、毎日欠かさず私に食べ物を供えてくれたのだよ。そしていつしか、柱の中にいる私に話しかけるようになった。私たちは友人になったのさ。」

そしてある日、おまえの母は私に告げたのだよ。自分がある恐ろしい病気にかかっているということ。治療法のない病気であることを。おまえの母の命は、あと数週間に限られていた」

「お母さんは、それをお父さんに話したの？」

「いいや、私以外の誰にも話してはおらぬ。彼女は家族に心配をかけたくなかったのだ。悲しみを与えたくなかったのだ。そして私にある頼みごとをした」

「何を？」

「自分の死後、自分に代わって家の主婦となり、家族の世話をし、見守り続けることさ」

「お母さんは死んだの？」

これには言葉を返さず、キツネはただうなずいたのです。

「そんなの…」

「事実であるから仕方がない。母が埋葬された場所は私だけが知っておる。時が来れば、おまえを案内してやろう」

「いつ？」

「今ではない。とにかく今は、猫坂を占領している妖怪たちを追い払わねばならぬ。そのためにおまえは私を呼んだのだらう？」

「お母さんが死んでしまったことや、あんたと入れ替わっていることを禅師は知っているの？」

「いや、たぶん知らぬであらう」

「だけど…」

「そんなことよりも、今は猫坂の話しよう。おまえは何をしたいのだ？」

「ええっと、まず禅師の安全を確かめて、それから事件の原因を探りたい」

「町全体が突然妖怪たちに占領されてしまった原因だな」

「うん」

「やれやれ、これは面倒な仕事だぞ。しかしその鏡によって呼び出された以上、私はイヤとは言えぬ。よしススム、ついて来い」

「どうするの？ ええっと、あんたの名前は？」

「ふん、そんなことはどうでもよいではないか」

「だけとお母…」

「そうさ。おまえは私をお母さんと呼ぶクセをつけるがいい。おまえが大人になる日まで、家の主婦としての私の役目はまだまだ何年も続くのだ。」

他の人間のいる前で、私のことを『おキツネさん』などと呼んでみる。どんなトラブルの元になるか。

だからおまえは、私を母と呼び続けるのだ。よいな？」

「うんわかった。お母さん」

こうしてキツネとススムの冒険が始まったのです。ススムを背中に乗せ、キツネは風のように夜の町を駆けたのでした。

市の境界線を越えて猫坂市に入ると、とたんに妖怪たちが襲いかかってきましたが、キツネのすばやさには、まるでかないませんでした。

妖怪たちの間を、キツネはすり抜けていったのです。

首のまわりの長い毛につかまりながら、ススムは目を見張らない

ではいられませんでした。

「ねえお母さん、どこへ行こうとしているの？」

「ゼロ禅師の匂いを探しているのさ。さあ見つけたぞ」

「こんなに早く？」

「ごくかすかではあるがな。ゼロ禅師がこの道を歩いたのは間違いないようだ」

「へえ」

「ススム、この先には何がある？」

「ええっと地下街かな？ 地下鉄の駅もあるよ」

「ああ、その入口はこの先に見えているな。しかし禅師は、何のためにこんな場所へ来たのだろうか。地下鉄は走っておらぬし、買い物をするにも店は開いていない」

「そういいながら、ススムとキツネは地下街の入口を降りていったのです。」

地下街は真っ暗でした。

「お母さん、禅師の匂いはまだするの？」

「もちろん」

ところがススムたちは、思いがけず簡単にゼロ禅師と出会うことができました。ある曲がり角で、出会い頭に顔を合わせるようになったのです。

ススムの持つ懐中電灯の光を見つけ、ゼロ禅師は遠くから警戒して、何者かと探っていたのでした。

「ススム君、これはススム君じゃないか」

「やあ禅師」

「こんなところで何をしているのだい？」

返事をする代わりに、ススムは黙ってキツネを指さしたのですが、ゼロ禅師は一瞬で事情を察したようです。

「あんたは、ススム君の家に住んでいるキツネじゃな」

「そうとも。今日は家賃代わりに働いてやっているのさ。それで禅師、この事件の原因はわかったのか？」

「ああ見当はついてるよ。誰かが『呼び出しの呪文』を使ったのさ。それで市全体が妖怪で満ちてしまった」

ススムは目を丸くしました。

「その呪文はそんなに強力なの？」

「そうなのだよ。ありとあらゆる妖怪を一度に呼び出すことができる呪文だが、あまりに強力すぎて、使うことは禁じられている。」

それを犯人が市内のどこに書いたのか、いろいろ探したが、どうしても見つからない。市全体に広く魔力をおよぼしていることから考えて、てっきり地下街のどこかだと思ったのだが、いくら探しても見つからないのだよ。

だから考え方を変えて、別の場所を探してみようという気になったところさ」

「襲ってくる妖怪は大丈夫だったの？ ケガはしてない？」

「ああ、ありがとう。それは大丈夫だよ。妖怪よけの呪文を今日だけで何十回使ったことか。だがそれはいい。わしは、『呼び出しの呪文』が書かれている本当の場所の見当がついたような気がするのだよ」

「どこ？」

「わしは地下街をさんざん探し回ったが、どこにもなかった」

「うん」

「だがススム君、呪文を書くのなら、地下街よりももっとふさわしい場所があることに、わしはやっと気がついたのだよ」

「それはどこなの？」

「猫坂の頂上さ。高い高いビルの屋上であれば、呪文一つで市全体へ影響をおよぼすことができる。そうは思わないかい？」

「だけど禪師、それはどのビルなの？ 猫坂にはビルがたくさんあるよ」

「呪文を書くのにもっともふさわしいビルとは、猫坂で最も背の高いビルということではないかな？」

ススムとキツネは、ゼロ禪師とはその場で別れることになりました。さすがの妖怪ギツネも、二人を背中に乗せて走ることとはできなかったのです。

ゼロ禪師はうなずきました。

「わしのことは心配しなくていい。妖怪たちを追い散らしながら市外へ出るだけの力は、まだ残っているさ」

その言葉を信じて、ススムとキツネは出発したのです。地下街を飛び出し、再び地上を駆けていきました。

目ざすのは猫坂で最も背の高い建物、『猫坂ステートビル』でした。

ステートビルが見えてくるまでに、ススムたちはまだまだ何匹もの妖怪をよけ、追跡を振り切らなくてはなりませんでした。

「お母さん、大丈夫？」

「妖怪どもをよけるのは難しくはない。だが数が多いので、いい加減うんざりしてきたぞ」

ついにステートビルが見えてきました。電気という電気がすべて

失われている猫坂市内でも、月の光を受けて輝いているのです。

ビルの姿をチラリと見上げましたが、キツネは足取りをゆるめることさえありませんでした。

「ススム、私は一つ気になることがあるのだよ」

「何さ？」

「『呼び出しの呪文』を誰が書いたにせよ、呪文のそばには護衛の妖怪を置いているはずだと思ってな」

「護衛って？」

「誰かが呪文を消しに来るかもしれないではないか。それを防ぐための護衛だよ。巨大で強力な妖怪に違いないね」

「まさかあ」

「まさかであるものか。ステートビルの中に入ったら、私たちは必ずその妖怪と出会うだろう。まず一筋縄ではいかん。作戦を考えておく必要がある」

そんなことを言われても、ススムは何も思いつくことができませんでした。

二人はそのまま、ステートビルの入口へ飛び込んでゆくことになったのです。

ビルの中はもちろんひとけがなく、暗くひっそりしていました。

ススムは不安そうにキョロキョロしていますが、キツネは平気な様子で、トントンと階段を上がってゆくのです。

ついに気持ちを抑えることができなくなり、ススムは懐中電灯のスイッチに手を触れようとしてしまいました。

「それはおやめ、ススム。敵に気づかれることになる」

「うん。ねえお母さん、お父さんやその他の人たちは本当に何も気づいていないの？」

「おまえの母と私が入れ替わっていることかい？ もちろんさ。私がそんなへまをするものか」

「だけどさ……」

「さあ静かにおし。もうすぐ屋上に着くよ。私たちがすることは一つだけだ。呼び出しの呪文の書かれた場所を探すこと」

「うん」

「さあ着いたぞ。この扉を開けると屋上だ。強い風が吹いているかもしれないから、気をおつけ」

屋上は暗いけれど、月があるので懐中電灯は必要ありませんでした。

「ところでススム、禅師から渡された物を、まさかどこかに落としすぎてはいまいな？ ないと困るぞ」

「ペンキのこと？　ちゃんとあるよ。ほら」

ポケットから取り出して、ススムはカラカラと振って見せたのです。黒いペンキの入ったスプレー缶でした。これで呪文を塗りつぶしてしまおうということです。

「お母さん、僕はそんなドジじゃないよ。いつだって…」

「お黙り。いま何か音がしたぞ」

「どこ？」

「右手の物陰。物置小屋のむこうだ。くそ、屋上というから平らで開けた場所かと思っていたが、ごちゃごちゃして何も見えんではないか」

「ねえ僕たち、二手に分かれて探したほうがよくない？　ここは相当広いよ」

「妖怪に襲われたらどうする？」

「そのときは悲鳴を上げるから、助けにきてよ」

「まあそれでよいか。だがよく気をつけるのだぞ。ケガなどされたら、おまえの母に顔向けができません」

ススムとゼロ禅師は翌朝、ある場所で待ち合わせていました。

危険な場所へススムを送ることに、ゼロ禅師もためらいがなかつ

たわけではありません。でも他に方法がなかったのです。

待ち合わせ場所で、ゼロ禅師は気をもみながら待っていたのですが、その心配は結局は不必要なことでした。

時間きっかりに、ススムは顔を見せたのです。

ススムは元気がよく、ケガをしている様子もありませんでした。ゼロ禅師の口から大きなため息が漏れたのは、いうまでもありません。

「ススム君、作戦はうまくいったのかい？」

「ステートビルの屋上へ上がると、呪文はすぐに見つかったよ。僕が見つけたんだ」

「ちゃんとスプレーで塗り消したかい？」

「うん。塗りつぶすのもすぐだった」

「呪文を護衛する妖怪はいなかったのかな？」

「いたよ。ものすごいのが」

「大丈夫だったかい？」

「やつつけたのはあのキツネで、手分けして呪文を探していたから、戦いの様子を僕は見ていないけど、護衛していたのは、石のこん棒を持った鬼だった。ものすごく凶暴なやつ。」

「だけど変なんだ。キツネの言うには、うまくおびき寄せて足を滑らせるように仕向け、屋上のフェンスを突き破って地上へ落下させたんだって。」

「ステートビルを離れるときに見たけど、確かに鬼は地上に落ちて死んでた」

「そのどこが変なのだい？」

「だって僕ははっきり覚えているんだよ。呪文を塗りつぶし終わって、キツネと合流したとき、僕は見回したんだ。屋上のフェンスはどこも壊れてなどいなかった。奇妙に思っ、キツネの目を盗んでひとまわりしたから間違いないよ」

「すると、鬼が地上へ落とされて死んだのは確かだが、足を滑らせてフェンスを突き破ったというのはウソだとススム君は思うのだね」

「そうだよ。あのキツネは、何かとんでもない魔力を使って、鬼を空中へ一気に放り出したのだと思う。」

「ねえ禅師、あんなに大きな敵をいっぺんに投げ飛ばしてしまうような、そんな呪文が存在するの？」

「この質問には、さすがのゼロ禅師も表情をくもらせてしまいました。」

「存在すると思うがね。しかし、たかだか妖怪ギツネに使うことができるような呪文ではなからう」

「でしょう?」

「ああススム君、あのキツネについては、わしももつと慎重であるべきだったよ。ススム君の家に簡単に住まわせてしまったが、思った以上に力のある妖怪なのかもしれない。これからは十分気をつけなくてはならないよ」

とはいえ、猫坂市を襲ったトラブルがこれで終わりを告げたことも事実だったのです。

市民はみな家に帰り、数日たたないうちに、町は元のにぎやかさを取り戻したのです。

敵の出現

ある夜、お母さんと一緒に、ススムは暗い夜のとおりを歩いていました。

ちょっとした用事で出かけ、思いがけず帰りが遅くなってしまったのです。しかも家はまだ遠く、これからまず駅へ行って電車に乗らなくてはなりません。

突然お母さんが、小さく声を上げました。

「おや？」

「お母さん、どうしたの？」

「気のせいか、あるいは見間違いだったか？ いや、そうではないぞ……」

「僕たちの背後に誰がいるの？」

「ススム、今は振り返らないほうがいい。やつの正体がわからん。気がついていないふりをして、もう少し歩き続けよう」

やがて二人の前方に、駅の明かりが近づいてきました。

ここへ達するまでに、あとをつけてくる人物について、お母さんはもう少し話してくれていました。

「ススム、ついてくるのは一人で、年頃の若い娘のように見える。」

そういう娘に知り合いはいるか？」

「ううん、いないよ」

「遠すぎて、顔かたちはまだわからない。すでに数百メートルも私たちのあとをつけている。」

曲がり角や物影を利用して、ここまではうまく身を隠してきたが、駅のホームに出ればそうはいかないだろう。その姿をよく見せてもらおうじゃないか」

キップを買い、ススムたちはホームに上がりました。青白い蛍光灯が一行に長く、並んで光っています。その下で、ススムははじめて彼女の姿を見るようになりました。

ホームのはしとはしに立ち、しばらく互いを観察し合ったのです。

娘といっても、日本人ではありませんでした。きれいな白人だったのです。

髪は金色で、服と瞳に合わせた青いリボンでふんわりととめられています。顔を伏せながら、ススムはチラチラ眺めていました。

やがて電車がやってきました。

ところがどういうことでしょう。女の子は乗車するそぶりを見せないのです。ススムとお母さんだけが乗り込み、電車はドアを閉めることになりました。

そして何事もなく発車したのです。

遠く小さくなってゆく女の子の姿を、ススムはガラス越しに見送っていました。

「ねえお母さん、あの女の子はどうして乗ってこなかったんだろうね。てつきり追いかけてくると思ったのに」

「私もそれが不安だ。何かいやな予感がする」

お母さんの予感は正しかったのかもしれませんが。駅を離れて、まだいくらか走っていないのに、電車が突然、奇妙な具合に変化を始めたではありませんか。

最初に声を上げたのはススムでした。

「お母さん、電車の床がやわらかくなった。ほら、足がもぐりこんじゃう」

「いやススム、床だけではない。壁も天井もみなそうだよ。やわらかくなり、ぬれて光っているではないか」

お母さんはあわててススムを立ち上がらせようとしたが、うまくいきませんでした。足を取られ、ススムは転んでしまったのです。

「お母さん、床はなんだかヌルヌルしてるよ。変な匂いもある」

「これは胃酸の匂いだ。くそ、私たちは妖怪の体内にいるようだ。ここは胃の中だよ」

「僕たちは妖怪に食べられちゃったの？」

「何がなんだか、私にもさっぱりわからん。こっちへおいで。今から呪文で、横腹に穴を開けてやる。妖怪め、覚悟するがいい」

「お母さん」

「ススムは私の後ろに隠れておいで。ちょっと派手な呪文になるからね。目をつぶっておいでよ」

お母さんの言葉に従ったので、呪文の効果で何が起こり、妖怪の胃の中からどうやって抜け出すことができたのか、ススムにはよくわかりませんでした。

ただ妖怪が苦しそうに身をよじり、足元が大きく揺れるのが感じられ、でも気がついたときには、ススムは安全な地面の上にいたのです。

いつの間にか妖怪ギツネの姿に戻ったお母さんが、背中に乗せて運んでくれたのに違いありません。

ほっとして、ススムはあたりを見回すことができました。そして驚いたのは、もう電車の姿などどこにもなかったことです。

ススムの目の前には、何かが横たわっていました。

それはもちろん死んでいました。腹を引き裂かれた、見たこともないほど大きなタヌキだったではありませんか。

翌日、ススムはさっそくゼロ禅師の寺を訪ねました。昨夜の経験

を話したのです。

興味深そうに、ゼロ禅師はうなずきました。

「つまりススム君、そのタヌキ妖怪が電車に化け、君をのみこんだということだね。そして胃の中で消化しようとした」

「だけど運良く、僕は妖怪ギツネと一緒にだったんだよ。ほら、僕の家の中柱の中に住んでいるでしょう？」

「その妖怪ギツネの呪文でなんとか脱出できたというわけだね。タヌキ妖怪が死んだあと、女の子の姿はなかったのかい？」

「ううん、どこにもなかった」

「状況から考えて、その女の子がタヌキをやつっていたと見て間違いない。その子には、その後二度と会っていないのだね？」

「うん。だけどタヌキ妖怪の死体のそばで、僕は変なものを拾ったんだ。だから見てもらおうと持ってきた」

「ほほう、何かな？」

ススムはポケットから取り出して見せたのです。

目にしたとたんに言葉を失い、ゼロ禅師は驚きを隠すことができませんでした。本当に奇妙な物体だったのです。

とがった長いツメでした。驚くほど大きく、しかもグルリと曲がってカーブしているではありませんか。何者かの指から折れて外れ

たものでしょうが、眺めているだけで、この世のものならぬ恐ろしさを感じるではありませんか。

「禅師、これは何のツメなの？」

「タヌキのツメではないのは確かだね。おそらく、ススム君の言っていた娘の物だろう」

「あの女の子がこんなツメを残していったというの？ あの時近くにいなかったのに？」

「いやいたさ。家来のタヌキがうまくやるかどうか、近くへきて様子を見ていたのだろう。だから妖怪ギツネがタヌキの腹を呪文で破ったとき、巻き込まれてしまったのさ。衝撃でツメの先を折ってしまったのだろう」

「女の子の正体は何なの？」

「ススム君、このツメはとても珍しいものだね。しかも重要な手がかりになる。ススム君がどういう敵を相手にしているのか、わしはわかってきたような気がするよ」

「本当？」

「ああ本当さ。このツメの持ち主が敵なのなら、対抗して作戦を立てることができる。ススム君、ちょっと耳を貸したまえ……」

お母さんの野望

こんなに大きな船に乗るのははじめての経験なので、ススムは少し興奮していました。乗船してまもなく甲板の上で風に吹かれながら、お姉さんのミチコもこう言っただけです。

「まあ、ちょっとした体育館ぐらいの広さがあるわね」

本当にその通りでした。これに乗って数日間の航海ができるなんて、ススムは幸せな気持ちでいっぱいだったのです。

ところがその幸せも長くは続きませんでした。出航して夕方になり、ススムたちは船内のレストランへと出かけたのです。

白い布のかかったテーブルがいくつも並んでいます。空いているテーブルへと案内されながら、ススムがさっと顔色を変えたことに気がついて、ミチコは首をかしげました。

「ススム、あそこのテーブルがどうかしたの？」

「お姉ちゃん、見ちゃだめだよ」

「どうしてよ？ ははお母さん、ススムのやつ、あのテーブルのきれいなお嬢さんに興味があるらしいわよ。金髪の女の子が好きなのね」

「違うよ、お姉ちゃん。振り返って見ちゃだめだよ。あの娘がこの間、タヌキ妖怪を差し向けて、僕をひどい目にあわせた犯人なんだよ」

ミチコの表情が一瞬で凍り付いてしまったのは、いうまでもありません。

「あの人？　へえそうなんだ。ちょっとおもしろそうね。お母さんたちはここにいてね。近くへ行つて、私は少し偵察してくるわ」

なんと無謀なことか、止める間もなくミチコは立ち上がり、娘がいるテーブルへと向かつて歩き始めたではありませんか。

ミチコがその次に取った行動は、ススムを驚かせるどころか、恐ろしささえ感じさせることになりました。

娘に連れはおらず、大きなテーブルに一人で座っていたので、イスは余っています。ミチコはそこに勝手に腰かけてしまったのです。

「ちょっとここをお借りしてもいいかしら？」

返事はせず、娘はじろりと目玉を上げただけでしたが、ミチコは言葉を続けました。

「自己紹介をするわね。私はミチコというのよ。あそこのテーブルで目をむいているのが弟のススムで、その隣はお母さん。仕事があるって、お父さんはこの旅行には来られなかったのよ」

娘は答えました。

「私の名はラセツというのだよ。ススムのことは以前から知っている。ゼロ禅師と一緒にあって、私の仕事の邪魔をするいやなやつだ」

「あなたは何をしようとしているの？」

「それはおまえには関係ない。いま話さなくても、明日の夜明けまでにはイヤでも知ることになる。ごらん。ついさっき日が沈んだところだ。今夜は楽しい夜になるぞ」

言葉をかわすのをやめ、ミチコがこちらのテーブルに戻ってくるまで、ススムは生きた心地もしませんでした。ほんの何分間かに過ぎなかったのですが、ずいぶん長い時間に感じられたのです。

食事は早々に切り上げ、自分たちの船室へと戻ってから、ミチコは話し始めました。

ススムは目を丸くしていますが、お母さんは落ち着いています。

「つまりミチコ、今夜のうちに攻撃を仕かけるつもりであるとラセツは宣言したのだね。しかもススムを襲うつもりでいる」

「どんな攻撃を仕かけるつもりなのかしら？ お母さん、船員たちに助けを求めなくてもいい？」

「どうやって？ 怖い娘が呪文をあやつるので助けてくださいとでも言うの？ 誰も信じてはくれないわ。それはそうとミチコ、ちょっと私の目を見てごらん」

もちろんミチコは言われた通りにしました。そして、お母さんとなえる呪文をまともに食らってしまったのです。

そのままミチコは石のように眠り、床の上にボタンと倒れてしまったではありませんか。ススムが思わず叫んだのも無理はないでし

よう。

「あつお母さん、何をするのさ？」

「ちょっと呪文で眠らせたただけだ。心配はない。目を覚ましても、今夜のことは何も覚えていないだろう」

「だけど…」

「ススムは私と一緒に甲板へおいで。ラセツを迎え撃つ準備をしよう」

どうしていいかわからず、ススムは言葉に従うしかありませんでした。夜の甲板は暗く、ひとけもありません。お母さんはサツと妖怪ギツネに姿を変えました。

「さあススム、私の背にお乗り」

「うん」

お母さんの背中に乗ることに、ススムはもうすっかり慣れていました。いつもどおりにお母さんはすぐに駆け出すかと思えました。ところがそうはいかなかったのです。

どこへ通じるものなのか、二人のすぐそばにはドアがあったのですが、大きな音と共にそれが突然破られ、敵が姿を見せたのです。

これにはススムもびっくりしてしまいました。

敵は体が大きく、頭をかめないとドアをくぐり抜けることがで

きません。いかにも鬼族らしい牛に似た顔つきですが、一番の特徴は、なんといつても目玉が3つあることでしょう。

しかも3つ目の目玉は、額の中央で宝石のように輝いているのでした。

ススムは叫びました。

「お母さん、こいつがラセツだよ。ほら、手の指のツメが一つ欠けてるもん」

すでにお母さんは全力で駆け始めていました。うなり声を上げ、もちろんラセツはあとを追ってくるのです。

しかしここは船の甲板です。いつまでも逃げ続けることができないほど広いわけではありません。何を思ったのか、お母さんは突然走る方向を変えたではありませんか。

「お母さん、何をするの？ そっちは海だよ」

ススムは思わず身構えましたが、心配はなかったのかもしれない。

なんとお母さんは大きくジャンプし、船べりを飛び越えてしまったのです。

お母さんは、なんでもない顔で波の上にストンと降り立ち、沈んでしまっどころか、そのまま水面を走り始めたではありませんか。

それは信じられないような眺めでした。

なんでもない土の地面と変わらないかのように、お母さんは駆け
ていたのです。足の裏がぬれることさえなかったに違いありません。

「お母さん、これはどうなってるの？」

「世の中にはさまざまな種類の呪文があり、私はそれを自由自在に
使いこなすということさ」

「へえ」

「ラセツはどうした？」

「あいつも船べりから海へ飛び込んだよ。泳いで追ってくる」

「やつは、私ほど高度な呪文は使えぬということか」

「あつ、ラセツの姿が見えなくなったよ。水中へもぐった」

足の力をゆるめ、やがてお母さんは立ち止まってしまいました。

「お母さん、なぜ立ち止まるの？」

「私は前を見張るから、おまえは後ろをよく見ているのだよ。ラセ
ツがいつどこから現れるかわからないぞ」

「やつは水中から来るの？」

「おそろくな。しっかりと見張るのだよ。不意打ちを食らうのは
めんだ」

「うん」

そうやって何分かがすぎました。波のせいでススムとお母さんはゆらゆらと揺れ続けましたが、それ以外はいっこうに何も起こらないのです。とうとうススムは我慢できなくなってしまうました。

「ねえお母さん、もうあきらめて、ラセツはどこかへ行っちゃったんじゃないの？」

「いや、やつはまだ私たちの真下にいるさ。気配を殺し、水中からチャンスをつかがっているのさ」

「チャンスって？」

「私たちがしびれを切らし、注意力を失うのを待っているのだよ。ステートビルの呪文を消してしまったことで、私たちはやつのうらみを買っているからね。そう簡単に復讐をあきらめてくれるものか」

「じゃあどうするの？」

「いい子だから、私と一緒にこのままお待ち。見張りをおこたるのではないよ」

「うん、あっそうだお母さん」

「どうした？」

「僕は今、ちょっと思い出したことがあるんだ。ラセツのことだよ」

「どんなことだ？ やつの弱点でも見つけたか？」

「タヌキ妖怪をやっつけたとき、僕は小さなツメのカケラを発見したんだ。それについて禅師から教えてもらってたのを、きれいに忘れてた」

「ゼロ禅師は何を言った？」

「それはここでは言えないよ。水の中で、ラセツが聞き耳を立てているかもしれないでしょう？」

「ああ、やつは確かにそうしているだろうな。それでススム、私にどうしろと言うのだね？」

「もしもラセツが水面に現れたら、逃げたりせずに、逆にやつに近寄ってくれる？ やつの鼻先をすっと通り抜けて欲しいんだ。できるだけ近くをだよ」

「なんだか知らんが、危険なことをさせようというのだな。まあいい。一度だけならやってやろう。だが二度は無理だ。ラセツもバカではないから、2回も出し抜くことは不可能だぞ」

「うん、一回で十分だよ」

海の上に立ち、ススムたちはさらに待ち続けました。

そしてついに、ラセツが行動を見せたのです。ススムたちからは少し離れた場所でしたが、突然波が割れ、水音と共に姿を現したではありませんか。

お母さんのように水面を歩く力はラセツにはありません。しかし強い腕力で、イルカのように水面に飛び上がることができるのです。水しぶきを飛ばし、サメのようにススムたちに飛びかかろうというでしょう。

このチャンスをお母さんが見逃すはずはありませんでした。ススムの言った通りに、ラセツへ向けてバネのように駆け出したのです。

両者の距離は、あっという間に縮まることになりました。お母さんが飛び込んでくるなど予想もしていなかったのでしょうか。ラセツは驚いている様子です。

それでも呆然とするようなことなく、腕を伸ばして、ススムたちにつかみかかってくるのでした。

距離はもう何メートルもありません。ススムはこの瞬間を待っていたのです。

ススムの右手はポケットの中にあり、ある物をしっかりとつかんでいました。

ラセツへと向かってススムがそれを投げつけたとき、あまりの意外さにお母さんも目を丸くしたものでしたが、警戒心をゆるめることはありませんでした。

ススムと約束したとおり、ラセツの鼻先をかすめ、お母さんはさっと通り抜けたのです。

ラセツめがけてススムが投げつけたのは、なんと豆でした。

本当に大した物ではありません。どこにでもあるただの大豆だったのです。しかもたった20粒かそこらでしかありません。

妖怪世界の不思議の一つですが、鬼一族はみな豆が苦手だったのです。神話時代にまでさかのぼる話なので、理由は誰も知りません。

タヌキ妖怪のそばに残されていたツメの形から、敵の正体が鬼であることをゼ口禅師は探りだし、ススムに命じて大豆を一つかみ、いつでもポケットの中に入れておくように言ったのです。それが役に立ったわけでした。

ギャーッとラセツの叫び声が海の上に響きました。大嫌いな大豆というだけでなく、目の中にまで入ってしまったのです。

特に額の中央にある第3の目の痛みが激しかったようです。両手で顔をおおい、そのままラセツは海中へ倒れこんでゆきました。

水中に沈み、その姿は見えなくなりましたが、痛みと苦痛は続いていたに違いありません。身をのた打ち回らせているせいで、海面はまるで嵐のときのように波打っているではありませんか。

その後、ラセツが姿を見せることはもうありませんでした。やがて波は静かになってしまったのです。

ススムはおそろおそろ口を開きました。

「お母さん、ラセツは死んだと思う？」

「まさか死にはすまいよ。重要な第3の目をやられたので、一時的

に逃げただけさ。またいつか戻ってくるだろう」

ススムがある方向を指さしたのは、このときのことでした。

「あれお母さん、あそこに何か浮いているよ」

ススムの指を追って目をこらしましたが、お母さんの表情の変化はとても急で、ススムは驚きを感じるほどでした。

「ススム、あれをお拾い。さあ今すぐお拾い。早く」

その物体が浮いている場所へと向かって、お母さんはすでに駆け出しています。いかにもあせっているふうにお母さんがそばに立ち止まると、手を伸ばしてススムは拾い上げることができました。

それは一冊の本でした。お母さんの目の色がさらに変わったのは、いうまでもありません。

ススムの手には、そのずっしりとした重さが感じられました。表紙が革でできた本当に立派な本だったのです。

お母さんの声は少し震えています。

「ススム、表紙を開いてごらん」

ススムはその通りにしました。

本の中身はもちろん白紙ではなく、小さな文字がびっしりと書き込まれていました。

何ページめくっても、やはり同じでした。そしてススムは、妖怪たちが呪文を書くのに用いる文字と似ていることに気がついたのです。

「お母さん、これには何が書いてあるの？」

「おまえには関係のない内容さ。この本は私がもらっておこう」

「禅師にも見せようよ」

「人間なんぞにこれを読むことができるものか」

「でも禅師はいろいろ勉強しているから…」

「お黙り。私はこの本を誰にも渡すつもりはない。それともススム、おまえは力ずくで取り上げようというのかい？」

「だけど…」

「さあいい子におなり。いい子になって、今から10秒間だけ目を閉じていなさい。何も見てはいけないよ。そう、それでいい」

ススムはお母さんの言葉に従うしかありませんでした。そうやって目を閉じている間にお母さんが何をしたのか、知る方法はなかったのです。

ただ手の中から本が持ち上げられる気配があり、目を開くともうどこにもなかった。それが、ススムに感じることできたすべてでした。

ススムとお母さんは船に戻り、ミチコの呪文をとりてやり、そのあとは何事もなく航海が続いたのです。

毛皮が消えた

学校から帰ってきて、自分の部屋の中に入るなり、ミチコは呆然としてしまいました。なんだか見慣れない物が、床の上に大きく広がってあるではありませんか。

どう見てもキツネの毛皮です。

こんなものが家にあるなんて、ミチコは聞いたこともありませんでした。誰が、何のために持ち込んだのでしょうか。

「これはいつたい何に使うものなのかしら？」

ミチコの心の中で好奇心が頭をもたげました。手を伸ばし、震える指先でそっと触れてみたのです。

ススムが家に帰ってきたのは、ミチコよりも少し後のことでした。

階段を登って自分の部屋へ行き、ススムも目を丸くすることになりました。自分の部屋の中に、妖怪ギツネの姿を見つけたのです。

「あれお母さん、僕の部屋で何をしているの？」

キツネは振り返り、口を開きました。

「ススムなの？」

「お母さん、お姉ちゃんはまだ帰ってないの？ もう帰ってくる時間だから、早く変身しないとまずいことになるよ」

「いったい私が何に変身するというの？」

「何言ってるの？ 元の人間のお母さんの姿にだよ。自分の母親が妖怪ギツネと入れ替わっていることを、お姉ちゃんは知らないんだよ。忘れたの？」

「いいえ、忘れてはいないわ…。そうだススム、郵便受けを見てきてくれないかしら？ 私は見るのを忘れていたのよ」

「郵便受けなんて、お姉ちゃんがいつも見てくれるじゃないか」

「いいえ、今すぐ行つてきなさい」

ギツネの口調は思わぬ強さでした。首をかしげながらも、ススムは従ったのです。

郵便受けから二階へ戻ってきて、ススムはキョロキョロとまわりを見回すことになりました。ギツネの姿がなかったからです。

ススムは首をかしげたのですが、思いがけない声が突然部屋の中に響き、びっくりして飛び上がることになりました。

「おい、ススム」

声は確かにそう聞こえたのです。

「だれ？ どこにいるの？」

キョロキョロしながらグルリと振り返り、やっとススムは相手の

姿を見つけることができました。

いつの間にどうやって入ってきたのか、なんとフクロウがいるのです。洋服のボタンのように大きな丸い目をして、こちらを見つめているではありませんか。

ススムは不思議そうな顔をしました。

「今のはあんたがしゃべったの？」

「当たり前じゃないか。フクロウにだってちゃんと口があるんだぜ。ところでススム、オレはおまえに伝言を伝えにきたのだよ」

「伝言？ 誰から？」

「オレの偉大なお師匠様からさ」

「お師匠様って？」

「お師匠様とはこの家に住み、おまえの母親に化けている方のことだ。オレはその弟子なのさ」

「何を習う弟子なの？」

「魔力やら変身術やら、宇宙の秘密やらいろいろさ」

「ふうん」

「ではおまえに、偉大なお師匠様の伝言を伝える。お師匠様はおっしゃった。」

『ススムよ、家へ帰るのが予定よりも遅れる。すまないが、ミチコの部屋に干してあるキツネの毛皮を片付け、押入れの中に隠しておいてくれ』」

ススムは、首をかしげないではいられませんでした。

「キツネの毛皮って？」

「今日はいい天気なので、脱いで部屋の中に広げ、干しておられたそう。学校から帰ってくるミチコに見られる前に、それを片付けておいて欲しいということさ」

「お姉ちゃんの部屋？」

廊下を後戻りし、ドアを開けてススムはのぞき込んだのです。

「ほらね。お姉ちゃんの部屋は空っぽだよ。キツネの毛皮なんてないよ」

「おや本当だ。ススム、おまえが帰ってきたとき、すでに毛皮はなかったのか？」

「このドアが開いていたから、部屋の中はよく見えたけど、何もなかったよ。そのとき、お母さんは家の中にちゃんとしたよ」

「そんなはずはない。お師匠様は、朝からずっと家を留守にしていたはずだ」

「そんなことないよ。僕はついさっきお母さんに会ったもん。その

あと郵便受けを見にいつて、2階に戻ってきたら、あんたがいたんだよ」

「オレはお師匠様には会っておらぬぞ」

「じゃあ入れ違いになったんだね」

「それはありえぬ。お師匠様がお帰りになったはずはない。外で大切な用事をしておられるのだ。途中でちょっと抜け出すなど不可能な用事だ。」

なあススム、これは大事件かもしれないぞ。何かの理由で、ミチコがおまえよりも早く学校から帰ってきたということは考えられぬか？」

「まさかあ」

でもそれを確かめるのは簡単なことでした。ミチコの学校カバンを探せばいいのです。

それが部屋のすみに落ちているを見つけたとき、ススムとフクロウは顔を見合わせないではいられませんでした。

「ねえフクロウさん、これはどういうことだと思っ？」

「おまえには想像がつかぬか？ これは本当に困った事態だぞ。ミチコは普段よりも早く学校から帰宅し、お師匠様が脱いでおいた毛皮を見つけたのだ」

「その毛皮って何なの？」

「なあススム、まさかおまえは、あのキツネの姿がお師匠様の正体であると思っているのではあるまい？」

「えっ違うの？ 僕はてつきり…」

「お師匠様の正体がキツネなどであるものか。毛皮を着て、お師匠様は妖怪ギツネに化けているだけなのだよ」

「どうして？」

「そのほうが、人間たちの目をごまかしやすいからさ。妖怪ギツネなど、猫坂では珍しくないからな。ゼロ禅師の目をあざむくのに、お師匠様も苦労しているのだ」

「なぜ禅師をだます必要があるの？」

「今はそんなことを話している暇はない。学校から早く帰宅し、ミチコは毛皮を見つけたのだろう。そしてほんの好奇心からかもしれないが、毛皮を自分で着てしまったのだ。」

つまり今は、ミチコが妖怪ギツネの姿をしているわけだ。さっきおまえがしゃべったというキツネはお師匠様ではなく、ミチコだったのに違いないぜ」

「そんなまさか…」

「そうとしか考えられぬではないか。おまえが郵便受けを見にいつている間に、ミチコはどこかへ行ってしまったのだよ」

「どうして？」

「すでにミチコは、ミチコではなくなっていたからさ。あれは普通の毛皮ではない。魔力に満ちたとても不思議なものだ。」

お師匠様のような方なら、問題なく着こなすことができる。しかしただの人間に過ぎないミチコが着たときには……」

「どうなるの？」

「ミチコは逆に、毛皮によって支配されてしまったということさ。ミチコはこの指輪をはめていなかったからな」

そういつてフクロウは、翼の下から器用に何かを引っ張り出したではありませんか。」

ススムが目をこらすと、確かに指輪でした。こういう材質なのか、サンゴのような赤い色ににぶく光っているのです。

「それは何をする指輪なの？」

「これを指にはめてさえいれば、普通の人間でもあの毛皮を着て自由に動くことができ、毛皮から支配されたり、乗っ取られたりすることがないのさ」

「じゃあお姉ちゃんは？」

「今も言っただろう？ あの毛皮に乗っ取られ、取り付かれてしまったのだ。自分がいま何をしているのかもわかっていないだろう」

「お姉ちゃんはどこへ行つたの？」

「見当はついていないさ。とにかくススム、おまえはこの指輪をはめてみる」

「うん」

よくわからないまま、ススムはフクロウの言葉に従ったのです。まるであつらえた物のように、指輪は彼の指にぴったりと納まりました。

フクロウは満足そうです。

「よし、それでいい。ススム、おまえはミチコが生まれた場所を知っているか？」

「猫坂市民病院だよ。僕も同じところで生まれたもん」

「その病院は今でもあるのか？」

「うん」

「町の地図を持ってこい。その病院の場所を確かめたいのだ」

さっそく1階へ降りてゆき、お父さんの部屋からススムは地図を持ち出したのです。それを手に再び階段を上がり、自分の部屋の中をのぞきこんだとき、ススムは目を丸くすることになりました。

部屋の中央に、巨大なキツネの毛皮が置かれていたのです。

でもこの毛皮が、お母さんのものではないことは明らかでした。色がまったく違っていたからです。

これは黒に近い暗い銀色をしていました。でも光をはね返し、ところどころまぶしく輝いてもいるのです。

ススムは思わず声を上げました。

「これは何？　なんだかとてもきれいな物だね」

パチリとウインクをし、フクロウは答えてくれました。

「気に入ってよかったよ。これからおまえはこれを着て、ミチコのあとを追いかけてゆくのだから」

「僕が？　どうして？」

「他に行く者はおるまい？　だが心配するな。おまえはその赤い指輪をしているし、ミチコの行き先はわかっている」

「どこ？」

「猫坂市民病院さ。さあ地図を見せろ。ははあ、ここか。おまえは運がいいな」

「どうして？」

「下水道の中をはっていかずにすむからさ。こんな昼間の明るい時間に、この毛皮を着て町の通りを歩くわけにはいかんだろう？」

「それはそうだけど」

「地図を見る。この家から病院まで、ずっと川沿いに川原を歩いてゆくことができるじゃないか」

「川原にも人はいるよ」

「人の目にとまるのは、ある程度は仕方がないさ。おまえは病院へ先回りして、ミチコを待つんだ」

「もしもお姉ちゃんが先に病院に着いていたら？」

「それはありえない。あのキツネは町の地図など持つておるまい？
いいかススム、あの毛皮はミチコではなく、もはやただの妖怪ギツネだということを忘れるな」

「でもやつが病院へ向かうと、どうしてわかるの？」

「それは魔力の秘密に関することだ。やつはミチコが生まれた場所へ行き、ある呪文をとえようとしている。そうすると……」

「どうなるの？」

「ただの毛皮ではなく、やつは一匹の妖怪ギツネとして完全に復活することができる」

「生き返るの？」

「だがそのときには、ミチコは死んでしまつのだぞ」

「まさか」

「まさかではない。さあ早く行け。ミチコの命がかかっているのだ。オレはお師匠様に連絡して、手助けをお願いしてみよう。」

おまえは病院へ行き、やつが呪文をとねえるのをなんとかしても邪魔するのだ。さあ行け。無駄にしている時間は1秒もないのだぞ」

そっくり終わったかと思うと羽音を響かせ、フクロウはあつという間に窓の外へと見えなくなっていました。ススムは一人になってしまったのです。

でもグズグズしている暇はありません。心を決め、毛皮に手をかけました。

毛皮を着る方法について、フクロウは何も説明してくれませんでした。しかし心配は要らなかったのかもしれない。さっと持ち上げて肩にかけるだけで、毛皮のほうから勝手に動き、ススムの体をすっぽりと包み込んでくれたのです。

あつという間にススムの姿は、一匹の妖怪ギツネへと変わったのです。

これで準備は整いました。大きく息を吸い、ススムは窓の外へと体を投げ出したのです。

あとは4本の足に任せ、病院を目指して駆けてゆくだけでした。

毛皮の魔力に、ススムはただ驚きを感じるばかりでした。まるで本物の野生動物のように、すばやく力強く行動することができたの

です。

体の大きさゆえ、目撃した通行人を何人か、もう少しで気絶させてしまうところでしたが、それ以外はスムーズにススムは病院へやってくる事ができました。

太陽はもう沈みかけています。塀を乗り越え、ススムは簡単に敷地へ足を踏み入れることができました。

ところがここで、ちょっとした驚きが待っていたのです。病院には人影一つなく、もうそろそろ灯っていいはずの明かりさえ一つもなく、建物の窓はすべて真っ暗なままではありませんか。

これではまるで廃墟のような眺めです。

いったんは首をかしげましたが、ススムはすぐに納得することができました。建物が古くなったので、病院を改築することが決まったというニュースを思い出したのです。

そのためにみな退去したあとなのでしょう。あと数日で工事が始まるに違いありません。

グズグズしている暇はないのです。ガラスの割れている窓を見つけ、ススムは建物の中へと入ってゆきました。

内部は暗く、薄気味悪く感じないではいられませんでした。ベッドや診察器具はすべて運び出され、どの部屋もガランとしています。

分厚い毛皮の中にいるのに、ススムは思わず体を震わせてしまいました。でも気味悪がってばかりもいられません。

「お姉ちゃんが生まれた場所といえば、やはり分娩室かな？」

すでに日はすっかり暮れていましたが、ススムは院内の案内看板を見つけることができました。

「なんとまあ、分娩室は地下にあるのか」

これはあまりうれしい話ではありませんでした。地上の階ですらこれほど暗いのです。地下など、鼻をつままれてもわからないほどでしょう。

だけど心を決め、ススムは階段を降りていったのです。

地階にはすぐに着くことができました。しかし階段が終わり、最初の曲がり角を曲がろうとしたところで、とうとうススムは立ち止まってしまいました。

ここから先はもう地上からの光も届かず、インクでも流したような闇が広がっているのです。目をこらしても何をしても、もはや何一つ見ることができないのです。

「どうしよう」

前進しなくてはならないとは思っていますが、どうしても足が前へ出てくれません。ススムの前足は、何回か足踏みを繰り返すことになりました。

「おいススム」

暗闇の中から突然声が聞こえてきたのは、そのときのことだったのです。

「ひいつ」

ススムは思わず悲鳴を上げました。背中の毛まで一本残らず逆立ってしまいました。

だけど謎の声がやむことはなかったのです。なんと声は、いかにもおかしそくに笑い始めたではありませんか。

「ふふふ。ススムよ、おまえはなんと臆病なのだ」

その声に聞き覚えがあることに、ススムはやつと気がつきました。

「お母さんなの？」

「もちろんそうさ」

暗闇の中に足音が聞こえ、肩に手が置かれるのをススムは感じました。

「お母さん、もう来てたの？ 僕はもう少しかかるのかと思ってた」

「ミチコの命がかかっているのだ。フクロウから知らされ、飛んできたのさ」

「やつはどこで呪文をとなえると思う？」

「分娩室のある地階であることは間違いない。この廊下の先は少し

広くなっていて、そこならやつにも広々として便利だろう」

「暗闇の中でも、お母さんは物を見ることができるの？」

「もちろんできるさ。妖怪はみなそうだよ」

「お母さんも妖怪なの？」

「当たり前さ。人間だとも思っていたのかい？」

「それはそうだけど…」

しかしススムは、最後まで言葉を続けることができませんでした。お母さんの手が伸びてきて、突然口をふさがれてしまったのです。

「静かにおし。上の階で何か物音がしたぞ」

ススムの体をまるで電気のように緊張が走り、今度は背中どころか、体中の毛が逆立ってしまったのは、いうまでもありません。

だけどもあることに気づき、ススムはお母さんにささやいたのです。

「あれは妖怪ギツネじゃないよ。かすかに光が見えるもん。きっと懐中電灯だよ。禅師が来てくれたのかもしれないよ」

「ここにゼロ禅師が来るものか。私は知らせてなどいない」

そのころにはススムも、状況のおかしさに気がつきはじめていました。階段の上から差し込む光は懐中電灯とは違い、なんだか緑色がかっているのです。いかにも不自然な感じではありませんか。

自分の背中にお母さんがまたがるのをススムは感じました。お母さんがささやきました。

「これはまずいぞ。思ったよりも魔力の強いギツネのようだ。尾をあんなに光らせているではないか」

やがて角を曲がり、妖怪ギツネが姿を見せました。お母さんの言うとおり、長いしっぽをまるで蛍光灯のように光らせているのです。

こんな光景は、ススムは話に聞いたこともありませんでした。本当に不気味な眺めです。まるでこの世のものとは思えません。

「お母さん、どうするの？」

「やつをまず、どこかへ誘い出すほかあるまい」

「どうやって？」

「おまえが何かして、やつを怒らせればいい。あの目をくらん。ランランと輝いているではないか。いかにも短気そうだ」

「僕、そんなことできないよ」

「ええい困った子だ。そこに落ちている古いバケツをおよこし」

ススムはその通りにし、お母さんはバケツを受け取りました。

「お母さん、そんなものをどうするの？」

「決まっているさ」

なんとお母さんは、バケツを妖怪ギツネめがけて投げつけたではありませんか。

ススムは悲鳴を上げそうになりました。バケツは妖怪ギツネの鼻に命中したのです。

青白かった妖怪ギツネのしっぽの輝きが、あっという間に焼けた鉄のように赤く変わり、ススムをさらに驚かせることになりました。

「それススム、ばやばやしているとかがみつかれるぞ」

お母さんを背中に乗せたまま、地上へと続く階段にススムはとっさに飛び込みましたが、妖怪ギツネが駆け出すのももちろん同時でした。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、やつを屋上へ誘い出すのだよ」

「誘い出して、どうするの?」

「私の得意技を使う。やつを地上へ投げ落としてやるさ」

「そんなことをして大丈夫? お姉ちゃんが死んじゃわない?」

「そのくらい加減はするさ。妖怪ギツネの毛皮はとても頑丈なものだ。ちよつとやそつとのことでケガなどしない」

「ああお母さん、屋上へ続くドアが見えてきたよ。あのドアにもしも鍵がかかっていたらどうするの?」

「どうもしないさ」

お母さんは自信に満ちた様子です。手にしていた魔力の杖をお母さんは大きく振りました。

魔力は空中を伝わっていき、ドアを簡単に吹き飛ばしてしまったではありませんか。ススムは足をゆるめる必要さえありませんでした。

妖怪ギツネの鼻先をかすめるようにして、二人は屋上へおどり出ることができたのです。

もちろん妖怪ギツネもすぐ追いついてきます。

お母さんの指示で、ススムは屋上のすみに位置を取り、妖怪ギツネを迎え撃つことになりました。

妖怪ギツネはさつきよりもさらに強くしつぽを光らせ、目玉もギラギラ輝いています。背中の毛はすべて逆立っていますが、4本の足はしっかりと床をつかんでいるのです。

いつ床をけって飛びかかってくるかと、ススムは生きた心地もしませんでした。

ところがお母さんは落ち着いているのです。戦いを楽しんでいるのかもしれない。

「ススム、昔の騎士は、こうやって1対1で決闘をしたものだよ。馬に乗って長いやりを突き出し、互いに突撃するのだ」

「お母さん、僕は馬じゃないよ」

「雰囲気壊すようなことを言うものではないよ。せっかく私は騎士の気分でいたのに、情けないやつだ」

「あの妖怪ギツネの内側にはお姉ちゃんがいるんだよ。忘れちゃったの？」

「忘れるものか。しかし騎士同士の決闘とは、それはそれは勇壮なものだったのだぞ」

「お母さん……」

ススムは口を開きかけたのですが、続きを言うことはできませんでした。床をけり、とうとう妖怪ギツネが突っ込んできたからです。

ところが勝負は、あっけなくついてしまいました。

妖怪ギツネが駆け出すのと同時に、お母さんの指示で、相手めがけてススムも駆け出したのはいいのですが、怖くなって、なんと途中で立ち止まってしまったではありませんか。

おかげでお母さんは、相手までまだまだ距離があるのに魔力の杖を振るう羽目になりました。

だけど魔力に距離は関係ありません。

杖を離れて魔力は妖怪ギツネへと飛びかかり、あっという間に持ち上げ、屋上のへりを越えて、地上へと投げ落としてしまったので

す。

妖怪ギツネの上げる長い悲鳴が、ススムの耳に届くことになりました。樹木にでもぶつかっただけでしょう。バリンと大きな音も聞こえてきました。

ススムがあわてて屋上のへりへ駆け寄ったのは、いうまでもありません。

地上では大きな木が一本、見事にへし折られていました。そのわきに妖怪ギツネが転がっているのを見ることができます。

でもピクリとも動きません。しっぽも光を失い、ダラリとしたままです。

落下の衝撃で破れたらしく、毛皮のおなか裂け、ミチコの姿が見えています。

ミチコはケガをしているようには見え、ほっと息をつきかけたのですが、不意に聞こえてきたキンキン声に驚き、ススムはあわてて振り返ることになりました。

そこには、またあのフクロウがいたではありませんか。

「やあススム、ご苦労だったな」

自分の背中の上にもはやお母さんがいないことに、ススムは突然気がつきました。

「あれ、お母さんは？」

「お師匠様か？ とつくにお帰りになったわい。お忙しい方なのでな。おまえももう家へ帰ってよろしい」

「お姉ちゃんはどうするの？ 毛皮は？」

「後始末はオレがしてやるよ。ミチコを家へ連れて帰るぐらいの魔力なら、オレだって持っているさ」

「へえ」

こうやって今回の冒険は終わったのです。毛皮を脱いで病院を抜け出し、バスに乗ってススムは家へと急ぎました。

家に帰るとミチコがすでにいたというのは、驚くべきことではないかもしれませんが。自分の部屋でイスに腰かけ、うたた寝をしている姿を見つけることができました。

ススムの足音でミチコは目を覚ましたのですが、彼女が本当に何も覚えていないらしいことは、二言三言かわすだけですぐに確かめることができたのです。

台所へ降りてゆくと、お母さんの姿を見つけることもできました。ちょうど夕食のしたくを終えようとしているところでした。

ススムと目が合うとお母さんは口を開きかけましたが、そこへミチコが顔を見せたので、先ほどの冒険について語るのはあきらめるしかありませんでした。

でも今夜のおかずにはススムの大好物を選んでいることから、お

母さんの感謝は十分に感じ取ることができたのです。

雪の怪異 その1

普段の年であれば、猫坂の町にはあまり雪が降りません。

でもあの冬は違っていたのです。まだ12月も終わらないというのに、すでにひざの深さにまで達していました。

当然学校はお休みになり、早めの冬休みが始まっていました。

ススムの家は問題なかったのですが、古ぼけたゼロ禅師の寺は大丈夫だろうか、雪の重みでつぶされていないだろうかと突然気になって、ススムは出かけてみたのです。

だけど寺はしっかりと立っていました。

ゼロ禅師も元気で、ススムを歓迎してくれたのですが、ちょうどそのとき寺を訪れていたお客さんの姿が、ススムをひどく驚かせることになったのです。

ジェームスという人はアメリカ人でしたが、何十年も前に日本に帰化し、最後は猫坂の市長にまでなったことはススムも知っていました。

部屋の中でゼロ禅師と話していたのが、このジェームスの幽霊だったのです。ピンク色のとがった鼻や白い口ひげには、ススムも見覚えがありました。

ゼロ禅師とジェームスの会話は、ちょうど終わるところだったようです。

「では禅師、勝手に申し訳ないが、この件についてはくれぐれもよろしく願います」

「ええ、ジェームスさん。わしもできるだけ努力してみましよう」

その言葉にうなずきながら、ジェームスの幽霊はゆっくりと消えていったのでした。

ほっと息をつき、ススムは口を開くことができるようになりました。

「禅師、今は元市長のジェームスさんだね」

「そうだよ。しかし大変なことを頼まれてしまったな」

「どうして？」

「气象台の予想では、この雪はこれからも止むことなく降り続け、毎日数センチずつ積もってゆくそうだよ」

「今だって、もうかなり積もっているもんね」

「それが、降りやむ可能性がほとんどないというのだよ。いまに猫坂の町は、完全に雪の下に埋もれてしまうだろう」

「それとジェームスさんが関係あるの？」

「そつらしい。ジェームスさんによると……」

ゼロ禪師は説明を始めたのです。

その2

お母さんの予想外の頑固さに、ススムは当惑してしまいました。寺から帰るとさっそく相談を持ちかけたのですが、まるで聞く耳を持たないのです。

「でもねえ、お母さん…」

「お黙りススム、私はゼロ禅師が苦手なのだ。協力する気などないぞ。そう返事をしてやれ」

「だけどお母さん、いま猫坂の町が大変なんだよ。このままでは、あと一週間で雪の下に完全に埋もれちゃうんだ」

「それがどうした？」

「お母さんは、そんなに禅師が嫌いなのか？」

「ああ嫌いだね。私の口の中にワサビを入れたのは、あいつではないか。涙が出て、私がどれだけ苦しんだことか」

「でもさあ…」

「ああうるさい。とにかくお黙り」

クルリと背中を向けて、お母さんは自分の部屋の中へと消え、ピシヤリとドアを閉めてしまいました。

こうなるともう絶対に言うことを聞いてくれないのは、ススムも

よく知っていました。どうしようもありません。

もちろんその後も雪は降り続いたのです。学校だけでなく、会社や商店までが次々に閉じられ、市民の生活は不便さを増してゆきました。

除雪も追いつかず、あちこちで道路まで不通になり始めたのです。人や物の動きは、今やかろうじて地下鉄だけが支えていました。

日々の買い物や食べ物の入手にも困るようになり、しゅしゅながら、とうとうお母さんも承知してくれたのでした。

「だがススム、私はゼロ禅師と行動を共にする気はないぞ」

「じゃあどうするの？ 魔力エンジンの停止方法は禅師しか知らないんだよ」

「禅師の代わりに、おまえが私についておいで。エンジンの操作方法は、おまえがゼロ禅師から習えばよい」

最善の策とはいえなかったのですが、他に方法はありませんでした。雪をかき分けて、ススムは寺へと急いだのです。

こういう事態を予想していたのかもしれませんが。ススムの口から事情を聞かされても、ゼロ禅師は驚いた顔を見せませんでした。すぐに紙とペンをとり、機械の停止方法を説明してくれたのです。

古来から、猫坂は魔力の強い町でした。だから現在でも多くの妖怪が住んでいるのです。

魔力研究所とはもう何十年も昔、ジエームスが市長だった時代に作られたものでした。魔力エネルギーを人類の生活に役立てる研究を行っていたのです。魔力エンジンと呼ばれる装置を開発しようとしていました。

この魔力研究所は、猫坂の地下深くにありました。万一事故が起ころうと、地上に影響が及ばないようという配慮だったのです。

でもおかげでススムとお母さんは、長い長いトンネルを歩いていなくてはいりませんでした。さっそくお母さんが不満を口にしたのは、いうまでもありません。

「ススム、まだ着かないのか？ 私は足が疲れてしまったぞ」

「文句言わないでね。僕だって歩いてるんだから。ねえお母さん、気のせいかな？ なんだか暑くなってきたんじゃない？」

「気のせいではなからうよ。魔力エンジンとは、まわりの魔力をいくつか所に集める装置なのだろう？ 魔力が集まる場所には、自然と熱も集まることになる。」

そういう性質があるのさ。だから町の上空には逆に寒気が集まり、あのような大雪になってしまったのだよ」

「へえ」

二人は歩き続けましたが、トンネルの温度はゆっくり上昇を続け、とうとうススムは上着を脱がなくてはならなくなりました。

「お母さんは暑くないの？」

「この毛皮を着ているかぎり、少々の暑さ寒さは平気さ。考えてみれば、まわりの温度に敏感な人間とは不便な生物だな」

「でもねえお母さん、人間だって…」

ところがススムの言葉は途中で止まってしまいました。背中をくわえて突然引き戻され、ひっくり返りそうになったからです。

「お母さん、何をするの？」

ススムの耳に口を近づけ、お母さんはそつとささやきました。

「静かにおし。その角のむこうに何かの気配があるぞ」

「気配って？」

「息を潜め、何者かが待ちかまえているということさ。ススム、魔鏡は持ってきているね？」

「うん、ポケットの中にあるよ」

「私にお貸し。念のために呪文をかけておこう。よし、これでいい。さあススム、行くぞ」

魔鏡を返してもらい、あまり気は進まなかったのですが、背中を押されるようにして、ススムは前進をはじめました。トンネルはここでカーブになっていて、それを曲がるとすぐに相手の姿が見えてきたのです。

だけど意外な姿に、口をポカンと開けてススムは立ち止まってしまいました。お母さんは油断のない目つきをしています、二人の前に現れたのは、なんと小さな女の子だったのです。

女の子はたった一人で、赤いきれいな着物を着ていました。

手には盆を持ち、透明な氷の浮いたグラスを二つ乗せていることがわかります。いかにも冷たそうな飲み物ではありませんか。

女の子は言いました。

「ようこそおいでくださいました。お飲み物などいかがですか？」

振り返り、ススムはお母さんと顔を見合わせないではいられませんでした。

お母さんが言いました。

「私には要らぬ。ススム、おまえが二つともお飲み」

「えっ？」

目を丸くしたのはススムも女の子もほとんど同時でしたが、とにかくススムは手を伸ばすことにしたのです。でもススムの指がグラスに触れる直前に、再びお母さんの口が動きました。

「ススム、その子に鏡を貸しておやり。鼻の頭に何かついてるよ」

女の子は顔をパツと赤くしました。ポケットから取り出して、ススムが魔鏡を貸してやったのは、いうまでもありません。

だけど鏡の中をのぞき込み、女の子はすぐに不思議そうな顔をすることになりました。

「私の鼻のどこに物がついているのです？ 何もついてはおりませんよ」

お母さんが答えました。

「おや、その鏡の中に、おまえは自分の顔を見ることができるのかい？」

「当たり前ではありませんか」

女の子から受け取り、魔鏡をたたみ、ススムはポケットの中になりました。

お母さんがクスリと笑います。

「ススム、ついさっき私はその魔鏡に呪文をかけただろう？ あれは、人間の姿がその鏡には映らなくなる呪文だったのさ。その鏡に姿を映すことができたのなら、そいつは人間ではないということになるね」

お母さんがそういい終わるころには、あれほどかわいらしかった女の子の表情はすっかり変化していました。あざむかれたことに気がついたのでしょうか。

次の瞬間には表情だけでなく、女の子の姿全体が大きく変化する事になりました。突然ムクムクとふくれ上がり、姿を現したのは、

なんとお母さんにも負けないサイズの犬だったのです。

それは恐ろしい眺めでした。ススムは呆然と見上げるしかありません。

犬の筋肉は引き締まり、黒く短い毛の下にゴツゴツと透けて見えています。足はしっかりと床をつかみ、しっぽはピンと立ち、敵意を隠そうともしません。

ただど何か変なのです。犬はまったく静かで、うなり声やほえ声どころか、ハアハアという息づかいさえ聞こえないではありませんか。

「お母さん、これはどうなってるの？」

不思議そうな表情で、ススムは振り返らないではいられませんでした。お母さんも少し困惑した様子です。

「ススム、どうやら魔力エンジンは、あまり調子がよくないようだね」

「どうということなの？」

「スイッチを切りにきた私たちを追い返すために、この猛犬を作ったのだろうが、なんとこの犬には頭がないではないか」

「しっぽは2本あるよ。前と後ろに1本ずつ」

「この犬には上半身がないのさ。下半身を二つ、向かい合わせにくっつけてあるだけだ。よくごらん。足は4本とも後ろ足だよ」

本当にお母さんの言うとおりだったのです。ススムもあきれないではいられませんでした。頭がないのでは、犬は見ることも聞くことも、匂いをかぐこともできません。

その後もでたらめに足を伸ばして、犬はひとしきりあたりを探っていました。もちろんススムたちを捕まえることはできず、やがて見当違いの方角へと歩き出し、そのまま見えなくなってしまったのです。

「お母さん、何がどうなってるの？ 僕にはよくわからないや」

「今も言っただろう？ 魔力エンジンはひどく調子が悪いらしいのさ。整備もされぬまま、何十年も放置されていたのだろう？」

「うん、そうなんだろうね」

二人はさらにトンネルを進み続けました。

お母さんと一緒に歩くことに、ススムは特に不安を感じませんでした。お母さんは強く大きく、また魔力の使い手でもあるのです。お母さんを打ち負かすことができる者など、そうそう存在するとは思えません。

ところがお母さんにも弱点があったのです。数分後、ススムは驚きを隠すことができなくなりました。

懐中電灯で前を照らし、トンネルの中を順調に進んでいたのですが、突然お母さんが立ち止まってしまったのです。

「お母さん、どうしたの？」

お母さんは少し苦しそうに答えました。

「ああススム、私はこれ以上前へは進めなくなった」

「どうして？」

「トンネルの中がさらに暑くなったことに気がついただろう？ 魔力エンジンが、猫坂中の魔力を吸い集めているからだ」 魔

「そのスイッチを切りに僕たちは行くんだよ」

「だが私は、これ以上一步も前へ進むことができない。周囲の魔力が強すぎ、体にまとわりついて、もう苦しくてたまらないだよ。今にも気を失ってしまいそうだ」

「お母さん！」

「いや、これ以上前進しなければ、気を失うことまではないだろう。この先はススム、おまえが一人で行くしかないね」

「えっ？」

思いがけないことでしたが、お母さんの言うとおりにするほかないようでした。しゅしゅススムは首を縦に振ったのです。

「だけとお母さん、この先は僕一人で大丈夫かなあ」

トンネルの中に、ススムの声が不安そうに響きます。そんなに苦

しいのか、お母さんはとうとう腹ばいになってしまいました。

「お母さん」

「私なら心配いらない。おまえが戻ってくるまで、ここで休んでいることにしよう。これを持っておいき。きつとおまえを守ってくれるだろう」

キツネのおなかを留めているボタンが1つか2つ、パチンと外れるのがススムの目に入ったのは、このときのことでした。

毛皮の内側にいる者が姿を見せようとしているのでしょうか。思わず胸がドキリとして、ススムは見つめないではいられませんでした。

でも期待は外れてしまったのです。毛皮の中にいる者が姿を見せたのではなく、ススムに見ることができたのは腕だけだったのです。

だけど肌の白い、女らしいきれいな腕ではありませんか。その手は魔力の杖をつかんでいたのです。

魔力の杖が、ススムの前に差し出されました。

「ススム、この杖を持ってお行き。きつとおまえを守ってくれるだろう」

「それがなくてお母さんは大丈夫なの？」

「ふふ、杖などなくても多少の呪文は使えるさ。自分の身を守ることはできる。さあ、早くおとり」

ススムは言葉に従いました。

魔力の杖とは学校で使う定規ほどの長さで、あまり大きなものではありません。手の中に握り、ススムは何回か振り回してみないではいられませんでした。

だけど振り回して何が起こるというわけではなかったのです。光を発するわけでも、火花が散るわけでもありません。

「お母さん、これは本当に魔力の杖なの？」

「私の命よりも大切なものさ。ていねいに扱いなさい」

「うん」

「では行っておいで。妖怪どもの相手は、みなその杖に任せるがいい。おまえはただ、魔力エンジンのスイッチを切ることだけ考えればいいのだよ」

「わかった」

立ち上がり、ススムは歩き始めました。たった一人の冒険が始まったのです。

最初の曲がり角を曲がってしまうと、振り返ってもお母さんの姿は見えなくなりました。ススムは本当に一人になったのです。

トンネルはしばらくそのまま続けました。だけどやがて少しずつ広くなり、いつの間にか大きな部屋の中にいることにススムは気が

ついたのです。

目の前には壁があり、ドアが一つあるのを見ることができます。

このドアのむこうに魔力エンジンがあるのだということは、ゼロ禅師から教えられていました。ゼロ禅師は簡単な地図を描いてくれたのです。

ドアに鍵がかかっている様子はありませんでした。

ノブに手を伸ばしかけたのですが、ススムは一瞬ためらうことになりました。ドアの脇に誰かが立っていることに気がついたからです。

「お姉ちゃん」

それは本当にミチコだったのです。学校帰りなのか、地底のこんな場所なのに制服を着て、カバンまで持っているのが奇妙でしたが、見間違いではありません。ススムの目には本人に思えました。

「ススム、こんなにおもしろい地底の大冒険に私を誘わないなんて、ひどいじゃないの」

「だってお姉ちゃん」

「あんた一人なの？ ゼロ禅師はいないの？」

「あれ？ なぜ禅師が一緒だと思うの？」

「決まっているじゃないの。自分たちの都合で何十年もほっておい

たくせに、やっと自力で動き始めた魔力エンジンを邪魔に思うような地上の人間たちが相談を持ちかける相手なんか、ゼロ禅師以外にないじゃないの。

ねえススム、あんたはゼロ禅師と一緒に来たんでしょ？」

「ううん、僕は一人だよ」

「うそおっしゃい。ゼロ禅師はどこに隠れているの？ 見つけ出して、背中をけつとばしてやるわ」

「お姉ちゃん黙れ」

魔力の杖を取り出し、ミチコに向けてススムは軽く振ったのです。

思っていたとおりこのミチコは偽者で、杖の魔力を受けてあつという間に正体を現し、毛むくじらの真つ黒なコウモリに変化したではありませんか。そしてバタバタと羽ばたき、あわてて逃げたのです。

ため息をつき、今度こそ手を伸ばして、ススムはドアを開けました。

その3

魔力エンジンとは、思っていたよりも小さな機械でした。第1号の試作品だったからかもしれません。

洗濯機ほどの大きさしかなく、部屋の中央に置かれていました。

形は少しヒョウタンに似ています。鉄でできたボディーの上にスイッチがいくつも並んでいるのを見ることができます。

ランプがいくつか点灯し、メーターの針は何かの数字を示しています。

この針はもう少しで振り切ってしまいそうで、この場所に集まっている魔力の強さを表すのでしょうが、でもお母さんとは違って、ススムは何も感じるできませんでした。

ゼロ禅師の説明から、ススムが切るべきパワースイッチは一番右にあるやつだとわかっていました。さっそく彼は手を伸ばしたのです。

ところがススムの指は、スイッチに触れることができませんでした。まるでウサギのように、突然魔力エンジンがピヨンと前方へ飛んで、逃げたからでした。

驚くというよりも、ススムは思わず笑い声を上げてしまいました。

「こら、逃げるんじゃないよ」

もちろんススムは追いかけてました。ただ魔力エンジンは、またピョンと飛んで逃げるのです。

ススムが再び追いかけたのは、いうまでもありません。しかし魔力エンジンも逃げ続けました。

ススムもあきらめるわけにはいきません。息をはずませながら、後ろを走ってゆくことになりました。

まるで鬼ごっこをして遊んでいるように見えたかもしれませんが、ただどついに、魔力エンジンはドアを突き破り、部屋の外へと出てしまったのです。

もちろんあとを追って、ススムも廊下へ飛び出してゆくことになりました。ここから追いかけてここが始まったのです。

「待てえ」

魔力エンジンが姿を変え始めたことに気がついたのは、このときのことでした。

最初ススムは自分の目を信じることができなかったのですが、魔力エンジンは二つのタイヤを生やし、とうとうオートバイへと姿を変えてしまったではありませんか。

もちろん誰も乗っていないオートバイです。アクセルを吹かすものだから、ススムは顔いっぱい排気ガスを引っかけられることになりました。

オートバイが相手では、ススムは追いつけっこありません。かと

いつて立ち止まるわけにもいきません。あつという間に見えなくなったオートバイのあとを追ひ、ドタドタと駆けていったのです。

お母さんと別れた場所までは、すぐに戻ってすることができました。

突然現れたオートバイには、さすがのお母さんも驚いたのです。う。目を丸くして見送ったところへススムがやってきたのです。

「お母さん」

「ススム、今のオートバイはなんだ？ 誰も乗っておらぬのに、風のようにかけて行っただぞ」

「あれは魔力エンジンが変身した姿なんだよ。早く追いかけてくちや」

「なんてことだススム、私の背中にお乗り」

考える間もなく、ススムは言葉に従ったのです。お母さんはすぐに全力で走り始めたのですが、ススムはおかしなことに気がつきませんでした。

「あれお母さん、魔力が濃すぎて苦しいんじゃないの？」

「それが突然楽になったのさ。オートバイに変身するときに、魔力エンジンは相当量の魔力を消費してしまったらしい。あつという間に薄くなった。もう心配はないさ」

オートバイのあとを追ひ、ススムとお母さんは走り続けたのです。

「お母さん、この道の先はどうなってたっけ？」

「一ヶ所、地底の裂け目を渡る橋がある他は一本道のトンネルだったよ」

「うん、あれはすごい橋だったね」

お母さんの背中につかまっていながらも、ススムはありありと思ひ浮かべることができました。大地が大きく裂け、まるで溪谷のようになつた場所があるのです。

ススムたちが進んでいる道は、細い橋になつてそこを渡るのです。

「だからススム、やつが私たちを待ち伏せするとしたら、あの橋だろうよ」

「どうして？」

「狭くてやたら高くせにガードレールもない。私たちはトンネルから出た直後で、見通しはきかぬ。『わっ』と飛びかかれたら、反撃できないではないか」

「その橋まであとのくらい？」

「ああトンネルの出口が見えてきたぞ。気をおつけ」

そうやって二人はトンネルから飛び出していったのです。

橋は長く、本当に狭く、まるでワリバシの上に乗せられたような気がススムはしたものでした。

お母さんの言うとおり、ここで襲われたらひとたまりもありません。そしてそれはまったく正しかったのです。

二人は身構えながら橋にさしかかったのですが、誤算の一つは、敵が上からやってくるとは想像もしていなかったことでした。

突然のエンジン音に、二人は思わず上を向いたのです。そして音の正体に気がつきました。

もちろんオートバイではありません。二人をめがけて飛行機が一機、かなりの速度で飛びかかってくるところだったのです。

魔力エンジンが変身したものですから、あまり大きな飛行機ではありません。せいぜい大型模型飛行機というところでしょうか。

それでも大きな音で翼を鳴らして、プロペラをブンブン回転させています。体当たりしようというのかもしれませんが。

あまりのことにお母さんでさえ立ち止まり、思わず頭を引っ込めてしまいました。

翼の先とはいえ、まともにぶつけられたのでは、ススムはひとたまりもありません。あっという間に、お母さんの背中から振り落とされてしまいました。

しかもここは、ガードレールもない狭い場所なのです。すぐに橋からも転げ落ち、悲鳴を上げながら、どこまで深いかもわからない

暗闇へ向かって、ススムは落ちていったのです。

その4

雪がとうとう降りやんだことは、地上の人々にもすぐにわかりました。戸口の前に積もった雪をかき出し、おもてへはい出して、みんなほっとした表情で空を見上げたものでした。

ゼロ禅師もその一人だったのです。今日あたり屋根の雪下ろしを始めなくてはならないと思っていたところなので、本当に胸をなでおろしました。

雪がやんだということは、ススムとキツネが魔力エンジンの停止に成功したからに違いありません。

ところがゼロ禅師の安心も長くは続きませんでした。部屋のすみの暗がりには何者かが潜んでいることに突然気がついたのです。

「おや、どちら様かな？」

だけど返ってきた返事はトゲトゲしいものでした。あの妖怪ギツネが姿を現したのです。

「おいゼロ、おまえのせいでススムは大変なことになってしまったのだぞ」

怒りに満ちて、キツネの目はランランと輝いているではありませんせんか。

「ススム君が？ 魔力エンジンはどうなった？」

「ふん」

鼻息も荒く、キツネはゼロ禅師の足元へ何かを放り出しました。床にぶつかって、ガチンと音を立てます。

ゼロ禅師が目をこらすと、大きく変形した機械部品のようなものでスクラップ同然ではありませんか。

「これは何かね？」

「魔力エンジンの成れの果てさ。私がめちゃくちゃに壊してやった。ススムにあんなことをされて、冷静でおられなかったのだね」

「ススム君はどうなった？」

「魔力研究所の手前に、巨大な大地の割れ目があることを知っていたよう？ それを渡る橋の上で襲われたのだよ」

「それで？」

「あの底なし穴の中へ、ススムは落ちていったのさ」

「まさか」

「まさかではないぞ、ゼロ。しかしススムもケガはしておるまい。私が魔力の杖を貸し与えていたからな」

「魔力の杖だって？ あんたはそんなものを持っているのかい？」

「そんなことは今はどうでもよい。問題なのは、あの底なし穴から

どうやってススムを助け出すかということだ。おまえのせいで、私はこれから泥棒をしに行かねばならんだぞ。

本当ならおまえを食い殺してやりたいところだが、ススムのことを考えると、そうもいかぬわ」

「待てキツネさん、もしやあんたは、大野家に所蔵されている『ムササビ笠』を盗みにいくつもりかね？」

「よくわかったな。だが止めても無駄だぞ。あの穴を飛び降りるには、どうしても必要なのだ」

「止めはせんよ。わしにいい考えがあるのさ。おや、あれはどこに置いたのだったか。確かこの物置の中だと思ったが」

戸を開け、ゼロ禅師はゴソゴソと中を探し始めたではありませんか。そして古ぼけた笠を取り出したのです。

それは昔風に本物のワラでできていて、手で持つのではなく、帽子のように頭にかぶる笠でした。

「ほらキツネさん、見つかったぞ」

「それは何だ？　ずいぶん汚いものだな」

「古いものだから仕方がないさ。しかしよくごらん。これはムササビ笠にそっくりではないかな？」

「まあな。しかしそんなものをどう使うのだ？」

「それを今から説明するぞ。まあよくお聞き」

その5

「いたあ」

そのころススムは、しきりに自分の腰をさすっていました。

魔力の杖がいくらブレーキをかけてくれたといっても、あの高さから落ちてきたのです。穴の底にぶつかるとき、多少の痛みはあつて当たり前でしょう。

でも幸運にも、どこにもケガはないようでした。少し休んで痛みがやわらぐと、やっと立ち上がる気持ちになりました。

「ここはどこなんだろう?」

ススムはキョロキョロとまわりを眺めました。

地底なのだからもちろん暗いのですが、魔力の杖が蛍光灯のようにぼんやりと輝いて、光を作り出してくれました。だからススムは見る事ができたのです。

よくみると、足元には道があるではありませんか。ハイキング道のようにちやちなものだけれど、道には違いありません。

「この道をどっちへ行けばいいんだろう?」

手がかりはなく、ススムは困ってしまったのですが、頼りになるのはやはり魔力の杖でした。

まずススムはあてずっぽうに左へ行こうとしたのですが、どういうわけか魔力の杖は不意に光るのをやめ、あたりは真っ暗になってしまったのです。

当惑して、ススムは体を右に向けました。するとどうでしょう。魔力の杖はすぐに光を取り戻したのです。

「はあ、右へ行けということなんだね」

ススムは歩き始めました。もちろん魔力の杖は輝き続けたのです。

杖の光以外は真っ暗だといっても、周囲に音がなかったわけではありません。右手のどこかでサラサラと水が流れているのをススムは耳にすることができました。

「ふうん、この穴の底にも小川があるんだな」

ススムは歩き続けました。やがて前方に小さな家が姿を現し、彼は目を丸くすることになったのです。

それは小屋のように小さな家でした。一軒だけポツンと立ち、あまり立派にも見えません。だけど窓からは光が漏れているではありませんか。

足音を忍ばせて近寄り、ススムはそつと中をのぞき込んだのです。

思いがけない光景に、ススムははつと息をのみました。四角い部屋の中央にいろりがあり、そこで燃える炎がまわりをオレンジ色に照らしているのです。

部屋の中は雑然とし、あまり片づいていないとはいえません。こんな地底にも動物がいて、ここに住む人はそれを狩って生活しているのでしょうか。毛皮が何枚か壁にかけられています。

でもススムを驚かせたのは、その住人の姿だったのです。

「あれをヤマンバというんだな」

声には出しませんでした。ススムは思ったのでした。

いつから切っていないのか、バサバサした髪は腰に届く長さがあります。顔も手足もしわだらけで、いったい何歳なのか見当もつきません。

着物はぼろぼろで、色の違う布や毛皮を使って、あちこちにツギが当てられています。牙はとがり、ツメもクギのように長い恐ろしい妖怪なのでした。

ススムはヤマンバの小屋の中をのぞき込み続けたのですが、あるものを発見して、突然胸がドキンとしました。

部屋のすみには棚があり、道具類が雑然と乗せてあります。その中に分厚い本が混じっていることに気がついたのです。

表紙は革で作られ、立派すぎて、この場にはどうも似つかわしくありません。ただススムを驚かせたのは、その本にはどこかで見覚えがあることでした。

すぐに思い出すことができました。お母さんが手に入れ、大切にうに毛皮の中に隠している1冊です。あの本は3巻でセットになっ

ていて、そもそもお母さんは、それを探しに人間世界へ来ていたのです。

あの棚の上にあるのは、その3冊のうちの1冊に違いありません。

体が熱くなるような興奮をススムは感じ始めました。この地底からどうやって脱出するかという問題はひとまず脇に置き、『どうしてもあの本を手に入れることができるだろう』と考え始めたのです。

あの本を手に入れ、手渡すことができれば、きっとお母さんは喜んでくれるに違いありません。

ススムは頭をしばらくしましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。

相手はあんなに恐ろしそうな妖怪なのです。正面からぶつかっても、まず勝ち目はないでしょう。

それにこうやって小屋のすぐ外にいては、いつ見つかってしまうかもしれません。ススムは、いったんこの場を離れることにしたのです。

足音をしのばせ、ススムはゆっくりと歩き始めました。そしてすぐに、さっき水音を聞いた小川のそばまでやってくることができました。岩の陰になって、ここならヤマンバに見つかることはないでしょう。

地面に腰かけ、ススムは考え続けました。

だけど何の結論も出ませんでした。頼りになりそうなのは、結局

魔力の杖以外になかったのです。

ススムがあることを思いついたのは、この瞬間でした。

「なんとかして、僕はこの魔力の杖を使いこなすことができないかな」

もちろんススムに魔力の心得があるわけではありません。だけど、とにかく試してみることにしたのです。

その6

日がすっかり暮れたことを確かめてから、ゼロ禅師とお母さんは寺を出ました。目指すのは、もちろん大野の屋敷です。

屋敷の前に着きました。もう夜だし、降りやんだといっても深い雪におおわれているので、あたりに人影はありません。何かをこっそりやるには好都合ではありませんか。

お母さんが驚いたのは、雪の上に指で、ゼロ禅師が屋敷の見取り図をさっと描き始めたことでした。いかにもテキパキとしているのです。

「ゼロ、どうしておまえが屋敷の中の様子を知っているのだ？」

「この家の主人から、少し前に妖怪退治を頼まれたことがあったのさ。結局は断ったのだからね」

「なぜ断った？」

「今はそんなことよりも、屋敷の中のことを話そうじゃないか。値打ちのある古い道具をコレクションすることを、この屋敷の主人は趣味にしていた。」

そのコレクションを、小さな博物館のようにして飾っているのだよ。ムササビ笠が展示してあるのは、ほれこの部屋さ。

鍵のかかるガラス戸棚に入れてあるが、ガラスを壊すのは簡単なことじゃろっ？」

「おまえは何をする？」

「わしはここに残って、物音を聞きつけた家人が飛び出してきたら、一芝居打つことにしよう。なあに、まず失敗はしないさ」

ゼロ禅師の予想は正しかったようです。足音をしのばせ、お母さんは屋敷の中に忍び込むことに成功しました。そしてゼロ禅師のいうとおりの場所でムササビ笠を見つけ、盗み出したのです。

戸棚のガラスを割るときには、もちろん大きな音がしました。それだけでなく、警報ベルまでが屋敷中に鳴り響いたではありませんか。

笠を口にくわえ、お母さんは身をひるがえらせることになりました。もう一度ガラスを割ってお母さんが外へ飛び出してきたのが、さっきゼロ禅師と申し合わせていた窓だったのです。

ガラスのカケラをまき散らしながら雪の上に降り立ってさっと駆け出し、お母さんがあつという間に姿を消してしまったのは、いうまでもありません。

屋敷の人々はもちろんすぐに追いかけてきました。でもこの人たちが発見したのは妖怪ギツネではなく、なんと雪の上でしりもちをついているゼロ禅師の姿だったのです。

「ゼロ禅師、どうなさったのです？　泥棒の姿を見ませんでしたか？」

起き上がるのを助けてもらいながら、ゼロ禅師は頭をかきました。

「いやいや、ひどい目にありました。あんなに大きな妖怪ギツネは見たこともありません。おたくの窓を突き破って突然飛び出してきたのです。妖怪ギツネにとっても思いがけないことだったらしく、わしと正面衝突してしまっていますな」

「そのキツネは、この屋敷から大切なものを盗んでいったのですよ。すぐに捕まえないと」

「いや、あとを追う必要はありませんまい。わしとぶつかったショックで、せつかく盗んだ物をやつは落としていきました。ほら、ここにありますよ」

そういつてゼロ禅師は、古ぼけたあの笠を取り出したのです。

こんなに暗い中では、当然かもしれません。人々はすっかりだまされ、お礼まで言つてゼロ禅師から笠を受け取り、屋敷の中へ戻つていったのでした。

そのころお母さんは地下トンネルを進み、もうあの橋までやってきていました。

その頭にはムササビ笠が乗り、笠を留めるヒモも器用に結び合わされています。そして息を吸い、お母さんは橋の上から身をおどらせたのです。

もちろんいつたんは落下を始めたのですが、ムササビ笠には強い魔力があります。すぐに風をはらみ、まるでパラシュートのように働き始めたのでした。

名前のとおり本当にムササビのようではありませんか。ゆっくりとした速度で、お母さんは降下してゆきました。

その7

そのころススムは、魔力の杖の使い方をいろいろと試しているところでした。しかし、なかなかうまくいきません。

「おい魔力の杖、なんとか言え」

でも何も起こらないのです。光が消えることはありませんでしたが、何か役に立つ道具が現れるわけでも、どこから頼もしい味方を呼んでくれるわけでもないのです。

ススムは、だんだんイライラしてきました。

「おいおまえ、僕をバカにするんじゃないぞ。お母さんに言いつけるぞ」

けどやはり何も起こりません。ススムは魔力の杖を振り回し続けました。ところが突然、背後から誰かの声が聞こえてきたのです。

「ほう、おまえはなかなかよい道具を持っているじゃないか」

ススムは飛び上がって驚き、あわてて振り返りました。

そこにはあのヤマンバがいたのです。

いつの間に忍び寄ったのか、ススムはまったく気づいていませんでした。でももちろん、魔力の杖を振り回すのに夢中になって上げた声を聞きつけられたに違いありません。

何一つ行動を起こすことができないうちに、ヤマンバの長い腕がさっと伸びてきて、魔力の杖はもぎ取られてしまいました。ススムにはどうすることもできなかったのです。

5分後には、ススムはヤマンバの小屋へと引きずり込まれていました。両手首をつかんでぶら下げられ、抵抗することもできなかったのです。

ヤマンバは腕を長く伸ばし、なんとかけとばしてやろうとするススムの足をたくみに逃れたのでした。

小屋の中の様子はさっきと変わらず、オレンジ色の炎があたりを照らしています。草のつるを使って手足をしばられ、ススムは床に転がされてしまいました。

ところがヤマンバは、思わぬことで目をパチクリさせることになりました。何の予告もなく魔力の杖の光がすうっと薄くなり、ついには完全に消えてしまったからでした。

腰に刺していた魔力の杖を引き抜き、ヤマンバはススムに迫りました。

「おい小僧、この明かりはどうやって使うのだ？ どうすればもう一度光らせることができるのだ？」

どうやらヤマンバは、魔力の杖をただの照明器具だと思っているようです。手の中でブンブン振り回しながら、同じ言葉を繰り返しました。

「小僧、わしに呪文を教えい」

「呪文って？」

「これを光らせるための呪文だよ。暗闇の中で、この棒はとても役に立つに違いない」

「ああ、その呪文ね」

ススムは急いで頭を回転させなければなりませんでした。うまい答えを返さなくてはなりません。その答えが、彼の運命を決めるのです。

だけど幸運にも、ススムは思い出すことができました。以前お母さんに魔鏡を見せたときに、こんな言葉を聞かされたのです。

「ススム、おまえには鼻歌を歌うクセはないだろうね」

ススムはたずね返しました。

「鼻歌って？」

「何か用事をしながら、知らないうちにフンフンと歌っていることさ。魔鏡をポケットに入れておくのはいいが、不用意に歌うと大変なことになるのだよ」

「どうして？」

「事情があつて、魔鏡はある歌がとても嫌いなのだよ。魔鏡に聞こえるところで、それを口ずさんだりしてごらん……」

「どうなるの？」

「それはおまえ…、とにかく大変なことになるのさ。よく覚えておき。魔鏡が最も嫌う歌を、おまえだけに聞こえるように、これから歌ってやろう」

そういつてススムの耳に口を近づけ、ささやくようにしてお母さんは歌い始めたのです。

ススムはびつくりしてしまいました。

「お母さん、それって誰でも知っている歌じゃないか」

「そうだよ。だから危険なのさ。おまえが魔鏡をポケットに入れているとき、そばで誰かがこの歌を歌い始めたとしてごらん。タンコブの一つや二つではすまないのだからね」

そういう会話をお母さんと交わしたことを、ススムは思い出したのでした。

ヤマンバはまだしゃべり続けていました。ススムの肩をつかみ、大きく揺さぶるのです。

「やい小僧、この棒を光らせる呪文を教えろ。教えないとひどい目にあわせるぞ」

「ああ教えるよ。教えるよ」

「では早く言え」

「だけど呪文じゃないんだよ。その棒を光らせるには、あんたが歌を歌わなくちゃならないんだ」

「歌だって？ どうしてわしが？」

「だって、その棒はあんたが使うんでしょ？」

「ああ、言われてみればそうじゃな。では一体、何の歌を歌うのだ？ 早く言え」

その8

本物のムササビのようにクルクルとカーブを描きながら、お母さんは地底へと降下してゆきました。

穴の底があつという間に近くなり、ストーンとうまく着地することができたのです。

お母さんはあたりを見回しました。もちろん、しつぽを光らせることを忘れてはいません。そしてすぐに、サラサラと水の流れる音がすることに気がついたのです。

どうやら、どこかに小川があるようです。足音をしのばせ、お母さんは走り始めました。

小川はすぐに見つけることができました。透明な水が勢いよく流れています。その水に乗って、岩にぶつかりながら何かが流れてくることに気がついたのは、このときのことでした。

拾い上げてみると、なんとハンカチだったのです。

もちろん見覚えがありました。この日の朝、ススムの手に持たせたものだったのです。

これは何かのおりに、ススムがポケットから落としたものに違いありません。するとススムは、この小川の上流にいるのです。

小川にそって、お母さんがさつと走り始めたのは、いうまでもありません。

だけとお母さんも、めったやたらと駆けたわけではありません。鼻を近づけ、地面の匂いをかき続けることを忘れませんでした。

いくらも進まないうちに、ススムの匂いをかぎつけることができました。それはもちろん、ススムが座り込んで、魔力の杖の使い方を練習したあの場所だったのです。

匂いをさらにたどって、ヤマンバの家を見つけるのは簡単なことでした。

ヤマンバの家に近づき、用心深くお母さんは、まず内部の様子を探ることにしました。そして、聞こえてくる物音に眉を上げたのです。

家の中では、誰かが泣いているようです。その泣き声に混じって、なんとススムの声が聞こえてくるではありませんか。

泣き声を立てているのは、どうやら年取った女のようにです。

「ああ痛い、おお痛い。坊ちゃん、お願いだから、わしをたたくのをやめさせておくれ」

それに答えるのはススムの声です。

「ふん、今さら坊ちゃんなんて言っても遅いよ。このヤマンバめ」

「悪かった。わしが悪かった。あやまるから、この乱暴な鏡をなんとかしておくれよ。光る棒も返すよ。あんたが欲しがっている物もあげるよ。さあ持っておいき」

「よし。じゃあ魔鏡よ。僕のところへ戻っておいで。

おいこら、違うよ。僕はヤマンバじゃない。かみつくやつがあるか。持ち主の顔を見忘れたのかい？」

その後もしばらくドタバタと騒ぎは続いたのですが、やがて静かになりました。

少しして小屋の戸が開き、ススムが姿を見せたではありませんか。お母さんが目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「ススム、おまえは中で何をしていた？ これは誰の小屋なのだい？」

小屋の中からはヤマンバのうめき声がまだかすかに聞こえますが、ススムは平気な様子です。

「これはヤマンバの小屋だよ、お母さん」

「ヤマンバ？」

「でも大丈夫。魔鏡が守ってくれたからね。ヤマンバがああ歌を歌うように仕向けたら、魔鏡が怒ってね。まるでコウモリみたいに飛び回って、ゴツンゴツンとヤマンバを体中こづきまわすんだよ」

「おまえはケガをしなかったのかい？」

「魔鏡がひどく興奮して、ちょっとかみつかれたけど大丈夫だよ」

「それならよいが…」

「そつだお母さん、これを返すよ」

「ああ、私の魔力の杖だね。役に立ったのならよかった。ところでススム、おまえは疲れていないかい？ ヤマンバももう悪さはしないだろうから、よければ私は、この穴の中を少し調べてみたいのだよ」

「どうして？ 何か探し物でもあるの？」

「なんだススム？ なぜおかしそうに笑う？ ああ、もちろん私は探し物があるのさ」

「何を探すの？」

「ある場所で噂を聞いたのだよ。私が探している本の一冊が、猫坂のもつとも深い地下に眠っているとね。それがなんと、サラサラと小川の流れている穴の中だそつだ」

「ふうん。小川ならそこにあるよね。でもお母さん、苦労して探す必要はないと思うよ。ほら」

体の後ろに隠していた物を、このときススムはさつと取り出したのです。

目を丸くし、続いてお母さんが瞳をさつと小さくするのは、見ていて楽しい眺めでした。

「ススム、この本をおまえはどこで見つけたのだい？」

「話は帰ってからにしようよ。僕はおながすいちゃった。禅師も心配しているだろうし」

「ゼロ禅師のことなど、私にはどうでもよい。さあ私の背にお乗り。早く家へ帰ろう」

もう地底には用はないのです。ススムもうなずきました。

降下してくるときにはムササビ笠が必要でしたが、今は魔力の杖があります。

杖の魔力で、ススムとお母さんは、あっという間に橋の上まで戻ってくることができました。あとはトンネルを抜け、地上へ戻ってゆくだけでした。

こうして今回の冒険は終わったのです。二人の無事な帰りを、もちろんゼロ禅師は喜んでくれました。でもそれだけではなかったのです。

お母さんの頭からはずされ、ムササビ笠はゼロ禅師に手渡されました。だからゼロ禅師は、どういう理由をつけてこれを大野家に返したのか、頭を悩ませることになったのです。

でも禅師のことです。きっと何かいい手を考えることでしょう。

町をおおっていた深い雪もすっかり消え、猫坂は再び平和を取り戻すことができました。

妖狐ハンター

その1

「猫坂の町には、急にネズミの姿が増えたのではないか」

そういう噂が、突然広がり始めました。

はじめはススムも半信半疑だったのですが、あるとき何十匹もかたまって道路を横断する姿を目撃して、ついに信じざるを得なくなりました。

家にいても、思いがけないところに現れるネズミにミチコが悲鳴を上げるとは、珍しくなくなりました。

さすがにお母さんは平気な様子でしたが、勝手口を出入りしたり、物置の戸を開けるたびに、ミチコはビクビクするようになりました。彼女はあまりネズミが好きではなかったのです。

学校で授業を受けていても、ネズミが天井からポトンと落ちてくることまであるほどでした。電車に乗れば、イスの上に2、3匹座っている場合だってありました。

これはもう絶対に異常な事態ではありませんか。

ネズミの大繁殖に関しては、もちろんぜ口禅師も相談を受けました。その場にはススムも居合わせたので、話を聞くことができたのです。

相談者は猫坂の市長でした。しかし相談内容に新しい点はなく、ただ『ネズミが増えて困っている。なぜこうなったのか、理由はま

「たたくわからない」というだけで、何の参考にもなりませんでした。

この朝もネズミが電線をかじって電車を止めたものだから、学校に遅刻しそうになり、ススムも関心を持っていたのです。家に帰ってから、ススムはお母さんに話しかけました。

「ねえお母さん、最近本当にネズミが増えたね」

「私も気がついてるよ。ミチコなどは、一日に何回も悲鳴を上げている。あの子はネズミが好きではないらしい」

「お母さんはネズミが嫌いじゃないの？」

「私は好きでも嫌いでもないな。食ってもあまりうまくはない」

「えっ？ お母さんはネズミを食べたことがあるの？」

「妖怪ギツネの毛皮を着ていると、食べ物好みもキツネに似てくるのだよ。それでも私は、ネズミをあまりうまいとは思えないな」

「ふう」

安心して、ススムは少しため息をつきました。

「だがススム、ネズミはそもそも妖怪ギツネの大好物なのだよ。もしかしたらネズミの急な増加は、妖怪ギツネと関係があるのかもしれないね」

その2

翌日寺を訪れたとき、ススムはさっそく、お母さんが言ったことを伝えたのです。

ゼロ禅師は首をかしげました。

「ススム君の家の妖怪ギツネがそんなことを言うのかい？ ふうむ、これはいいヒントかもしれないぞ。少し調べてみようじゃないか」

ススムを連れて、ゼロ禅師は町へ出ました。裏通りを歩いてみることにしたのです。

すぐにゼロ禅師は眉をひそめることになりました。

でもススムには意味がわかりませんでした。ススムの目には、いつもと変わらない町の風景としか見えません。

「禅師どうしたの？ 何か変なことがあるの？」

「わたちは、もうかなり遠くまで来たじゃないか。だがこれだけ歩いても、妖怪ギツネの気配をまったく感じる事ができないのじやよ」

「妖怪ギツネの気配って？」

「この町の妖怪ギツネたちは巧妙に姿を隠し、人間に見つからないようにして生きている。それでも匂いや気配まで完全に消すことはできないさ」

「本当に一匹も気配を感じることができないの？」

「できないまま、もう40分近く歩いているね。普段ならすでに7匹や8匹は感じてよさそうなものだが」

「まさか、猫坂の町にはもう一匹も妖怪ギツネがいなくなったということなのかな？」

「たぶんそうじゃろう。ススム君の家にいる一匹を除いてはね。すまないが家に帰ったら、このことを質問してみてくださいかい？」

「うん、わかった」

でもその必要はなかったようです。寺へ戻ってきた二人を、思いがけず迎えてくれた者がありました。

寺の中庭には一匹の巨大なキツネがいて、地面にうつぶせになったまま、ゆっくりとしつぽを動かしていました。もちろんそれは、ススムにはおなじみの姿だったのです。

ゼロ禅師が目を丸くしました。

「おやキツネさんではないか。ちょうどいい。ススム君に伝言を頼もうと思っていたところだよ」

お母さんはジロリと見つめ返しました。

「気軽に話しかけないでもらいたいな。今日は妖怪ギツネ一族を代表して来ているのだぞ」

「代表だつて？」

「町の中に妖怪ギツネの姿が見えないのを私も不思議に思つて、少し調べてみたのさ」

「それで何がわかつた？」

「誰かが大規模に妖怪ギツネ狩りを行っている。それを恐れて、妖怪ギツネたちは猫坂を離れ、みな避難してしまったのさ」

ススムが口を開きました。

「それとネズミが増えたことが、どう関係あるの？」

お母さんは答えました。

「ネズミは妖怪ギツネの大好物だからさ。その妖怪ギツネがいなくなり、取つて食べる者がいなくなつては、ネズミが大発生するのは当たり前だよ」

「ふうん」

ゼロ禅師が言いました。

「妖怪ギツネ狩りというが、すでに何匹か狩られているのかな？」

「それが100匹は下らないらしいぞ。『妖狐ハンター』というらしいが、この妖狐ハンターがいなくならないかぎり、妖怪ギツネたちも猫坂に戻る気はないそうだ。猫坂は、

いずれネズミで埋まってしまうだろうな」

ゼロ禅師はしぶい顔をします。

「キツネさんや、その妖狐ハンターとやらは、どこにいるのかな？
正体はわからないのかい？」

「残念ながら、正体は誰も見たことがないそうだ。見た妖怪ギツネはすべて狩られてしまったのでな」

「ふうむ。しかし猫坂中の妖怪ギツネが姿を消した今、妖狐ハンターはあせっているだろうね」

「それはそうかもしれんな、禅師。とにかく私も気をつけることにしよう。さあススム、家に帰るから私の背にお乗り」

「うん」

ゼロ禅師に手を振り、ススムは言われた通りにしたのです。

さつと駆け出し、お母さんとススムの姿は、ゼロ禅師の前からあっという間に消えてしまいました。

その3

お母さんの背中に乗って、共に駆けるのがススムはとても好きでした。

お母さんは風のように速く、何回もジャンプを繰り返しながら、家々の屋根づたいに飛ぶように走ることができたのです。お母さんのしなやかな足は、着地してもコトリとも音を立てず、瓦を1ミリ動かすことだっただけありませんでした。

寺を離れると、すぐにススムは話しかけました。

「ねえお母さん、妖狐ハンターの正体は誰だろうね？」

「私も知らんが、妖怪ギツネを100匹狩るなど、尋常なことではない。何か理由があつてのことだろうね」

「妖怪ギツネの毛皮って、お金になるの？」

「ならぬことはあるまいがススム、おまえは、私が着ているこの毛皮のことを言っているのかい？ これは自然死した妖怪ギツネから作ったものさ。狩られて死んだ妖怪ギツネでは、魔力の強い毛皮は作れないのだよ」

「へえ」

「ああススム、我が家が見えてきたぞ」

その言葉に身構え、ススムも着陸する用意をしたのです。でもそ

れは無駄になってしまいました。

お母さんの体に突然緊張が走るのが、毛皮越しであっても感じられたのです。

「お母さん、どうしたの？」

「ススム、しっかりつかまれ」

そう叫んだかと思うと、なんとお母さんはもう一度大きくジャンプしたのです。長い毛をギュツとつかむのがなんとか間に合い、ススムは振り落とされないで済みました。

家の屋根はあつという間に小さくなり、ススムとお母さんは道路の上空に出ました。そこからは電柱の頂上をつたい、まるで忍者のようにして、お母さんは再び走り始めたではありませんか。

本当の全力疾走でした。お母さんのただならぬ様子に、ススムも口を閉じていることにしました。お母さんは、それほど緊張して見えたのです。

電柱の頂上から頂上へと、お母さんはジャンプを続けました。心を決め、ススムが口をそつと開いたのは、少したってからでした。

「お母さん、僕たちは誰かに追われてるの？」

「家の近くまで来たとき、私は気配に気がついた。案の定、今も追ってきているよ」

「本当に？ 僕には何も見えないや」

「何かの魔力で姿を隠しているのだろう。よくごらん。やつが足をついた瞬間、電柱が震えることがわかるよ」

それはお母さんの言うとおりだったのです。振り返って目をこらしたのですが、ススムにも見ることができました。あとを追ってく
る見えない敵が足をついた瞬間、たしかに電柱がピクリと震えるの
です。

「電柱の震え方がすごいや。やつはお母さんよりも大きいの？」

「そうかもしれないね。とにかく、私たちの家の場所をやつに知ら
れるわけにはいかないのさ。うまくまいてしまわないと、家には帰
れない。それはおまえも覚悟をおし」

「うん、わかった」

しばらくの間、ススムとお母さんは走り続けました。それでも敵
はピタリと着いてくるのです。

「しっかりつかまっているように」とススムにささやき、お母さん
は何度かサーカスのように急な方向転換や、右左折をやってみまし
た。

それでも敵は離れず着いてくるのです。まるで機械のように正確
ではありませんか。

次第にお母さんは、薄気味悪く感じ始めました。

「ススム」

「どうしたの？」

「どうも敵の様子がおかしいとは思わないか。いくらなんでも正確に追ってきすぎるではないか」

「本当にそうだね。僕も不思議な気がしてきた」

「少し実験してみよう。おまえも協力おし」

「実験って？」

「あそこにある閉店してしまったレストランの看板が見えるか？」

「うん、もう何日も空き家になっている感じだね」

「看板に書いてある電話番号を覚えておきなさい」

「どうして？」

「いいから覚えておおき。次に前方のあの大きなビルをごらん。あのビルの陰に入って敵の目から見えなくなる一瞬、私はおまえを地上に降ろす。その後、私はまた電柱の上に戻って走り続けるが、おまえは…」

「何をするの？」

「公衆電話を探して、さっきの空き家のレストランに電話をかけるのだよ。電話番号を間違えるな。10円玉は持っているね？」

「うん、あると思うよ」

「さあススム、ビルが近づいてきたぞ。用意はいいな？ 行くぞ」

一瞬息を止めるようにして、ススムとお母さんはビルの裏側へと飛び込んでいきました。

その4

作戦はうまくゆきました。地面に降りてススムは駆け出し、お母さんはジャンプして、電線の上に戻ったのです。

お母さんがそのまま走り続けたのは、いうまでもありません。

敵が頭の上を通り過ぎるとき、電柱が揺れ、電線が重そうにたわむのをススムは見ることができました。

公衆電話もすぐに見つけることができました。受話器を取り、ススムはダイヤルを回したのです。

電話線のむこうで、すぐにベルが鳴り始めるのがわかりました。誰もいないレストランの中で、電話機がけたたましい音を立てているさまを、ススムは想像することができました。

だけど、のんびりしている暇はありません。受話器をダラリとぶら下げたまま、お母さんと別れた場所まで、ススムはまた駆け戻ったのです。

お母さんは1分もしないうちに姿を見せました。再びススムを背に寄せ、電柱の上へと飛び上がりました。

「お母さん、どうだったの？」

「ススム、私たちは間違っていたようだ。やつは今も私たちの後ろを着いてきているか？」

ススムは振り返りました。

「うっん、いないみたいだよ。電柱もしならないし、電線も揺れてない」

「だろうね。ついさっきわかったことだが、やつは私たちのように電柱の上を駆けているのではなかったのだよ。やつは電線の中を走っていたのさ」

「本当に？ まるで電気みたいじゃないか」

「私も最初は信じられなかった。おまえが電話をかけた後、やつがあのレストランをたたき壊すさまを見せてやりたかったよ。やつは、おまえが家へ電話したと思ったのさ」

「じゃあやつは、僕がかけた電話を追いかけて、電話線の中を通過して、あのレストランまでたどっていったというの？」

「そうとしか考えられまい？ やつは私たちの家を知りたがっていたのさ。家の場所さえわかれば、たとえ今日取り逃がしてしまっても、またいつでも私を待ち伏せできるではないか」

「お母さんのことを、この町に残った妖怪ギツネの最後の一匹だと思っているんだね」

「そうらしい。おまえのかけた電話にだまされ、やつは私を見失ってしまった。家を知ることできなかった。だから腹いせにレストランをたたき壊したのだよ」

「やつの姿は見えた？」

「いいや、それが何もわからなかった。姿の見えぬままたたき壊したのさ。まるで透明な巨人に踏みつぶされたかのような眺めだったよ」

「でもとにかく、やつをまくことには成功したんだよ」

「いやススム、安心はできぬぞ」

「どうして？」

「敵の正体がまだわからないからさ」

その5

翌朝になりました。お母さんが口を開きます。

「ススム、今日は学校へ行くのはおやめ」

「どうして？」

「昨日の妖狐ハンターに警戒しなくてはならないからさ。やつはおまえの顔を見ているのだよ。今も町の中をうろつき、おまえを探しているに違いない」

「でも今日、僕は学校でテストがあるんだよ。休むわけにはいかないよ。0点になっちゃうもん」

「テストなどほっておおき」

「だめだよ。僕は行くからね。お姉ちゃんももう登校しちゃったんだ。僕も急がないと」

「ええいお待ち。仕方がないから、今日は私も着いていくことにしよう」

「お母さんも学校に来るの？ そんなのだめだよ」

「うるさい。私はもう決めたのだ。今日のおまえは、とても危険なのだぞ」

こうなったら、何を言ってももう絶対に聞いてくれないことはス

スムもよくわかっていました。だからお母さんの同行を承知するしかなかったのです。

「だけとお母さん、どういう格好で学校へ来るの？ その毛皮のまじゃだめだよ」

「こうするのさスム。少しの間、むこうを向いていなさい」

もちろんスムは言われた通りにしました。10秒後に再び振り返り、目を丸くしたのです。

「あれお母さん、女の子に変身したの？」

スムの言葉どおり、そこには女の子がいたのです。スムと同じ年頃でしょうか。黒い髪をお下げにあんでいます。セーラー服まで身につけているではありませんか。

「どうだスム、これでおまえの同級生に見えるか？」

「見えるけどお母さん、本当にその姿で学校へ行くの？」

「そうさ。一日中おまえのそばにいて、目を光らせていなくてはならん」

しぶしぶだったのですが、お母さんを連れてスムは家を出たのです。そのまま駅へと急ぎました。

校門を入りながら、お母さんが呪文をとねえ始めていることに気がつき、スムは小さな声でささやきました。

「お母さん、何の呪文をとなえているの？」

「私の姿を見ても、誰も怪しまないようにしたのだよ。ずっと以前からいるただの女子生徒に見えるようにした。誰も気がつきはしないさ」

「ふうん」

こうして、ススムの長い一日が始まったのでした。

その6

まず最初の問題は、教室にお母さんの机がないことでした。

ただどこから呪文を使っても、机を作り出すことはできません。他の方法で解決しなくてはなりませんでした。

「ススム、予備の机やイスはどこに置いてある？」

「1階の物置の中だよ」

「そうか。ではちょうどいい。あそこを歩いているジジイに持つてこさせよう」

窓の外を見ながら、お母さんは何かの呪文をとнаえているようにうでした。

ただ数分後、ススムは目をむくことになったのです。ガタガタと机を運んで教室に姿を見せたのは、なんと校長先生だったではありませんか。

「お母さん、あれは校長先生だよ」

「それがどうしたススム？ ああおまえ、ご苦労であったな。机はそこに置け。よし、もう帰ってよろしい」

平気な顔をしているお母さんの背後に、ススムは隠れてしまいたい気持ちでした。あまりの出来事に、同級生たちもみな驚いている様子です。

でも呪文の支配下にある校長先生は何も感じないようで、黙って廊下を戻ってゆきました。

ベルが鳴り、担任の先生が姿を見せました。すぐに出席を取り始めます。

ススムの耳に顔を近づけ、お母さんがささやいたのは、このときでした。なんとお母さんは、ちゃっかりススムの隣に席を取っていたのです。

「ススム、私の名は何と言うのだ？」

「知らないよ、そんなこと。お母さんの名前は出席簿に載ってないんだよ。先生が変に思うに決まっているよ」

「ふうん、あのノートは出席簿というのか。だが今ならススム、呪文をとнаえて、私の名を出席簿に書き込むことができるぞ。」

さあ早く私の名を考え出せ。時間がないのだぞ」

ススムは大急ぎで頭を回転させなくてはなりませんでした。女の子の名前で、出席簿の最後に載るのだから、アイウエオ順も考えに入れなくてはなりません。

「ええっと、このクラスでアイウエオ順が一番最後の女の子は、なんて名前だっけ？」

ススムは頭を悩ませました。

ゆつくりしている余裕はないのです。ススムがお母さんにささやき返すことができたのは、もうギリギリのタイミングでしかありませんでした。

でもそれなんとか間に合い、名簿の最後に、先生はその名を読み上げてくれたのです。

「輪々野^{わわの}わ子さん」

それに答え、お母さんは平気な顔で返事をしました。

『輪々野』なんて名字は、実在するかどうかもわからなかったのですが、ススムが苦しまぎれにでっち上げたものです。

でもこの名前なら、文句なく出席簿の一番最後になるに違いありません。

その7

テストは無事に終わり、昼食の時間になりました。

今日は給食のある日でしたが、当然ながらお母さんの食事は用意されていません。お母さんはささやきました。

「困ったなススム。私はもう腹ペコなのだよ」

「ちょっと教室を出て、外で何か食べてきたら？」

「そういえば、この学校でもネズミがたくさん出て困っていると言ったな？」

「お母さん、もし校内でネズミを取ったりしたら、僕は一生口をきかないからね」

「うるさいやつだ。ではどうしろというのだ？ おまえの給食を半分よこすか？」

「それはイヤだ」

「では仕方がない。外へ出て、何か食べてこよう」

お母さんはサッと姿を消しました。そして昼食時間が終わるころ、何食わぬ顔で戻ってきたのです。

「お母さん、何を食べたの？」

「おまえの言うとおり外ですませたのさ。ついでに学校のまわりも一回りしてきたが、妖狐ハンターの気配はなかった。少しは安心してよいのかもしれない」

「外で何を食べたの？」

「校門の前にすし屋があるだろう？ あそこへ行ったのさ。なかなかうまかったぞ。おまえも来ればよかった」

「あの店は教頭先生の奥さんが経営してるんだよ。その姿のままで行ったんでしょう？ あとで職員室に呼び出されると思うよ」

「何を言う？ では私は妖怪ギツネの姿で行けばよかったのか？
すぐに妖狐ハンターに見つかってしまうではないか」

「うっん、僕が言ってるのはそういうことじゃなくて…、もういいや」

「細かいことは気にするな。教師たちがおまえをどんなに叱っても、私が守ってやるよ。妖狐ハンターの正体がわかるまでは、私は毎日この学校へ来ることに決めたのだから」

ススムは思わずため息をつきましたが、もう何も言いませんでした。このときススムは、妖狐ハンターが早く現れてくれればいいとまで思っていたかもしれせん。

午後の授業が始まりました。

その8

午後の最初の授業は数学でした。

授業が始まって早々、なんと先生はお母さんを当てたではありませんか。黒板には練習問題が書いてあり、それを解いてみよというのです。

ススムは思わず胸がドキリしましたが、どうすることもできません。お母さんはずっと立ち上がり、口を開きました。

「なあ教師よ、私にそのような問題を解くことができると、おまえは本気で思っているのかね？」

もちろん先生はすでに魔力の支配下にあつたに違いありません。顔色を変え、深くお辞儀をしたのです。

「ははっ、私が心得違いをしておりました。まことに申しわけございません」

「わかればよろしい。では授業を続けたまえ」

お母さんはまたススムの隣に腰を下ろし、いかにも恐縮した様子で、先生は授業を続けたのです。

その次の授業は理科でした。「雲の観察をする」ということで、先生は生徒を屋上へ連れ出しました。

さっそくお母さんがささやきました。

「なあススム、あの教師は何を教えるつもりなのだ？ 雲に乗って空を飛ぶ術を教えるのか？」

「そうじゃないよ。セキラン雲とかイワシ雲とか、雲にはいろんな種類があるんだよ。それを勉強するんだ」

「ふん、そんなおとなしい雲よりも、どうせならカミナリ雲を眺めるほうがよほどおもしろいではないか。よし、一つ呼んでやろう」

「お母さん、そんなことしちゃだめだよ」

「なぜだ？ せっかく勉強に協力してやろうというのに」

「だって…」

ところがもう遅かったのです。お母さんは、すでに呪文をとこなえていたのです。

その9

あれほど明るかった空が一瞬で薄暗くなり、夜の闇のように黒い雲が西の空から走ってくるではありませんか。

「ススム、よく覚えておおき。呪文で呼ばれた雲は常に西の方角からやってくるのだよ」

だけどそんな言葉も、ススムの耳には届いていませんでした。突然光り始めた稲妻に驚き、ビー玉のような大粒の雨に追われて、同級生たちと一緒に屋根の下へと駆け込んでいたのです。

「おいススム、何をしている？　せつかく私が教材を呼んでやったのに……」

お母さんの言葉は途中で止まってしまいました。なにやら異常なことに気がついたからです。

呪文に呼ばれてやってきたのは、カミナリ雲だけではありませんでした。なんと雲の上には何かの妖怪が乗っているのです。

これはお母さんもまったく予想していない出来事でした。一瞬ぽかんと口を開けてしまったほどです。

妖怪の恐ろしい姿に、先生や同級生たちはとくに逃げ出しています。

カミナリ雲は荒れ狂い、相変わらず大粒の雨をまき散らし、ゴロゴロとカミナリを鳴らしています。そのたびに雲の内部では、フラ

ツシユのように明るい稲妻が輝くのでした。

身をかめながらススムがお母さんのところへ戻ってきたのは、このときでした。

「ススム、あの妖怪の姿が見えるか？」

「なんという妖怪なの？ 変な格好をしてるね」

本当にススムの言うとおりだったのです。

体の大きさはバスほどもあり、手足は長くてシマ模様があり、ヘビのようにウロコのあるしっぽとサルのように赤い顔があるのです。胴体は犬に似ていますが、もつとずんぐりした形です。

「ススム、あれは又エというのだよ」

「又エ？」

「電気とカミナリの妖怪でな…。そうか。電気の妖怪だから、電線の中を自由に走ることができたのだな」

「あれが妖狐ハンターの正体なの？」

「そうらしい。カミナリ雲の中に潜んでいたのを、知らずに私が呼び出してしまったということか。さあススム、私の背にお乗り」

その言葉に驚き、ススムが振り返ったときには、お母さんはすでに妖怪ギツネの姿に戻っていたではありませんか。

ススムがすぐに言葉に従ったのは、いうまでもありません。

「ヒューイ、ヒューイ」

奇妙な声が聞こえました。どうやら又エが鳴いているようです。見かけによらずか細く、かわいらしい声を出すものでした。

お母さんが言いました。

「これはまずいぞ、ススム」

「どうして？」

「又エのやつ、もつとたくさんカミナリ雲を呼ぶつもりだ。電気はやつのエネルギー源だからな。あまり強く、凶暴になられても困る」

「じゃあどうするの？」

「カミナリ雲が集まってくる前に、なんとかせねばならない」とき。しっかりつかまれ。行くぞ」

サツと走り出したかと思うと校舎の中へ飛び込み、お母さんは階段を一気に駆け下りていったのです。

その10

背中にいるススムに、お母さんが話しかけてきました。

「ススム、この学校から見て、ゼロ禅師の寺はどの方角になる？」

「ええと東だよ。どうしたの？」

「さつきも言っただろう？ あのカミナリ雲は、西から東を向いてしか移動することができないのさ。寺が東にあるのならよい。雲に乗ったまま、又エは私たちを追ってくるだろう」

お母さんの言うことは正しかったようです。

学校を飛び出し、二人は再び電柱の上を走り始めていたのですが、カミナリ雲はピタリと着いてくるではありませんか。大きな目玉をむいて、又エもにらみつけてくるのです。

「ススム、ゼロ禅師はいま寺にいると思うか？」

「たぶんいると思うよ」

「ああ、それなら都合がいい」

あっという間に二人は、ゼロ禅師の寺の近くまでやってくることができました。大きな川も道路の渋滞も、電柱の上を走るときには関係ないからです。

最後に1回大きなジャンプをして、お母さんは寺の中庭に着地し

ました。そして戸を突き破り、部屋の中へ飛び込んでいったのです。

お母さんの言葉が響きました。

「ゼロ禅師、いるか？」

奥で何か仕事をしていたようですが、ゼロ禅師はすぐに姿を見せました。

「ああススム君とキツネさんが、どうかしたのかい？」

「ムササビ笠を貸せ。早くしろ。一分一秒を争うのだ」

ゼロ禅師はとても察しのよい人でした。お母さんの声にただならぬものを感じたのでしょう。すぐに行動を起こしたのです。

「ほれ、ここにある」

ススムがムササビ笠を受け取ったことを確かめると、お母さんはあとも見ずに寺から駆け出すことになりました。文字通り、ゼロ禅師にはもう目もくれませんでした。

又エとカミナリ雲に追いつかれる前に、ススムとお母さんは電柱の上に戻ることができました。再び全力で走り始めたのです。

「お母さん、ムササビ笠をどう使うつもりなの？ まさかヤマンバのいるあの穴の中へ、もう一度降りてゆくのか？」

「ムササビ笠は穴の底へ飛び降りるだけでなく、高いところから地上へ降りるときにも使えるのではないかね？」

「えっ？」

自分たちが猫坂市の中心部へ向かっていることにススムが気がついたのは、このときのことでした。目の前に、立てた鉛筆のように背の高いビルが見えてきたのです。

ススムはつぶやきました。

「猫坂ステートビルだ」

「そのとおりだよ。私たちはこれからあのビルに登り、屋上へ行くのさ」

「どうやって？ あのビルには人がたくさんいるから、お母さんの姿を見たら大騒ぎになるよ」

「非常階段を使うのだよ。ビルの裏側にあるから、人目につくことはないさ」

お母さんは自信に満ちた様子ですが、ススムは少し不安でした。思わず後ろを振り返らないではいられなかったのです。

又エは相変わらずピタリと着いてくるではありませんか。しかもカミナリ雲は今も稲妻を光らせ、大粒の雨をシャワーのようにまき散らし、ゴロゴロと雷をとどろかせているのです。

ついに猫坂ステートビルまでやってきて、非常階段に取り付くことができました。

非常時にしか開かない入口にはもちろん鍵がかかっていましたが、お母さんが一度体をぶつけるだけで、簡単に開いてしまいました。

あとはただ屋上へ向かって、何百段もの階段が、折れ曲がりながら続いているのです。ススムたちがさっそく登り始めたのは、いうまでもありません。

その11

屋上に着くとすぐに立ち止まり、お母さんはススムを背中から降ろしました。

「ススム、よくお聞き。もうすぐここへ又エがやってくる」

「うん」

「やつの弱点はしっぽの付け根にある。ヘビそっくりのしっぽをしていることに気がついたかい？」

「うん、ウロコにおおわれたしっぽだね」

「実は、あれがやつの本体なのさ。カミナリに打たれて死んだヘビの魂が、サルやタヌキやその他の動物の魂と出会い、合体して生まれた妖怪だからね」

「へえ」

「エネルギーの中心はヘビの魂だから、しっぽを切り離せば、又エはすぐに死ぬさ。そこでおまえに頼みがあるのだよ」

「何をすればいいの？」

毛皮の下から、お母さんは魔力の杖を取り出しました。

「これをおまえに渡すから、肌身離さず持っていなさい。この杖がおまえを守ってくれるだろう」

「ふうん」

ススムは手に取り、2回か3回振り回してみました。お母さんが続けました。

「私は物陰に隠れ、気配を殺していよう。又エのやつが目の前に出てきた瞬間、うまく見計らってしつぱをかみちぎってやるさ」

「僕はどうするの？」

「おまえは屋上の中央に立ち、又エの注意をひきつけるんだ。なあに、まずやつは電気で攻撃してくることだろうが、すべて魔力の杖が引き受けてくれるさ」

「電気以外の攻撃をしてきたらどうするの？」

「それは…、そのときに考えよう。あまり気にすることはない。その杖はとにかく強力なのだから」

お母さんに自信を持って言われてしまうと、ススムは首を縦に振るしかありませんでした。それにもう時間がなかったのです。又エはすぐそこまで迫っていました。

カミナリの音がはつきりと聞こえます。雲を離れ、大きくジャンプして又エがビルへと飛び移ってきたのは、この直後のことでした。

ススムは魔力の杖を強く握りしめました。どこへ隠れたのか、お母さんの姿はもうありません。

この巨大な怪物の相手を、ススム一人でしなくてはならないのでした。

その12

さすが電気の妖怪ということなのでしょうが、又エが口を開くと、キバとキバの間に火花が散るのを見ることができます。

静電気の作用かもしれません。ススムは自分の髪の毛が逆立ち始めるのを感じました。

又エがそこにいるだけで、コンクリートの床までが電気を帯びるのでしょうか。シマ模様のある巨大な足が動くたびに、バチバチと気味の悪い音が聞こえるではありませんか。

又エが最初の攻撃を仕掛けてきたのは、次の瞬間のことでした。

まるでヤリのようにススムめがけて、まっすぐにカミナリが飛んだのです。幽霊のように青白い色でススムを照らし出したのです。

ただどカミナリはススムを感電させるどころか、ショックを与えられることだっておりませんでした。お母さんの言葉どおり、魔力の杖がススムを守ってくれたのです。

なんと魔力の杖は、カミナリをすべて吸い取ってしまったではありませんか。

この杖には電池のような能力があるに違いありません。平気な顔をしてペロリと電気を飲み込み、平らげてしまったのです。

これに驚いたのは又エだけではありませんでした。ススムも同じように目を丸くしていました。

2度3度と又エは攻撃を繰り返しましたが、結果は同じでした。底なしの胃袋のように、杖はカミナリをどんどん吸い込んでゆくのです。

又エはくやしそうな顔をしています。ススムはだんだんおもしろくなってきました。

「おい又エ、もう電気は品切れかい？」

意外にもススムの言葉は正しかったのかもしれませんが。口を開いても、もはや又エのキバの間を火花が飛ぶことはありませんでした。

逆立っていたススムの髪もいつの間にか元に戻り、又エが足を動かしても、気味の悪い音はもう聞こえません。

使いつくし、又エの体からは電気がほとんどなくなっていたのです。このときをお母さんが見逃すはずはありませんでした。

その13

物影から姿を現し、お母さんは又エの背中へサツと飛び移ったではありませんか。まるでサーカスのような身軽さだったのです。

お母さんのねらいが、又エのしっぽの付け根なのは明らかでした。もちろん又エも黙ってはいません、かつと振り返り、お母さんにかみつこうとしますが、うまくゆきません。

背中に目でもついているかのように、お母さんはすばやく察し、身をかわしてしまうのです。

腹を立て、又エは最後の電気を振りしぼる気になったようでした。あの短距離なのです。カミナリのすばやさの前には、お母さんもよけきれはありますがありません。

なんとかしなくちゃ。

ススムはあせりを感じ始めました。

「おい魔力の杖、なんとかしろ。おまえのご主人がピンチなんだぞ」

そしてこのとき、奇妙なことが起こったのです。

お母さんは又エのしっぽにかみつき、アゴに力を込めて締め上げています。ヘビの形をしたしっぽは、いかにも苦しそうに、のたうっているではありませんか。

しかし一方で、又エの表情はとても冷静だったのです。牙の間に再び火花が飛び始めているのを見ることができました。

額に寄せているしわから、又エが体のすみずみから電気の最後のカケラをかき集めているのがうかがえます。一瞬後には、それがお母さんめがけて発射されるでしょう。

魔力の杖はススムの手の中にありました。だけどこの杖がこのとき突然、まるで折りたたみ式の釣りざおのように、するすると長くなり始めたのです。

もちろんススムには始めて目にする光景です。思いがけなさに目を丸くしたものでした。

魔力の杖はあつという間に十分な長さを持ち、又エのすぐそばまで達したのです。そしてそれは、又エが最後の雷撃を放つのと同時だったではありませんか。

なんとか間に合わせることができました。又エが送り出した最後の力ミナリも、魔力の杖はいとも簡単に吸い込んでしまったのです。

お母さんは無事だったわけですが、ススムは少し電気ショックを受けてしまいました。

短いままであるときと、長くなっているときとは、杖の働きが少し違うのかもしれませんが。これまでになかった刺激をビリビリと手に受け、ススムは思わず魔力の杖を放してしまったのです。

「あつ」

けどどうしようもありません。杖は一度は屋上を囲むへりにぶつかりましたが、カチンとはね返り、そのまま地上へと落ちていきました。

あつという間に杖は小さく、見えなくなってしまったのです。

その間も、お母さんと又エの戦いは続いていました。しかしついに結末のつくときがきたようです。突然ブツンと大きな音が聞こえ、又エのしっぽは切断されてしまいました。

一瞬で力を失い、しっぽは床に落ちてしまいました。もう何の動きも見せなかったのですが、落ちてきたのがちょうど足元だったので、ススムは悲鳴をあげそうになりました。

しっぽを失っても、もちろん又エはまだ完全には死んでいません。最後の捨て身の攻撃ということなのか、大きくジャンプし、屋上の外へと飛び出していきました。

けどなんということでしょう。その背中の上には、まだお母さんが乗ったままだったのです。

その14

ススムはあわてて屋上のへりに近寄りました。そして塀越しに目撃することができたのです。

なんとすでに、お母さんは又エの背中を離れていたのです。おそらくポンとジャンプしたのでしょう。

ムササビ笠の力を生かし、パラシュートのようにしてお母さんは降下してゆくところでした。ススムはほっと息をつくことができました。

一方で又エは、どんどんスピードを上げて落下を続けていました。

本体であつたしっぽが切り取られたことで結びつきが弱まったのでしょう。まるでプラモデルが壊れていくときのように、サルの頭、トラの足、タヌキの胴とばらばらになっていったのです。

そのすべてが地面に激突したのは、いうまでもありません。

それを見届け、ススムは歩き始めました。

お母さんとは、非常階段を降りてゆく途中で再会することができました。ススムを迎えにきてくれたのでしょう。

「お母さん、魔力の杖はどうなったの？」

「ちゃんと拾ってきたさ。もう毛皮の中にあるよ」

「又エはどうしたの？」

「それが不思議なのさ。地面に落ちて確かにくだけちったが、近くへ行ってみると、もう影も形もなかったのだよ」

ススムはうなずきました。

「はあ、そういえば又エのしっぽにも同じことが起こったよ。又エが地上へ落ちていった後、気がついたらしっぽはもうどこにもなかった。確かに床に落ちたのを見たのに」

ススムを背中に乗せ、お母さんは階段を降りてゆきました。

「つまりススム、又エは何者かにあやつられていたということだね」

「どうしてわかるの？」

「もちろん、死体があつという間に消えてしまったからさ。あれは、あわてて又エの死体を隠したのだよ。悪事が人目については困るのだろっ」

「誰がそんなことをしてるの？」

「ふん、ラセツに決まっているさ。ラセツもあの本をねらっているのだから」

「お母さんが探している3冊のこと？」

「そのうちの2冊を、私はすでに手に入れたさ。ラセツはそれを私から奪おうとしているのだよ」

「どうして？」

「あの3冊を手に入れた者は強い力を得て、妖怪世界を支配することが出来るからさ。その野望に燃えているのは、私だけではない」

「それで？」

「ただラセツは、まだ私の正体を知らないのだろう。知っているのは、私が妖怪ギツネの毛皮を着て、猫坂のどこかに住んでいるということだけなのさ」

「だから又エを使って、猫坂の妖怪ギツネたちを狩らせたというの？」

「それが正解だろうね。片っ端から妖怪ギツネを狩れば、いつか私に行き当たるという考えだったのだろう。罪もなく狩られて死んだ妖怪ギツネたちにとっては、迷惑な話だ」

こうして今回の事件は解決することができたのです。ラセツのことはともかく、又エは退治され、避難していた妖怪ギツネたちも、すぐに戻ってきました。

猫坂を埋めつくしていたネズミたちも、いずれ数を減らしてゆくことでしょう。

食人鬼の怪異 その1

猫坂の町に食人鬼の噂が広がったのはごく最近のことで、もちろんススムの耳にも入りました。

さびしい暗い道を一人で歩いている子供を捕まえては、バリバリと食べてしまう妖怪だということです。いったん日が暮れてしまうと道を歩く人の数は目に見えて少なくなりました。

ゼロ禅師も調査を始めていましたが、古文書を調べても何も得られず、みずから歩き回って食人鬼を誘い出そうにも、襲われるのは子供ばかりとあっては、さすがにどうすることもできなかったのです。

ススムがゼロ禅師の寺を訪れたのは、そんなころでした。当然話題は、食人鬼のことになりました。

「ねえ禅師、食人鬼に食べられた子供って、もう何人ぐらいになるの？」

「ああススム君、とても困ったことだねえ。新聞によると、すでに4人にのぼるそうだよ」

「みんな猫坂市内なの？」

「そうさ。古い町だから、猫坂には薄暗い通りも多い。夕暮れ時にそんな場所で襲われるようだ」

「僕の学校も、毎日授業が一時間短くなったよ。家の遠い生徒が、

明るいうちに帰り着けるようにって。僕も放課後は、駅でお姉ちゃんを待ち合わせてから、一緒に家に帰るんだ」

「ああ、そうするほうがいいね」

「食人鬼の正体は何だと思う？」

「それがねススム君……」

ゼロ禅師の口から出た説明は、ススムをひどく驚かせることになりました。寺を出て、家へ向かって歩き始めながらも、何度となく思い返さないではいられなかったのです。

「もしかしたら、食人鬼の正体は僕のお母さんかもしれない」

事件には、一人だけ目撃者がいたのです。子供の悲鳴を耳にし、駆けつけようとした人なのですが、犠牲者を口にくわえて立ち去る犯人の影を見ていました。

それがなんとオオカミかキツネに似た毛むくじゃらで、妖怪としか思えない巨大な怪物だったということです。

この日からススムは、今までとは違う目でお母さんを見ないではいられなくなりました。お母さんと話をしたり、近寄ったりすることが怖くなり、できるだけ避けるようにしたのです。

夜だって、恐ろしい夢をいくつも見るようになりました。

敏感なお母さんが、そのことに気がつかないはずがありません。ある日とうとう、話しかけてきました。

「ススム、話があるからここへおいで」

「なんなの母さん」

「おまえはどうも最近様子がおかしい。何かあるのなら、話してごらん」

ススムはごまかそうとしたのですが、うまくいきませんでした。結局、白状させられてしまったのです。

するとお母さんは、おかしそうに笑い始めたではありませんか。

「おまえはそんなことで悩んでいたのかい？ この私が子供を食べる食人鬼だって？ ははは、これはおかしい」

「だつてさ……」

「考えてごらん。キツネとは本来、ネズミなどの小さな動物を捕まえて、頭から丸のみにして食べるのだよ。」

獲物を捕まえ、バリバリと引き裂いて食べるのであれば、おそろくオオカミの仕業だね。事件の目撃者は、オオカミかキツネのような影を見たと言っているのだろう？」

「それはそうだけどさ」

「おや私の言葉が信用できないのかい？ では私の腹をさいて、胃袋から子供の骨が出てくるか調べてみるかい？」

「そんなこと、できるわけじゃないか」

「では私を信用おし。しかし気になる事件ではあるな。近頃はミチコもあまり外へ出たがらない」

「誰だってそうだよ」

「ススム、事件は何日おきに起こっているのだい？」

ポケットから、ススムは新聞の切抜きを取り出しました。

「禅師の話では、ほぼ1週間ごとに起こってるんだって」

「事件が起こるのは、どこなのだい？」

「それが猫坂中に散らばっていて、パターンがないんだよ。発生現場のリストがあるよ。ほら」

「これかい？ ふうむ、なかなかおもしろいな。よしススム、私は決めたぞ」

「何を？」

「おまえからかけられた疑いを、自分の力で晴らすことにしたのさ。真夜中前に出かけるから、そのつもりでおいで」

「真夜中って、今夜なの？」

「そうとも。新聞をごらん。最後の事件が起こってから、今日でちょうど一週間目じゃないか。食人鬼は今夜あたり再び活動するので

はないかね？」

「だけどどこを探すの？ 猫坂の町は広いよ」

「それは私に任せておおき。少し考えがあるのさ……」

その2

真夜中になりました。まだ眠たかったのに、ススムは布団から引っ張り出され、お母さんの背中の上にいたのです。夜の風に吹かれ、やっと目が覚めてきたところでした。

「ねえお母さん、僕たちはどこへ向かってるの？」

いつものように妖怪ギツネの姿で、お母さんは電柱の上を走っていました。

「ススム、おまえは『妖怪街道』を知っているかい？」

「ううん」

「妖怪街道とは、猫坂に人間がやってくる前から存在する古い道だね。妖怪の通り道なのさ。律儀な妖怪なのだ。食人鬼は、その道にそって犠牲者を選んでいる」

「禅師はそんなこと言ってなかったよ」

「ゼロ禅師だって知らないことがあるのさ。妖怪街道のことを知っている人間は一人もいない」

「ふうん」

「妖怪街道について知ってさえいれば、食人鬼が次にどこで子供を襲うか、だいたい見当がつくのだよ。今日は猫坂神社の裏手あたりだろうよ」

「でもお母さん、食人鬼が子供を襲うのはいつも夕方なんだよ。もうこんな真夜中じゃないか」

「この警戒だからね。夕方出歩く子供など、一人もいないさ。獲物を見つけれず、食人鬼は腹をすかせているに違いない。空っぽの胃袋をかかえ、子供の姿を求めて、この時間でもまだうるついていると私は思うね」

「まさかその夜の町を、僕がおとりになって歩くんじゃないだろうね」

「他にどんな方法がある？　だが安心おし。誰にも見られぬように気配を消して、私はおまえのあとをついて歩くさ」

「でもお母さん……」

「おまえには指一本触れさせぬわ。私を信用おし」

こうまで言われてしまうと、ススムも口を閉じるしかありませんでした。

ススムがお母さんの背中から降ろされたのは、月の光をシルエツトに、猫坂神社の屋根を遠くに見ることができた通りでした。

こんな時間だし、食人鬼騒動もあって、本当に誰もいません。家々はドアにも窓にも固く鍵をかけ、コトリという物音一つ聞こえないのでした。

ススムは歩き始めました。自分の足音が、いやに大きくあたりに

響くのが気になります。

お母さんは本当に見ていてくれるのだろうか、と不安になったのですが、ポツンポツンとある街灯以外は暗闇が広がるばかりで、何もわかりませんでした。

ビクビクしながらススムは歩き続けたのですが、突然の出来事が起こったのは、数分後のことでした。暗がりから、不意に敵が襲いかかってきたのです。

驚きのあまり、ススムは何の行動も起こすことができませんでした。逃げ出すどころか、その場に立ちすくんでしまったのです。

でもそれも無理はないかもしれません。とんでもなく巨大で毛むくじやらのものが、予告もなく屋根の上から飛び降りてきて、目の前に立ったのですから。

ススムには、相手の姿はよく見えませんでした。真っ暗な毛の色が、暗闇に溶け込んでいるのです。

でも相手の目玉だけは見ることができました。オレンジ色に輝きながら、ススムをにらんでいるのです。口の中に並ぶとがったキバが、月の光をわずかに反射しています。

恐ろしさのあまり、ススムはどうしていいのか、わからなくなっていました。

でもお母さんが姿を見せたのは、その瞬間のことでした。気配も足音もなく忍び寄り、敵とススムの間に立ってくれたのです。

ススムがどれほどほっとし、胸をなでおろしたことでしょう。

「おやおやおや」

お母さんの笑う声が、ススムの耳に届きました。

敵とお母さんのにらみ合いは、少しの間続きました。でも不意に終わってしまったのには、ススムもあっけなく感じたほどです。

敵もお母さんも、相手に飛びかかるどころか、呪文をとなえることさえしませんでした。そんな暇はなかったのです。なんと敵は突然ブイとむこうを向き、背中を見せて歩き始めたではありませんか。

敵の姿は、そのまま暗闇の中へ消えてしまいました。

ほっとしてススムが口をきくことができるようになったのは、何秒もたつてからのことでした。

「お母さん、今の妖怪はなんだったの？」

「なんだススム、おまえには見えなかったのかい？」

「うん。暗くてよくわからなかった」

「やれやれ、光がないと見ることでできない人間の目とは不便なものだね。あれはオオカミだよ」

「えっ、日本のオオカミって、もう100年前に全滅したんだよ」

「私が言っているのは人狼のことさ。動物のオオカミではないのだ」

よ」

「人狼って？」

「私が着ているのは妖怪ギツネの毛皮だろう？　ならば同じようにオオカミ妖怪が存在しても、不思議はないではないか」

「だけど…」

「さあススム、私の背中にお乗り」

「そうだね。なんだか疲れちゃったよ。早く家に帰りたい」

「何を言う？　夜はまだまだこれからだよ」

「どうして？　人狼はどこかへ行ってしまったたよ」

「まあ見ておいで。おいフクロウ、どこにいる？」

その声に答えてすぐにパタパタと羽音が聞こえてきたので、ススムは目を丸くすることになりました。そしてフクロウはお母さんの目の前に降り立ち、うやうやしくお辞儀をしたのです。

「御用でしょうか、お師匠様」

「ああ、そこにいたか。寺へ行き、おまえは今すぐゼロ禅師をたたき起こしておいで。私とススムが、食人鬼を連れてもうすぐ寺へ到着すると伝えるのだ」

「おお、すると今夜は、ちょっとおもしろいものが見られそうですね」

な」

「まあな。おまえはゼロ禅師の寺へ行き、その後のことはわかっているな？ さあ早く行かぬか」

もちろんフクロウは大きく羽ばたき、すぐに姿を消しましたが、ススムは疑問を感じないではいられなかったのです。

「ねえお母さん、食人鬼を引き連れてって、どういうことなの？」

静かな調子で、お母さんは歩きはじめました。

「ススム、あの人狼がただ引き下がったとおまえは思っているのかい？ とんでもない。暗闇にまぎれて、ちゃんと私たちのあとをつけてきているよ」

「どうして？」

「私のすみかがどこか、探るためさ。すみかがわかれば、あの2冊の本を盗みに入ることができるではないか」

「えっ？ 人狼ってラセツの家来なの？」

「間違いなくそうさ。もともとこの食人鬼騒動自体が、私をおびき出すトリックだったのだよ」

「じゃあどうするの？」

「人狼を退治するまで、おまえも私も家へ帰ることができない」

「だから禅師の寺へ行くの？」

「ゼロ禅師の寺は、すでにラセツに知られているからね」

「禅師を事件に巻き込んだじゃうの？」

「あのジジイは妖怪退治が大好きではないか。大好物を持っていつてやるのだから、遠慮することはない」

その3

やがて暗闇の中に、ゼロ禅師の寺が見えてきました。

フクロウはきちんと言いつけを守ったようです。門を開き、ゼロ禅師は中庭で待っていてくれました。

それがなんと勇ましい格好ではありませんか。

僧服の長いそでが邪魔にならないように、ナワでくくつてあるのです。左手には呪文の本、右手には長い木の棒を持っています。あの棒で食人鬼をぶん殴ろうというのでしょうか。

ススムたちの姿を見て、ゼロ禅師はすぐに口を開きました。

「やあ二人とも、ケガはなかったかな？」

お母さんが言いました。

「なあ禅師よ、食人鬼の正体は、なんと巨大な人狼だったぞ。どうやって退治するつもりか知らんが、まあがんばってくれ。ススムと一緒に、私は見物させてもらおう」

「その人狼だが、今はどこにいるのだね？」

「人間の目には見えなくても不思議はないが、100メートルばかり後ろだ。電柱の影に隠れて、こちらをうかがっている」

ススムも言いました。

「ねえ禅師、本当に大丈夫？　すごく大きな妖怪だったよ」

「ススム君、すまないが寺の物置へ行つて、銀のナイフを取ってきてくれるかい？」

「うん」

お母さんの背中から飛び降り、ススムは駆けてゆきました。そしてすぐに戻ってきたのです。

「ほら禅師、持ってきたよ」

「ああ、ありがとう」

ヒモを使い、ゼロ禅師はさっそく長い棒の先にナイフを結び付け始めたではありませんか。ヤリのようにして使うつもりかもしれません。

お母さんが口を開きました。

「禅師、その結び方では弱すぎて、ナイフはすぐに抜けてしまうのではないか？」

「いやいやキツネさん、実はそれを期待しているのじゃよ。まあ見ていてごらん」

その後も3人は待ち続けたのですが、人狼はなかなか姿を見せませんでした。お母さんは待ちくたびれたのかもしれない。

「えらく待たせるではないか。あるいは慎重なやつなのか」

「いやキツネさん、やつが動き始めたようじゃよ。いま何かの光が、やつの瞳の中できらめくのが見えた」

「ほう、人間のくせにおまえはいい目をしているな。ああ、いま門の中へ入ってきたぞ」

本当にお母さんの言葉どおりでした。今度こそススムにもはつきりと姿を見ることができたのです。

人狼は、お母さんよりも一まわり大きな恐ろしい姿なのですが、その美しさはため息が出るほどのものでした。

毛皮は夜空のように深い黒色で、まわりの光を受け、毛先がときどき星々のようにきらめきます。だけどその表情は凶暴で、口はワニのように大きく開いているのです。

そんな相手を目の前にしても、お母さんはうれしそうに笑っているのです。

「さてススム、ゼロ禅師のお手並み拝見といこうじゃないか」

ゼロ禅師といえば、すでにヤリを手に身構えています。

3人を目の前にしても、人狼はひるむ様子がありません。グルルとうなり、牙をむくのです。

そしてついに、ゼロ禅師が体を動かすときがきました。

それは人狼が飛びかかってくるのと同じでした。

人狼めがけて、ゼロ禅師は木の棒を大きく振るったのです。投げたのではなく、釣りざおのように振り回したただけでしたが、棒の先端は空中でカーブを描き、ゆるく留めてあったに過ぎないナイフを矢のように打ち出したではありませんか。

あっという間に、ナイフは人狼の胸に深く突き刺さることになりました。

でももちろん、それで人狼が死ぬようなことはありません。そのまま空中を飛び越え、ゼロ禅師を押し倒して、のしかかったのです。

ゼロ禅師は仰向けにひっくり返されてしまいました。その肩に前足を乗せ、人狼はもう一度うなるのでした。

ススムは思わず叫びました。

「キツネさん、禅師を助けてよ」

「いやススム、まあ見ておいで。禅師も簡単に負けはせぬさ」

お母さんの言うことは正しかったようです。手の中にあつた棒をうまく使い、ゼロ禅師は人狼のわき腹をとっさに強くたたいたではありませんか。

さすがの人狼もこれは痛かったのでしょう。サツと飛びのき、ゼロ禅師から離れたのです。

ナイフは、人狼の胸にまだ突き刺さったままです。

ハアハアと息をつきながら立ち上がり、ゼロ禪師が口を開きました。

「キツネさんや、少しおかしくはないかね。人狼であれば、銀のナイフで倒すことができるはずなのじゃが」

「それは普通の人狼の場合さ。この人狼には主人がいるのだろう。主人の強力な魔力で守られているようだな」

「主人じゃと？ この事件には黒幕がいるというのかい？」

「ああ、ラセツといってな。かなり手ごわい相手だぞ」

「なんとラセツとな。その名は古文書で見たことがある。3つの目玉を持つ鬼であろう？」

「よく知っているな。しかし禪師、そんな話をするよりも、まずあの人狼めを追い払わなくてはならないかね？」

「追い払う？ するとあんたは、こいつを退治するのは無理だというのかね？」

「ラセツの魔力で守られている家来だぞ。普通のやり方では、かすり傷を負わせることだってできるかどうか。ほれ見ろ。やつの胸からは、もうナイフが抜け落ちたではないか」

「なんと」

その光景には、ススムも驚くことになりました。あれほど深く突

き刺さっていたナイフなのに、まるで透明な手で引き抜かれるかのように、見る間にキズ口からスルリと押し出されてしまったのです。

その跡には裂け目どころか、血の一滴さえ見ることができなかったのは、いうまでもありません。

カチンと音を立て、ナイフは地面に落ちてしまいました。

ゼロ禅師はうめき声を上げました。

「これはまいったな」

お母さんが突然ススムを振り返ったのは、このときのことでした。

「ススム、私のフクロウの姿は見えないか？」

ススムはキョロキョロと見回しました。

「フクロウ？ いないよ。あつ、あそこにいた。おーい、こっちだよ」

パタパタと羽音を響かせ、フクロウは空からまっすぐに降りてきました。そしてススムの肩にとまったのです。

「お師匠様、遅くなりました」

「ああ、危ないところだったぞ。やはりゼロ禅師では歯が立たなかった」

「さようぞ」

「それでフクロウ、連中は来てくれるのか？」

「はい、お師匠様。もうすぐ姿を現すでしょう」

ゼロ禅師が言いました。

「キツネさんや、フクロウと話すのもいいが、人狼を追い払う手助けをしてもらえんかね？ 銀のナイフが役に立たぬとなると、もうわしには手立てがないのじゃよ。人狼のやつめ、相変わらずグルルとうなり、わしをにらんでおる」

「ああお師匠様、とうとう連中が来てくれたようですぜ」

フクロウの声に、3人はまわりを見回すことになりました。

その4

それはまるで、暗闇の中にいくつものホタルが舞っているような眺めでした。

二十近い数だったのです。小さな丸い点が光をはね返しながら、寺をめざして集まってくるのでした。

やがて塀を乗り越え、彼らは庭に姿を見せました。

そこではじめて、ススムには意味がわかったのです。光っているのは妖怪ギツネの目玉なのでした。何匹もがゼロ禅師の寺へ集まってきたのです。

あつという間に人狼は、妖怪ギツネたちによって取り囲まれてしまいました。一匹一匹がお母さんと同じ体の大きさがあるのです。さすがの人狼も居心地が悪そうではありませんか。

この光景には、ゼロ禅師までが目を丸くしています。

「ギツネさんや、これは一体どういうことなんだい？」

「以前、又工を退治してやった恩があるからな。私のためにみな集まってくれたのさ。妖怪ギツネとは、それほど義理がたい連中なのだよ」

「ほう…」

ススムが口を開きました。

「あつ、人狼が動き始めたよ」

この瞬間、戦いが始まりました。妖怪ギツネたちが、いつせいに人狼へと飛びかかっていったのです。

だけど人狼の反応もすばやいものでした。後ろ足で立ち上がり、前足を強く振るって、まず一匹をはじき飛ばしてしまいました。

その他の妖怪ギツネたちも、すぐに同じようにはじき飛ばされるか、かみつかれるかしてしまったのです。

ほんの一瞬の出来事でしかありませんでした。あれほど勢いのよかった妖怪ギツネたちも、今は地面で血を流し、うめき声を上げているのです。

庭の雰囲気はあつという間に変化してしまいました。楽観的で、薄ら笑いさえ浮かべていた妖怪ギツネたちも、凍りついてしまったかのようにありませんか。

お母さんが静かに口を開きました。

「禅師、ススムのことを頼むぞ」

「あんたも戦う気かね？」

ススムも心配そうな声を出しました。

「ギツネさん」

「ススム、心配することはない。妖怪の世界では、冷酷さと慈悲のなさにかけては、ラセツに劣らず私の名も知られているのだよ。さて、では行くか……」

そういつて地面をけり、お母さんは人狼に挑みかかったのです。

その5

不安と恐ろしさのあまり、お母さんの戦いぶりをススムは見ていることができませんでした。思わずゼロ禅師の後ろに隠れてしまったのです。

ゼロ禅師の声が耳に届きました。

「ススム君、二人は互角の戦いをしているよ。あつ、妖怪ギツネが人狼にかみついた。

だが深いキズではないな。人狼はすぐにギツネのキバから抜け出してしまった。

続いて人狼は相手のしつぽをねらうが、毛の数本は引き抜かれてしまったものの、ギツネもなんとか逃れたよ」

そうやって戦いは続いたのです。その時間の長さとお母さんが傷つけられてしまうのではないかという心配に、ついにススムは我慢ができなくなってきました。

ところがその瞬間、ゼロ禅師の声が再びあたりに響いたのです。

「やったぞススム君、人狼がとうとう力を失ったようじゃ」

その声の明るさに、ススムは思わず顔を上げてしまいました。そして目に入ったのは、なんとお母さんが人狼の首の後ろにガブリとかみついている光景だったではありませんか。

お母さんのキバは深く突き刺さり、人狼は苦しげに目を細めます。前足を宙に浮かせ、アゴを大きく開け閉めますが、もちろん何の効果もありません。

執念深いヘビのように、お母さんは人狼の首をかみ続けました。人狼の手足の動きが弱くなってゆくのがわかります。

ついにカチリと音が聞こえ、人狼の首は折れてしまったのです。

最後に一度だけピクリと動きましたが、人狼の手足はダラリとなっていてしまいました、お母さんが口を離すと、人狼の体はドスンと地面に落ちてしまったのです。

ススムの口から思わず声が漏れました。

「キツネさん」

さすがに疲れたのか、お母さんは腹ばいになってしまいました。それでも大きなケガをしているようではありません。

お母さんの目は死んだ人狼を見下ろしていましたが、ススムがそばへ行くと振り返りました。

「ススム、おまえはケガはなかったのかい？」

「うん、キツネさんは？」

「かすり傷ばかりさ。おいフクロウ、おまえはどこにいる？」

パタパタと羽音が聞こえ、フクロウはすぐに姿を現しました。

「はい、お師匠様」

「おまえはすぐに死体を片付ける。人間の目に触れないようにするのだ」

「はい、お任せを」

「ススム、禅師をここへお呼び」

「うん」

かがみ込んで人狼を興味深そうに調べていましたが、ススムが手まねきをする、ゼロ禅師はすぐにこちらへくるそぶりを見せました。

ところがお母さんは、ゼロ禅師に話しかけることができなかったのです。思いがけないドンという音が突然あたりに響き、なんだろうと全員がキョロキョロと見回すことになりました。

「あそこだ。屋根の上をござらん」

敵の姿に最初に気づいたのはお母さんでした。ススムもとっさに目をむけたのですが、その姿に息をのむことになりました。

ラセツでした。寺の屋根の上に立ち、憎々しげにこちらを見下ろしているではありませんか。ドンというのは、カワラの上に降り立った足音だったのでしょうか。

月光を受け、3つの目玉は宝石のように美しく輝いていますが、

それでもラセツが恐ろしい姿をしていることに変わりはありません。縮み上がり、妖怪ギツネたちは庭のすみに固まってしまったほどうす。

お母さんが振り返りました。

「ススム」

「どうしたの？」

「今夜、私は家へは帰れそうもない。おまえは一人で先にお帰り。私のフクロウを護衛につけてやろう」

「でもギツネさん……」

「いいや、お帰り。でないと私は、安心してラセツと戦うことができないではないか。ごらん。屋根の上からラセツはさかんに手まねきをしている。今夜こそ、私と決着をつける気なのだろう」

「だけど……」

「いい子になって、私の言うことを聞きなさい。ああフクロウ、ここへきたか。おまえの責任でススムを家まで無事に送り届けるのだからできるな？」

フクロウは自信たっぷりにお辞儀をします。

「お任せください、お師匠様」

ススムは何か言おうとしたのですが、その暇はありませんでした。

全身の筋肉をバネのように使って、あつと気がついたときには、お母さんはラセツと同じ屋根の上にいたではありませんか。

あれだけの高さを、お母さんは一気にジャンプしたのです。

屋根の上で何秒間かにらみ合っていました。が、戦いの舞台を変える気になったのでしよう。ラセツとお母さんは、どちらからともなく駆け出し、夜の闇の中へと見えなくなってしまったのです。

お母さんは足音を立てません。ラセツの足音だけが重くドスドスと聞こえていましたが、やがてそれもまったく消えてしまいました。

ゼロ禅師が口を開きました。

「ススム君、キツネが言っていたように、君は早く家に帰ったほうがいい」

「ここにいと危険なの？」

「そうではないさ。でもススム君は、明日も学校があるのだろう？」

「うん」

「さあ、フクロウを肩にとまらせておやり。おや、キツネたちも同行してくれるようだね。ではススム君、明日また会おう」

「そうするよ。じゃあね禅師」

「ああススム君、ゆつくりお休み」

その6

寺の門を出て、ススムは歩き始めました。

人のいない真夜中の道ですが、もし目撃している人がいたら、ずいぶん奇妙な光景だと思ったことでしょう。少年が一人、妖怪ギツネたちに囲まれて歩きながら、肩の上にいるフクロウと話をしているのです。

ススムが言いました。

「ねえフクロウさん、お母さんはどうしてラセツと争ってるの？」

「あれあれススム、あの3冊の本のことを、おまえはお師匠様の口から聞いていないのかい？」

「聞いているよ。でも僕にはさっぱりわからないや。そんなに大切な本なのかなあ。ねえフクロウさん、あんたはお母さんの弟子になって長いのか？」

「長いのが長くないのって、オレはお師匠様の一番弟子だぜ。もう100年近くにならあ」

「へえ」

「それで3冊の本の話だったな。ススム、おまえは妖怪王国というのを知っているか？」

「ううん」

「地底にある強力な国でな、『妖怪王』様が治めている。よい王なのだが、一つだけ困ったことがあった」

「何なの？」

「跡継ぎの息子がいないのさ。王には娘が二人いたが、妖怪王国では、女が王位を継ぐことは許されていない」

「ふうん」

「そしてこの娘たちには、それぞれ息子がいるのさ。王から見れば孫になるな。だから次の代の王は、この孫二人のどちらかということだ」

「そうだろうね」

「そこで王は、まず人間世界に3冊の本を隠した。どこに隠したかは誰にも教えず、もちろん簡単に見つかるような場所ではない。

3冊とも、妖怪王国の秘密や魔力の奥義をしるした貴重なものだ。二人の男の子のうち、この3冊を最初にすべて見つけ出し、手に入れた者が後継者になると王は決めたのだ。

だから母親二人が、3冊を血まなこになって探しているのだよ」

「ねえ、それってまさか…」

「そうとも。ラセツには息子がいる。お師匠様にもいる。そしてどちらも、自分の息子を王位につけてやろうと必死なのだよ」

「ラセツとお母さんは姉妹なの？」

「当たり前じゃないか」

「じゃあ妖怪ギツネの毛皮の中にいるお母さんも、実はラセツと同じようにあんな恐ろしい姿をしているの？」

「えっ？ あー、なんだ。いやそのつまり、おおススム、家の前に着いたぞ。じゃあおやすみ」

翼を大きく動かし、フクロウはあわてて飛び去ってしまいました。

気がつくと、いつの間にかギツネたちも一匹残らず姿を消しているではありませんか。ため息をつき、ススムは玄関のドアに手をかけたのです。

この夜、お母さんのことが心配で、ススムはなかなか眠ることができませんでした。

やっとウトウトしたと思ったら、怖い夢を見て何回も目を覚ますことになりました。

それでも朝はやってきます。やっとついさっき眠りにつくことができましたばかりなのですが、ススムは起き出さなくてはなりませんでした。

お父さんはもちろん、クラブ活動で朝の早いミチコももうとっくに出かけているようです。着替えてススムは、トントンと階段を降りてゆきました。

でも階段の途中で、ススムは立ち止まってしまったのです。

皿や食器がぶつかる耳慣れたカチャカチャという音が台所から聞こえてくるではありませんか。

思わずススムが駆け出したのは、いうまでもありません。そして台所では、いつものようにお母さんが迎えてくれたのです。

「おはよう、ススム」

「お母さん、大丈夫だったの？」

「ラセツのことかい？　あまり大丈夫ではないな。ラセツには結局逃げられてしまった。多少のケガは負わせておいたけどね」

「お母さんはケガをしなかったの？」

「かすり傷だけさ。さあおかけ、ススム。早く食べなさい。今日も学校があるのだろう？」

「お母さんとラセツは姉妹なんだってね」

「なんとフクロウのやつが余計なことを言ったのか。あのおしゃべり鳥め」

「ねえ本当なの？」

「ああ本当さ。もともとあまり仲はよくなかったが、今回の件で争いが決定的になった」

「ねえお母さん……」

「しゃべってばかりいないで早くお食べ。でないと学校に遅刻してしまうよ」

時計をのぞき込むと、お母さんの言うとおりでした。話をやめ、スムは大急ぎで学校へ行くしたくをしなくてはならなかったのです。

空飛ぶ妖怪 その1

いつもの朝と同じように、家を出てススムは学校へ向かっているところでした。

もうそろそろ校門が見えてくるあたりでしたが、驚きのあまり、ススムはもう少しで腰を抜かしそうになったのです。物影から突然妖怪が飛び出してきたのです。

だけど悲鳴を上げる必要はありませんでした。よくよく眺めなおすと、それはついさっき家で別れたばかりのお母さんだったではありませんか。ここまでお母さんは、いつものように電柱の上を駆けてきたのでしょうか。

「お母さん、何してるの？」

「ああススム、しばらくの間、これを預かってくれるかい？ 私は敵に追われているのだよ」

お母さんがそう言ったかと思うと、毛皮のおなかが割れ、白い手と共に本が差し出されたのです。もちろんあの大切な2冊です。

すぐに受け取り、ススムは自分のカバンの中へ入れました。

「ススム、いうまでもないが、とても大切なものだから、大事に扱うのだよ」

「でもお母さん……」

「話している暇はないのだよ。ほら、もう敵が追いついてきた」

その言葉と共に、お母さんは電柱の上へとサツと駆け上がり、風のように消えてしまいました。

ススムは、敵の姿を目撃することはできませんでした。

巨大なサイズの妖怪だったに違いありませんが、まわりの家々の屋根すれすれに低く飛んで、お母さんのあとを追っていったことがわかっただけでした。その大きさを太陽の光がさえぎられ、あたりは一瞬薄暗くなったほどでした。

あの大きさでは、かなり強力な敵に違いありません。お母さんも今日は大変なのでしょう。

ため息をつき、大切な預かりものの入ったカバンをかかえて、ススムは校門をくぐるようになりました。

この日は一日中、授業中も休み時間も、ススムはカバンから目を離す気になりませんでした。それでも時間はすぎ、ついに放課後になりました。

仲のよい友達から「駄菓子屋にアイスクリームを食べにいかないか」と誘われたのですが、ススムは断り、家路につきました。

学校にいる間中、お母さんからの連絡は一度もありませんでした。何かあったのではないかと、ススムは心配になり始めていたのです。

しかしその心配も、長くは続きませんでした。

駅で電車を降りて、人通りの少ない道を歩いていたとき、物影から突然お母さんが姿を現したからです。

「ススム、私の本は無事か？」

につこりして、ススムはカバンを指さしました。

「うん、ここにあるよ」

「それならいい。さあ私の背にお乗り」

ススムがそうすると、お母さんがすぐに駆け出したのは、いうまでもありません。

「お母さん、どこへ行くの？」

「ゼロ禅師の寺さ。ひとまずそのカバンを預けよう」

「どうして？」

「ラセツのやつがとんでもない怪物を送り込んできたからさ。追い払おうと朝からいろいろやってみたが、どうしてもうまくゆかぬ。だからススム、おまえの助けが必要なのだよ」

「どんな怪物なの？」

「今にわかるさ。さあゼロ禅師の寺が見えてきたぞ」

電柱の頂上から飛び降り、お母さんは寺の中庭へと入ってゆきました。庭のすみで草むしりをしていたゼロ禅師とは、すぐに顔を合

わせることができました。

「おやススム君、学校の帰りかい？ キツネさんは何か御用かな？」

お母さんが口を開きました。

「禅師、しばらくの間ススムのカバンを預かってくれ。私たちは怪物に追われているのだ」

「ススム君のカバン？ 何か大切なものでも入っているのかい？」

「ススムの宿題が入っているのさ。怪物に盗まれて、ススムが悪い点を取ったら困るだろう？」

「それはそうだが…」

「ほれ禅師、受け取れ。じゃあな」

ススムは一言も口をきく暇がなかったのですが、気がついたときにはお母さんは地面をけり、さっさと電柱の頂上へ戻っていたのです。

その2

お母さんは全力で走り続けています。背後へと流れてゆく景色に目を細めながら、ススムは口を開かないではいられませんでした。

「ねえお母さん、ラセツは妹なんでしょう？　なんとか和解して、仲直りすることはできないの？」

「それはつまりススム、私かラセツのどちらかが、息子に王位を継がせることをあきらめろということかい？」

「うん」

「そんなことができるものか。母親とはおろかなものでね。息子のためならどんなことでもするのだよ」

「僕のお母さんも、生きているときにはそんな気持ちだったのかなあ」

「それは間違いないさ。私が保障してもいい」

「どうしてお母さんが保障するの？」

「えっ？　いやなに、つまりなんだ。息子に対する母親の気持ちとは、どこへいっても変わらぬものだということさ。」

それよりもススム、あの怪物を追い払う方法について相談しようじゃないか」

「ずいぶん大きな妖怪みたいだね」

「ああ、あれほどの大物は珍しい。ラセツはかなりの無理をしているようだ」

「どうしてわかるの？」

「巨大な妖怪をあやつるには、それなりの技術が必要だからさ。正直な話、あれほどの力が妹にあるとは、私も意外だったよ」

「へえ」

「ススム、私の首のまわりには鉄製のロープが巻きつけてあるだろう？」

「うん、何だろうとさっきから思ってた」

「それを手にお取り」

「あれ？ 鉄なのにずいぶんやわらかいね。それに細いし。僕の小指ぐらいの直径しかないや」

「その鉄はやわらかいが、呪文がかけてあるから、見かけ以上に丈夫なのだよ。何十トンという重さに耐えることができる」

「へえ」

「それを使って、おまえは私の手助けをするのだ」

「どうやるの？」

「よくお聞き。今回の敵はウロコに包まれた巨大な体をしている。このウロコはヨロイのように硬く、少々の攻撃にはびくともしない」

「まるで戦艦だね」

「そのとおりさ。だがやつにも、一つだけ弱点があつてな」

「どんな？」

「やつの胸にはただ一枚だけ、他とは逆さまに生えたウロコがあるのさ。一枚だけ上を向いた逆向きの奇妙なウロコなのだよ。このウロコに傷を受けると、さすがのやつもすぐに死んでしまう」

「まさか、このロープをその逆さウロコに引っかけて、はぎ取ろうというの？」

「はぎ取ることまでは無理だろうよ。そのウロコはゲキリンというのだが、せいぜいこのゲキリンにちょっとロープをかすらせることくらいしかできまいよ」

「それじゃあ敵は死なないよ」

「死ななくてもいいさ。ぞつとさせ、おびえさせるだけでいい。やつが逃げ帰るように仕向けるのさ」

「そんなにうまくいくかなあ」

「うまくいかなければ、また別の手を考えるよ。さあススム、私たちが作戦を実行する場所が見えてきたぞ。あそこにある大木が見え

るか？」

「うん、ずいぶん大きな木だね」

「猫坂神社の神木だからさ。もう2000年も前から、この地に立っているのだよ」

その3

それは本当に、ススムが目を丸くするのも当然な眺めだったではありませんか。

2000歳の木といえば相当なものです。ただ一本の樹木に過ぎないのに、広く張りめぐらされた枝は葉が濃く、分厚く生え、まるで全体が一つの山のように見えます。それほど大きなものなのでした。

この木の頂上あたりに、ススムは降ろされることになりました。お母さんと協力して、そこにワナを仕掛けたのです。

2本の枝の間に、ロープを強くピンと張り渡したのです。木の葉のカーテンの下に隠され、ちょっと見ただけではわからないように注意したのは、いうまでもありません。

準備がすむと、お母さんはサツと姿を消してしまいました。高い木の上にススムは独りぼっちになってしまったわけですが、お母さんはこう言い残したのです。

「ススム、私はやつをおびき寄せるから、おまえはおとなしく待っているのだよ。絶対にここを動くのではないよ」

「いつまで待てばいいの？」

「そうはかかるまいよ」

そう言ってお母さんは出かけてしまったのです。枝に腰を下ろし、

ススムは待つことにしました。

木といっても本当に巨大なものです。ススムは枝の分かれ目にいたのですが、足元は平らで、小さな小屋なら建てることのできる広さがあるではありませんか。

目をこらすと、葉と葉の間からは猫坂の町の風景が、見渡すかぎり遠くまで続いています。

しばらくの間はおとなしくしていたのですが、やがてススムはキョロキョロとあたりを見回すようになりました。

お母さんが戻ってくるには、もう少し時間がかかるようです。なんだか退屈になってしまいました。

ススムの背後には、巨大な幹がそびえています。大型のロケットにも負けない直径があります。

ススムは突然疑問に思いました。

「あの幹の裏側は、一体どうなっているんだろう？」

お母さんはまだまだ帰ってくる気配がありません。ちょっと立ち上がり、ススムは幹の裏側を見にいく気になりました。

のぞきこむと、裏側にも同じような枝があることがわかりました。でもその枝に何かがかけてあることに気がついたとき、ススムは思わず目を丸くしたのです。

それはキツネの毛皮でした。

もちろん見覚えのあるものです。大きさといい、色といい、お母さんのものに違いありません。

つまりお母さんは、ススムと別れたあと、ここで毛皮を脱いでいたのでしょう。

妖怪ギツネの毛皮とは、魔力に満ちたすばらしいものです。お母さんは、魔力の杖も持っています。

でもいくら強力な魔力の杖でも、妖怪ギツネの毛皮を着たままでは使用できないことは、ススムもすでに知っていました。毛皮の魔力と杖の魔力が、互いに反発しあってしまうのです。

杖の力を発揮したければ、お母さんは毛皮の外に出る必要があります。

だからお母さんはここで毛皮を脱ぎ、杖の魔力で何かの姿に変身してから、出かけていったに違いありません。

それはおそらく空を飛ぶことのできるものでしょうが、それが何なのか、ススムには見当もつきませんでした。

しばらくの間、ぼんやりと毛皮を眺めていましたが、やがてススムは奇妙なことに気がつきました。

毛皮のおなかには合わせ目とボタンがあるのですが、合わせ目の隙間から、こぼれ出たのかもしれない。その下に何かが落ちているではありませんか。

かがんで、ススムは何気なく拾い上げました。

一枚の写真でした。新しいものではありませんが、二人の人物がはっきりと映っています。

若い母親が赤ちゃんを胸に抱いている姿でした。

映っている人の正体に気づいて、ススムがあつと声を上げるのに、時間はかかりませんでした。

母親の顔に、ススムは見覚えがありました。なんとススムのお母さんその人だったではありませんか。

すると抱かれている赤ちゃんはススム自身なのでしょう。

写真の中のお母さんはまだ若く、幸せそうに微笑んでいます。十数年後に病気で死に、自分そっくりに変身した妖怪ギツネがこの子育てを引き継ぐなどとは、夢にも知らないに違いありません。

写真を眺めているうちに、ススムはなんだか悲しい気持ちになっ
てしまいました。もう少しで涙まで出そうになったほです。

だけどその気分も長く続くことはありませんでした。巨大な怪物の恐ろしい鳴き声が、風に乗って遠くから聞こえてきたからです。

敵を引き連れて、お母さんが戻ってきたに違いありません。

写真を毛皮の中に押し込み、ススムはもといった場所へと駆け戻ることになりました。

その4

お母さんと敵の姿が見えてくるのに、時間はかかりませんでした。

敵の姿をついに目にして、目を丸くするどころか、ススムは恐ろしささえ感じるようになりました。

町の中で普通に見かけるものに比べて何倍もあるけれど、お母さんはカラスの姿に変身していました。もしかしたらススムを背中に乗せて飛ぶことができるかもしれない大きさです。

だけどそのお母さんと比べても、敵のサイズは圧倒的なのです。

これほど巨大な妖怪を、ススムはこれまで一度も目にしたことがなかったのです。頭からしっぽの先まで入れれば、100メートルはあるに違いない竜だったではありませんか。

ラセツも、まったくとんでもない怪物を送り込んできたものでした。

体のサイズだけでなく、飛ぶ速さもお母さんとはかなりの差がありました。翼の大きさが違うのだから当然かもしれませんが、お母さんは必死になって羽ばたいているのに、竜のほうは涼しい顔でついてくるのです。

竜の体は美しい緑色に輝いていました、ウロコの一枚一枚が太陽の光を反射しています。

それに比べるとお母さんは黒いばかりで、地味なものでした。

竜とお母さんは、神木へとドンドン近づいてきます。もう一度駆け出し、ススムは大きな枝の影に身を隠さなくてはなりませんでした。

竜がさらに近づくと、台風のように強い風が吹き始めました。

そしてついに、お母さんが神木の葉の中へ飛び込んできたのです。あのロープめがけて竜を誘導しているのは、いうまでもありません。

お母さんから言われていたとおりに、ススムは身を伏せました。

その直後、竜も葉の中へと頭を突っ込んできました。枝どころか幹までが大きく揺れ、葉が何千枚もまき散らされることになりました。

竜に触れてロープがピンと伸びるのを、ススムは木の振動から感じ取ることができました。

まるで釣り糸のように、ロープは一瞬でまつすぐになったのです。たまたまですが、ずいぶんうまい場所に張り渡したものでした。ロープは竜の胸の表面を滑っていったのです。そして…

その結果を、ススムはすぐ目の前で目撃することができました。

竜のウロコは、一枚で畳と同じほどのサイズがあります。例のゲキリンにも、ススムはすぐに気がつくことができました。お母さんの言葉どおり、一枚だけ上を向き、逆さまに生えているのです。

だけどなんということでしょう。ススムの目の前でロープはその

ゲキリンにちょうぶつかり、まるでギロチンのように、あつとい
う間に胸からむしりとってしまったではありませんか。

その5

お母さんにとってもススムにとっても、これは意外な展開でした。

むしりとられたゲキリンは竜の体を離れ、木の葉のように舞いながら、下へと落ちていったのです。耳をおおいたくなるほど大きな竜の悲鳴が、あたりに響くことになりました。この声は猫坂中に聞こえたに違いありません。

ゲキリンは竜のエネルギーの中心であるというお母さんの説明は、間違っていないかったのでしょう。まるでスイッチでも切れたかのように、竜は一瞬で力を失ってしまったではありませんか。

頭は力なくなれたさがり、翼は羽ばたくのをやめ、おかげで進路がずれて、神木の幹へと真正面からぶつかっていったのです。

あれほど大きな怪物なのですから、とんでもなく強い衝撃だったに違いありません。さすがの神木もあっさり二つに折れてしまったのです。

幹の中を太いヒビが走り、神木は崩壊を始めました。

ススムはとつさに枝につかまろうとしたのですが、うまくいきませんでした。彼の指は、やわらかな葉の表面を滑ってゆきました。

ついに足先までが木を離れてしまい、ススムは転落しそうになりました。でもそこへお母さんがやってきてくれたのです。

大ガラスの姿のまま、お母さんはススムの体の下へサッと飛びこ

みました。

それは本当にギリギリのタイミングで、ススムはかろうじて落下せずにすんだのです。お母さんの背中の上に、ストンと座ることになりました。

「ススム、私の首につかまれ」

お母さんの声は緊張していました。

でもそれも無理はないかもしれません。神木の崩壊は、まだまだ二人の周囲で続いていたのです。

細い枝はムチのように空気を切り、太い枝は、牙をむいたオオカミのように襲いかかってきます。幹はバラバラのカケラになり、雷に打たれた岩山のように崩れ落ちてゆくのでした。

お母さんは、それらの間を力強く羽ばたき続けたのです。

二人は、なんとか崩壊に巻き込まれないですむことができました。

羽ばたき続けて高度をかせぎ、ついに安全なところへと達することもできました。そこから二人は見下ろしたのです。

ウロコは相変わらず美しく輝いていますが、竜はもはやピクリともしませんでした。神木と共に、森の中央に長々と横たわっているのです。

まるで眠っているような姿ですが、胸から流れ出す血は見落としてようがありません。

「お母さん、竜は死んだのかな？」

「ゲキリンがちぎれ飛んでしまうとは、まさか私も思わなかったよ。ああ、確実に死んださ」

「これからどうするの？」

「ラセツがどう出てくるかが見ものだが…、おやススム、あれをこらん。なんてことだ」

その言葉に、ススムも思わず息をのむことになりました。死んだ竜の体にある変化のきざしが見えていたのです。

「お母さん、あの竜はラセツが変身したものだっただ」

ススムの言うとおりでした。二人の目の前で、竜の死体はゆっくりと縮んでいったではありませんか。同時に形も変え、ついにはラセツの姿になってしまったのです。

胸から血を流して、ラセツは横たわっているのです。死んでいるのは間違いありません。まぶたを閉じているので、宝石のように輝く瞳を見ることはできませんでした。

お母さんが口を開きました。

「ラセツのやつめ、かなり無理をしていたのだな」

「どうして？」

「みずから竜に変身するなど、なかなかできることではないからさ。命と引き換えの覚悟が必要な大変な術だよ」

「自分の息子のために、ラセツは大きな賭けをしたんだね。恐ろしい姿だけど、こうしてみるとラセツもかわいそうだね」

「まあな」

ここでススムは気づき、目を丸くすることになりました。

「あれお母さん、いつの間にキツネの毛皮を着たの？」

「枝にかけておいたのだが、神木が崩れたときに落ちてきたのだろう。すぐそこに落ちていたのを、いま偶然見つけたのさ。」

しかしこれで、妖怪王国の王位は私の息子が得ることに決まったわけだ。めでたいといえば、めでたいではないか」

「めでたいって、ラセツが死んだのに？ 妹なんでしょう？」

「ラセツの実力では、たとえ呪文の助けを借りて竜に変身しても、元の姿に戻るのとはかなわなかったであろう。竜の姿のまま死ぬつもりでいたのだろうな」

「竜になるって、そんなに難しいことなの？」

「私ほど呪文が使えるものであっても、とつてい自信が持てぬほどだ。それはそうとススム、私たちはここに長くとどまらぬほうがよいぞ」

「どうして？」

「仮にも妖怪王の娘が死んだのだ。やがて家来たちが集まり、死体を王国へ連れ戻ることだろう。葬儀には私も出席せねばなるまいな」

「お母さんが殺したのに？」

「ラセツと私の間で行われたのは、妖怪の名誉をかけた戦いだっただのさ。勝っても負けても、何も恥じることはない。

さあススム、私の背にお乗り。騒がしくなる前にこの場所を離れることにしよう」

こうしてススムとお母さんは家へ帰ってきたのです。もちろん忘れずにゼロ禅師の寺に寄り、カバンを受け取りました。

ミチコやお父さんがいる前ではもちろん無理でしたが、お母さんと再び二人きりになったとき、ススムは口を開かないではいられませんでした。

「ねえお母さん、お母さんの息子が次の代の王になると決まったから、もう本を探す必要はないんでしょう？ お母さんは地底へ帰っちゃうの？」

お母さんは、ゆっくりと首を横に振りました。

「いいやススム、私はまだ帰りはしないさ。おまえとミチコが大人になる日まで母親の代わりをすると、私はおまえの母に約束したのだ。約束は守らねばならぬ」

「お母さんの息子はどうなるの？ 一人でさびしがらない？」

「ふふふ、あの子はさびしがったりはせぬさ。それにススム、父はまだまだ元気なのだ。私の息子が妖怪王国の王になるのは、ずっとずつと先の話だ」

「ふうん。あのね……」

「もう夜遅いよ。おまえはお休み。明日も学校があるのだろう？」

「だけど……うん、お休みお母さん」

「お休みススム」

ススムは自分の部屋へと帰ってゆきました。

お母さんにききたいことは、まだまだたくさんあったのですが、また次の機会を待つことにしたのです。

地底にいるお母さんの息子とはどんな妖怪なのか、もちろんススムはまったく知りませんでした。会ってみたいような気がしないでもなかったのです。

だけど今日のところは、お母さんがこの先もまだ何年間か、この家に一緒にいてくれるということがわかっただけで、満足することにしたのでした。

城の怪異 その1

ラセツの葬儀は数日後に行われました。

ススムだけにそつと耳打ちをし、真夜中の数時間だけ家を抜け出し、お母さんは地底へ帰っていたのです。

でも朝になって、お母さんの表情が暗いことにススムは気がつきました。

「お母さん、どうしたの？ 何かあったの？」

「ああススム、実は昨夜の葬儀で奇妙なことがあったのだよ。ラセツの息子のことだ」

「うん」

「息子の名はナユタというのだが、その姿がなぜか葬儀会場になかったのだよ。家来たちはもちろん探したが、妖怪城の中にも外にも見つけることができなかった」

「どうして？」

「それがわからないから困っているのだよ。部屋には置手紙すらなかったが、どうやらナユタは、どこかへ行ってしまったようだ」

「ラセツが死んだから、ショックだったのかなあ」

「そんなしおらしいやつであるものか。昨夜、王が言ったのだが、

ラセツが死んだからといって、まだ私の息子が跡継ぎと決まったわけではないそう。やはりあの3冊をすべて集めた者が勝者になる」

「じゃあナユタが3冊とも集めてしまう可能性がまだあるわけだね。ナユタは、そのために姿を消したんだ」

「おそらくそうだね。ナユタは、私が持つ2冊を盗み出そうと必ずやってくるに違いない」

「やれやれ、お母さんも大変だね」

「なんだススム、他人事のように言うのではないぞ」

「どうしてさ？ 僕から見れば、悪いけど全部、他人事だよ」

「ん？ ああそうか。そうだったな。忘れていたよ」

「何言ってるのさ。変なお母さん……」

その2

その日もいつものように、ススムはゼロ禅師の寺の門をくぐったところでした。

「やあススム君、きたね」

「うん禅師」

「そうだススム君、あのニュースを聞いたかい？」

「猫坂城のことでしょう？ 電車の中でもみんな噂してたし、学校でもその話ばかりだった。でもそうだよ。お城の中を夜な夜な妖怪が歩きまわっているなんてね」

「それがススム君、噂で聞いたのだが、なぜだか花の匂いのする妖怪らしいのじゃよ」

「花って？」

「文字通りの花だよ。菊とか桜といったあの花さ」

「そんなにいい匂いがする妖怪なの？ そんな妖怪が猫坂城で何をしているのかなあ」

「それが、屋根のカワラを一枚一枚はがしているらしいのさ。多少は腕力のある妖怪らしいが、猫坂城はあの大きさだからね。すべてのカワラをひっくり返すのに時間がかかっているのさ」

「カワラを全部裏返して、何の意味があるの？」

「うん、どうやらカワラの下に隠されている物を探しているのではないかという気がするね」

「カワラの下に宝物でもあるの？」

「ははは、それはわしにもわからないさ。でもススム君、その妖怪が昨夜まで、2晩続けて猫坂城に姿を見せているのは事実なのだよ」

家へ帰ってから、もちろんススムは、この話をお母さんに伝えたのです。

「ふうん」とはじめは気のないふうでしたが、話の途中で、お母さんの表情は大きく変化することになりました。

「なんだってススム？ 花の匂いのする妖怪だって？」

「ゼロ禅師がそういつてたよ。妖怪が現れると、あたりにとてもいい匂いがただようんだって」

「その妖怪が、猫坂城のカワラを毎夜毎夜、一枚ずついていねいにはがしているというのかい？」

「そうだよ」

「なんとススム、これは大変なことだぞ」

「どうして？」

「花のような体臭とは、ナユタの特徴だからさ。その妖怪はナユタかもしれぬ。妖怪の姿を目撃した者はいないのか？」

「真夜中だから一人もいないんだって。でも屋根の上に黒い影が乗り、バリンバリンとカワラを一枚ずつ調べているのは確かなんだって」

「ええいススム、ナユタに先を越されるわけにはいかぬぞ」

「あの最後の1冊が、猫坂城のカワラの下に隠されているというの？」

「そうとしか考えられないではないか。よしススム、今夜、私たちも出かけよう」

「猫坂城へ行くの？」

「決まっているさ。最後の1冊を、どうしてもナユタよりも先に見つける必要がある」

その3

真夜中になりました。

いつものようにそつと家を抜け出し、お母さんは妖怪ギツネの姿になり、ススムを背中に乗せて、電柱の上を駆けていました。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、今夜も猫坂城にナユタがやってくると思う？」

「もちろんさ。ゼロ禅師も言ったとおり、猫坂城はとても広い。カワラは何万枚もあるに違いない。本の隠されている場所など、そう簡単に見つかるものではないさ」

「だけど、ナユタと戦いになったらどうするの？」

「ふふふ、私が負けるのではないかと心配しているのかい？」

「ナユタって強いのか？」

「それがなススム、ナユタはろくな腕力もなく、呪文すらあまり使えないんだよ。赤子の手をひねるようとは言わぬが、正面から対決することになっても、私はあまり心配しておらぬ」

「へえ」

猫坂城までは少し距離がありました。その後は二人とも黙ったまま、走り続けたのです。

やがて家々の屋根のむこうに、猫坂城の姿が見えてきました。星の光る空に、真っ黒なシルエットがギザギザに浮かび上がっているのです。

猫坂城は町で最大の建物で、闇の中で見ても息をのむほどの大きさがありません。内部は博物館もかねていて、小学生のときにススムも遠足できたことがありました。

「お母さん、どこでナユタを待つのか？」

「ああ、あそこがいい」

お母さんが見上げる先を目で追って、ススムは口をポカンと開けることになりました。なんとお母さんが視線を向けていたのは、城内で最も背の高い建物、天守閣だったからです。

「本当にあの上に登るのか？」

「高い場所のほうが、見張るのには都合がよいではないか」

「それはそうだけども……」

ススムはあまり気が進まなかったのですが、あつと思ったときには、お母さんはもう屋根づたいに登りはじめていたではありませんか。

まるでリスのように、ひさしからひさし、屋根から屋根へ飛び移ってゆくのです。背中毛にギョツとつかまり、ススムは思わず目を閉じないではいられませんでした。

でもお母さんの足はバネのように力があり、足の裏はやわらかいゴムのようで、スリップする気配すらありませんでした。

気がつくとススムは、天守閣の頂上にいたのです。

「さあススム、目をお開け」

お母さんの言葉におそろおそろ従ったのですが、目の前に広がる景色に、ススムは思わず声を上げてしまいました。

ここからなら、文字どおり町全体を一目で見渡すことができるのです。きらめいている街灯やネオンサインは、まるで黒い布の上にガラスのカケラをまき散らしたかのような眺めではありませんか。

「うわあ、お母さん見てよ。とてもきれいだよ」

「そうかい？ それならおまえを連れてきたかいがあつたというものだね。しかし油断をするのではないよ。いつナユタが現れるかわからないのだからね」

「うん」と返事をしましたが、ススムはよくわかっていなかったのかも知れません。お母さんの背中にまたがったまま、景色に見とれていたのです。

そういう二人の姿を、よく訓練された目が見逃すはずはありませんでした。

その4

ススムの耳に聞こえたのは、ヒュツという小さな音でしかありませんでした。空気を切って、突然何かが飛んできたのです。

次の瞬間には前足を折り、お母さんの体が苦しそうに大きく傾いたではありませんか。

「お母さん、どうしたの？」

「誰かが矢を放ってきたのだ。ススム、私の体の右側にお隠れ」

意味に気がつき、ススムはぞつとするような恐ろしさを感じるようになりました。鉛筆ほどの長さしかない小さなものですが、お母さんの左肩には本当に矢が突き刺さっていたのです。

「お母さん、どうしよう」

「いいから早く私の影に隠れるのだ。おまえまで矢を受けてしまうぞ」

「でもこれを引き抜かないと」

「触るな。呪文の書かれた妖怪封じの矢だ。おまえまで魔力を受け、体がしびれてしまうぞ」

そういつて、お母さんは強引にススムの左側に割り込んだのです。そうすればお母さんの体が盾になり、ススムは安全でいることができます。

首を後ろに曲げ、お母さんは矢の先を口にくわえました。そして一気に引き抜いてしまったのです。

「誰がお母さんを攻撃したのか、僕見てくる」

お母さんが振り返る前に、ススムはもう駆け出していました。お母さんには止める暇もなかったのです。

矢を放った敵がどこに隠れているのか、大体的見当はついていました。暗がりをつとて身を隠しながら、ススムは近づいていったのです。

天守閣の屋根は広く、体育館にも負けない面積がありました。急斜面なので、足を滑らせないように注意しなくてはなりません。

それでもススムは進んでゆくことができました。たまたま黒い服を着ていたことも役に立ったかもしれません。

屋根の一部には切り立った高い崖のような部分があり、敵はそこに身を隠していたのです。

矢を受けてお母さんが動けなくなった後、第二の矢を放ったものかどうか、様子を探っていたのでしょう。そこへ突然ススムが現れたものだから、敵はひどく驚いたに違いありません。

「ススム君、こんなところで何をしているのだい？」

びっくりしたのは、もちろんススムも同じでした。

「禅師こそ、こんなところで何をしているの？」

「市長に頼まれて、カワラを壊す妖怪を退治しにきているのだよ。体のしびれる呪文を書いた矢を、たった今、放ったところさ」

「その矢が、僕の家に住んでいる妖怪ギツネの肩に命中したんだよ」

「なんだって？」

すぐにススムが事情を説明したのは、いうまでもありません。

「なんだってススム君？ 物好きにも君はあのギツネの背に乗って、猫坂城を荒らす妖怪を見物に来ていたというのかい？」

「そうだよ」

「そこへわしの矢が当たってしまったというのだね」

「矢を射るなんてひどいよ。呪文のせいで、ギツネは動けなくなっ
てしまったんだ」

「これは困ったことだぞ。市長から頼まれ、わしはここで待ち伏せていたんじや。妖怪に軽いケガを負わせて、二度とこの城を荒らす
気を起こさせないようにするためさ」

「禅師一人だけなの？ 仲間はいないの？」

「市の職員たちとは意見が合わなくて、わしは単独行動をとったの
だよ」

「どうして？」

「職員たちは『そんな迷惑な妖怪は殺してしまうべきだ』と主張した。わしは反対で、殺さずとも追い払うだけでいいと言った。」

互いにゆずらず、その結果わしはここに一人でいるわけだが、職員たちは城内に隠れて散らばり、妖怪が姿を見せるとただちに集まり、いつせいに攻撃を始める手はずになっているのだよ」

「職員たちは、僕とキツネがこの屋根の上にいることに気づいていると思う？」

「もちろん気づいているさ。見張りが何人もいて、双眼鏡で監視を続けているからね。ほらススム君、あの下をごらん。広場に人が集まっているのが見えるじゃないか」

「あそこ？ 30人ぐらいいるね。みんな手に棒を持ってる」

「ただの棒であればよいがね。あれは猟銃ではないかな。しかもその猟銃には、銀の弾丸が込めてあることだろうよ」

「銀の弾丸って？」

「妖怪退治の道具さ。普通の弾丸で妖怪を倒すのは難しいが、銀の弾丸ならばまったく効果が違う」

「僕のキツネは殺されちゃうの？」

「それもありえない話ではない。だがススム君、わしに少し考えがある。とにかくまず、ケガをしたキツネのところへ行こうじゃない

か
こ

その5

お母さんはとても機嫌を悪くしていました。

「おい禅師、おまえが私に矢を放っただと？ 体さえしびれていなければ、おまえを頭からガリガリかじってやりたい気分だぞ」

「わしなんぞを食ってもうまくはないよ、キツネさん。それよりもススム君のことが心配じゃな」

「どういうことだ？」

ゼロ禅師は、手短に事情を説明したのです。お母さんが顔色を変えるのに時間はかかりませんでした。

「禅師、その市職員たちとやらは、いつこの屋根に上がってくる？」

「あと15分というところかな。この城は古くて、エレベーターなどないからな」

「そもそも禅師、おまえはなぜ矢に呪文など書いておいた？ おどかして追い払うだけなら、矢を当てるだけでよい。呪文など必要ないであろう？」

「敵がどんな妖怪かわからなかったからさ。思わぬ巨大な怪物かもしれないではないか。だがキツネさん、強い呪文ではないから、そのしびれももう消えてきたのではないかな」

「ああ、その通りだ。だがススムを背に乗せるほどにはまだ回復し

ていない。私一人なら、なんとかこの場から逃げ出せるだろうが」

「うーん、それは本当に困ったな」

3人の間で相談が始まったのですが、ゆっくりしている時間はありませんでした。市職員たちが、もういつ姿を現しても不思議はないのです。

ススムはキョロキョロとまわりを見回しました。

「禅師は、どこからこの屋根の上に上がってきたの？」

「あそこさ。小さなドアが見えるだろう？ ハシゴがあつて、一つ下の階につながっているのだよ」

お母さんが口を開きました。

「そんなことよりも禅師、ススムをここから安全に逃がす方法を考えよう。どうやら私とススムは、ナユタのワナにはまってしまったようだ」

「どういうことなのかな？」

「3冊の本をめぐつて、ナユタと私が争っていることは知っているな？」

「そうらしいね。ススム君から聞いたよ」

「そのナユタがこの城でさかんに力ワラを壊し、わざと私をおびき寄せたのだと思う。おまえや市職員たちに私を殺させようという計

画なのだろうよ」

「やれやれ、わしは何も知らずに矢を放ってしまったわけか。申しわけのないことをした」

「その責任は、後でじっくり取ってもらうさ。とにかく今は、ススムの安全を第一に考えよう」

「何か作戦があるのかい？」

「そんなものあるものか。市職員たちをひきつけ、私が大暴れするから、そのすきにススムを連れ、禅師はここから逃げてくれ」

「いや、それには賛成できないな。いくらあんたでも、銀の弾丸にはかなうまい」

「そんなことを言つて、他にやり方があるか？」

「あるともキツネさん、わしのすることをまあ見ておいで」

そう言つてゼロ禅師はカバンの中に手を入れ、しばらくゴソゴソと探していたかと思うと、何かを取り出したではありませんか。

手の中にすっぽりと納まるほどで、あまり大きなものではありません。ススムは目をこらしました。

「禅師、それは何なの？」

「妖怪火花さ」

お母さんが鼻を鳴らしました。

「そんなおもちゃが何かの役に立つのか？」

ゼロ禅師はにっこりと笑いました。

「まあ、ごらんあれ」

妖怪花火には小さな導火線があり、ゼロ禅師はそれに火をつけました。次に、広場に集まっている職員たちめがけて、ポンと放り投げたのです。

風を切り、カーブを描きながら妖怪花火は落ちてゆきました。うまい具合に広場の中央に着地したのです。

大きな音や煙と共に花火が破裂したのは、その瞬間のことでした。

職員たちは、腰を抜かしそうなほど驚いたに違いありません。

妖怪花火とは昔からある道具で、火をつけると煙を出し、その煙の中に妖怪の姿が映し出され、牙をむき、恐ろしい声でうなるというものにすぎません。

でもそんなおもちゃでも、役に立つときがあるのです。妖怪退治のために神経を張り詰めていた職員たちは、簡単に引っかかってしまいました。

すぐに猟銃の音がパンパンと、天守閣の頂上まで聞こえてきたではありませんか。

最初は顔を見合わせていましたが、ススムたちはすぐにクスクスと笑い始めました。

ススムが言いました。

「ねえ見てよ。みんな煙の中の幻の妖怪をねらって撃ってるよ」

お母さんはあきれた声を出しました。

「しかしまた不細工な妖怪だな。禅師、もっと恐ろしげな姿にできなかったのか？」

「いやあキツネさん、恐ろしい姿の妖怪というのは、薬品の調合が難しくてね。失敗して、あんな姿になってしまったのじゃよ。だが役に立ったのだから、よいじゃないか」

それにはススムも同意することができました。

「そうだよキツネさん、役に立ったんだもん。あれでいいよ。笑っちゃう姿の妖怪だけどさ」

すぐにススムたちは、天守閣の屋根から降り始めました。ゼロ禅師が道案内をし、長く続くハシゴや階段をたどっていったのです。

広場から聞こえていた銃声や物音は、やがて静かになってしまいました。

ただ花火の火が消えてしまっただけなのですが、妖怪を追い払うことに成功したと思い込んでいるのでしょうか。職員たちの機嫌のよい話し声や笑い声が聞こえてくるではありませんか。

窓からのぞくと、市職員たちはすっかり安心して、帰りじたくを始めているようです。もうこれで心配はないでしょう。

ススムたちも、このまま暗闇にまぎれて家へ帰ればよいと思えました。ところが実際には、天守閣の外へ出ることさえできなかったのです。

最初に声を上げたのはススムでした。

「あれ？ あそこに誰がいるよ」

すぐにゼロ禅師とお母さんも目をこらすことになりました。そしてススムの言うとおりだとわかったのです。

広間のように大きな部屋の中央なのですが、誰かが立ち、ススムたちを待ちかまえているではありませんか。

その6

姿は普通の少年のように見えました。年齢も、ススムとあまり変わらないうちかもしれません。

下の階へと続く階段には、この広間を横切らないと行くことができません。ゼロ禅師が口を開きました。

「ススム君、あれは君の友達かな？」

「ううん、知らない人だよ」

このときになってやっと、少年は一人ではなく、連れがいるらしいことに気がつくことができました。

連れは二人いて、暗がりにはまぎれてわかりにくかったのですが、一人は古めかしい服を着た小柄な老人、もう一人はなんと、お母さんにも負けないとんでもない大きさの猫だったのです。

この猫はネコマタという妖怪なのですが、動物園にいるトラよりも大きな体をしているではありませんか。

お母さんの声があたりに響きました。

「やあナユタ、元気にしていたのだな」

目を丸くし、ススムとゼロ禅師が思わず顔を見合わせたのは、いっまでもありません。この少年がナユタだったのです。

ナユタの隣にいる老人が口を開きました。

「さあ坊ちゃま、今こそ母上のカタキを取るチャンスですよ」

お母さんが言いました。

「カタキだと？ 確かにラセツは死んだが、あれは事故のようなものだぞ」

「坊ちゃま、あの者の言葉に耳を貸してはなりません」

困ったような顔でゼロ禅師が振り返ったのは、このときのことでした。

「わたしにはよく意味がわからないのだが、誰か説明してくれんかな」

ついにナユタが口を開きました。

「説明も何もあるものか、ゼロ禅師。僕はそのキツネと戦い、母のカタキを取る。禅師の相手はこの老人がする。ススムの相手をするのはネコマタだ。3人とも覚悟はよいか？」

「何だつて？」とススムは口を開きかけたのですが、最後まで言葉を続けることはできませんでした。その前にお母さんが言ったからです。

「ススム、これは逃げるわけにはいかないようだよ。ナユタがああまで自信たっぷりなのは、この天守閣がすでに呪文で封印され、誰ひとり外へ出ることができないようにしてあるからに違いない」

ナユタはゆっくりとうなずきました。

「その通りさ。天守閣の外へ出たければ、おまえたちは僕を殺すしかない」

ゼロ禅師が言いました。

「やれやれ、聞いたとおりだよススム君。ここは一つ、覚悟を決めて戦う以外になさそうだ」

お母さんがもう一度口を開きました。

「ススム、私が貸してやった魔力の杖は、今もポケットの中に入っているね？ ネコマタとの戦いは、すべて杖にまかせるのだよ。おまえは、ただ杖の言うとおりに動けばいい。いいね？」

もちろんススムはうなずきました。それ以外にできることは何もなかったのです。

ついに戦いが始まりました。

その7

最初ススムは、ネコマタとは一対一で対決するものと思って緊張していました。いくら魔力の杖の助けがあっても、もちろん自信がなかったのです。

しかしそれはお母さんも同じだったかもしれません。

ススムを一人にするのが不安だったのでしょうか。ナユタたちが何か行動を起こす前に、そでをくわえてクイツと引かれ、気がついたときには、ススムはお母さんの背中の上にいたではありませんか。そしてお母さんは駆け出したのです。

「お母さん、体はもう大丈夫なの？」

「もうとつくに直っているさ。そんなことよりもススム、ナユタのやつはどうした？」

「ネコマタの背中にまたがって、もちろん追いかけてきてるよ。あの変なじいさんと禅師は、向かい合ってなにやら呪文をとえ始めている」

「あのジジイの名はガゴジというのさ。ナユタの家庭教師だが、ゼ口禅師のことは気にしなくてよからう。呪文をかなり使えるからな」

「僕たちはどうするの？ ほら、もうすぐナユタとネコマタが追いついてくるよ」

「それは気にするな。ナユタの呪文の力など知れているし、ネコマタはただ大きな猫でしかない。さあススムつかまれ。窓を破って飛び出すぞ」

お母さんの言葉にススムが身構えることができたのは、本当にギリギリのタイミングでしかありませんでした。

体当たりをして窓を突き破り、雨戸をコナゴナに壊して、ススムとお母さんは建物の外へ身をおどらせることになりました。

だけど強力な呪文がかけてあるのです。屋根に出ることはできません、ススムもお母さんも、天守閣の敷地を離れることは一歩もできないのでした。

ネコマタに乗ったナユタに追われ、結局お母さんは屋根の頂上で立ち止まるしかありませんでした。

お母さんがささやきました。

「さてススム、ここからが問題だ。ポケットから魔力の杖をお出し」

「うん、出したよ。ナユタも魔力の杖を持っているの？」

「もちろんさ。ナユタの腰をごらん。帯に突き刺してあるのが見えるだろう?」

「あの杖とお母さんの杖と、どちらが強いのか?」

「ほぼ互角であろうな。どちらも、父が私たち姉妹に与えたものだ」

「ああそうか。ナユタはお母さんの『おい』なんだね。それでも戦うの？」

「戦いたくなどないが、ナユタが仕掛けてくる以上、選択の余地はない。さあススム、ナユタが自分の杖を手に取ったぞ」

正直に言っ、ススムは杖を持つ手が小刻みに震えて仕方ありませんでした。張りのあるナユタの声があたりに響いたのは、このときのことだったのです。

「伯母上、おとなしく僕の手にかかるのだ。そうすればススムの命だけは助けてやろう」

これに対するお母さんの返事はあまり上品ではなく、こんなときなのに、ススムは目を丸くすることになりました。

「ふん、おととい来やがれ」

ナユタは表情を変えましたが、何も言いませんでした。そのままお母さんとにらみ合いを続けたのです。

このあと何が起るのでしょうか。

胸をドキドキさせながらススムは待ったのですが、どうもおかしいのです。にらみ合うばかりで、ナユタもお母さんも何の行動も起こさないではありませんか。

ネコマタも同じようで、飛びかかってくる気配はありません。

そのまま30秒近くたったところで、とうとうススムは奇妙に感

じ始めました。

「どうなってるの？ お母さんもナユタもどうして動かないのかなあ」

それでも何も起こりません。キヨロキヨロして、ついにススムはお母さんの目の中をのぞき込んだりしましたが、お母さんは目玉を動かすどころか、まばたきだっしてしないではありませんか。

ナユタも同じ状態らしいと、ススムは気がつきました。ススム一人を残して、みんな凍りついたかのように動かないのです。

「一体どうなっちゃったのかなあ」

ススムはつぶやいたのですが、答えは意外なところからやってきました。

聞き覚えのある甲高い声が、突然頭の上から聞こえてきたのです。

「おいススム、それはオレのしたことだよ」

見上げると、あのフクロウがパタパタと舞い降りてくるところでした。

「やあフクロウさんか」

「ススム、オレをおまえの肩にとまらせてくれよ。お師匠様の体にとまると、呪文の魔力がオレにもかかってしまうんだ」

「呪文って？」

「オレが呪文をかけたから、お師匠様もナユタも凍りついたように動けなくなったのさ。ちょっとおまえに相談したいことがあってな」

「僕に？」

「そうさ。お師匠様とナユタのそれぞれの杖だが、この2本は本当に互角で、戦ってどちらが勝つかは誰にも予想がつかん。お師匠様が勝てばよいが、負けることだって十分考えられる」

「へえ」

「だからオレとしては、この戦いはなんとかやめさせたい」

「どうやって？」

「そこで相談なのさ。この戦いをやめさせ、仲裁することができないのは、どう考えても妖怪王様を置いて他にない」

「お母さんとラセツのお父さんだね」

「そうさ。怖い怖いカミナリ親父だ。妖怪王様を呼んで、この戦いをやめさせたいとオレは思う。そのためにオレは地底へ行ってくるが、勝手なことをしたと後でお師匠様に怒られるのはかなわん」

「そんなにお母さんが怖いのか？」

「ああ怖いね。あのラセツの姉だぞ。恐ろしくないわけがなかつた？」

「ははあ」

「そこでだススム、後になって、もしもお師匠様が怒ったら、そのときはオレをかばって、おまえが味方になってくれるかい？ 味方になると約束してくれるのなら、オレは今すぐ妖怪王様を呼びにいつてくるよ」

もちろんススムは首を縦に振りました。お母さんが傷つくかもしれない戦いなど、うれしくもななんとなかったからです。

大きくうなずいてフクロウは飛び立ち、パタパタと音を立てましたが、こげ茶色をした姿は、夜の闇の中にすぐに見えなくなっていました。

フクロウがいなくなっただけから、お母さんとナユタはピクリとしませんでした。

どちらもまばたきをすることも、息をすることさえなく、再び動き始める気配を見せません。

お母さんの背中から降り、ナユタに近寄って、ススムは二つの魔力の杖を見比べてみたりもしました。二つの杖は、双子とっていいほどそっくりでした。

ススムはもうすっかり退屈していたのですが、妖怪王がついにやってきたときには、心臓が裏返ってしまいそんな怖い気持ちでしたものでした。

地底に住み、何千もの妖怪たちを支配している王なのです。恐ろしく感じないはずがありません。

でもススムは、妖怪王の姿を見ることができたわけではないので
す。親切心からでしょうが、真っ黒な煙の中にすっぽりと姿を隠し
て、妖怪王はススムの前へやってきたのです。

それはまるで、煙でできた生きた柱のような眺めでした。

妖怪王の声が、あたりに響きました。

その8

「ススム君といったかな？」

声がしわがれているので、やはり妖怪王は老人のようです。でも張りがあり、力を失っている様子はまだまだありません。

おそろおそろススムは返事をしました。

「うん」

「じかに会うのはこれが初めてだね。わしは姿を隠していて申し訳ないが」

「うん」

「君には、わしの娘が世話になっているね」

「あんまりしつけのいい娘さんじゃないね。さっきも『おととい来やがれ』なんて言ってたよ」

「ははは、きつとわしに似たのだよ。それはそうとフクロウの言うとおり、この争いをなんとかやめさせたいものだね」

「そうだよ。なんとかしてよ」

「ああ、このケンカはわしが責任を持ってやめさせよう。約束するよ。呪文がとけて、わしの娘が再び動けるようになったら、君からこれを手渡してくれるかい？」

黒い煙の中から、白い紙に書かれた手紙が差し出されたのは、このときのことでした。手袋をした手がつかんでいるということだけは、ススムも見ることができました。

「うんわかった。お母さんに手渡すよ。でもナユタはどうするの？」

「ネコマタと一緒に、今すぐわしが地底へ連れ帰るよ。ほらススム君、ごらん」

その言葉と共に黒い煙が大きく伸び、ヘビのように長くなって、あっという間にナユタとネコマタを包んでしまったのです。

このまま妖怪王は地底へと帰ってしまうようです。

「じゃあな、ススム君」

「あつ、ちよつと待ってよ。一つだけ質問してもいい？」

「どんなことかな？ わしだって、この世のすべての質問に答えることができるわけではないのだよ」

「お母さんのことなんだ。あの毛皮の下にいるお母さんの本当の姿を、僕は一度も見ることがない。でもお母さんはラセツの姉なんでしょう？ お母さんも、ラセツと同じあんな恐ろしい姿をしているの？」

「ふふふ、ススム君はそれが気になるのかい？」

「うん、少し」

「しかし困ったな。娘がどういう姿をしているかということは、父親のわしですら軽々しく口にできないのだよ。それが妖怪世界の礼儀というものさ」

「どうして？」

「妖怪とはそういうものなのだよ。だからススム君、わしの娘の姿のことは、本人にききたまえ。ああ、本人の口から聞くのが一番いいさ」

「なら、この質問には答えることができるでしょう？ お母さんは、妹であるラセツとよく似た姿をしているの？」

妖怪王がクスリと笑うのが、ススムの耳に届きました。

「今度はそう来たか。その質問ならわしも答えることができるよ。答えはノーさ。わしの娘は、ラセツとはまったく違う姿をしている。

ススム君、これで気がすんだかい？」

「うんわかった。ありがとう」

「どういたしまして」

その言葉を最後に、妖怪王は姿を消しました。黒い煙はあつという間に薄くなり、風に吹き散らされてしまったのです。同時に、ナユタやネコマタの姿も見えなくなったのは、いうまでもありません。

お母さんはすぐに動き始めました。そしてナユタの姿がないこと

に驚いたのです。

「ススム、ナユタはどこへ行った？」

ススムの口から事情を説明されて、お母さんはもっと驚くことになりました。

「なんだって？ 父が？」

「妖怪王は、お母さんにこの手紙を渡してくれと言ったよ。ほら」

「おまえは父と平気で口をきいたというのか？ 父は妖怪王だぞ。おまえは、なんとまあとんでもない子供ではないか」

「そう？」

「そうさ。父の前へ出ると、私ですら恐ろしさで身がすくむことがあるというのに。まあいい。まず手紙を読もう」

カワラの上にサツと広げ、お母さんは目を通し始めました。

「ねえお母さん、なんて書いてあるの？」

「ふふふ、私とラセツの間の戦争には、さすがの父も困っていたようだ。王国の妖怪たちまでが、ラセツ派と私派に分かれて、いがみ合いをはじめているとさ」

「それはよくないね」

「だから父はルールを変える気になったらしい。あの本を3冊全部

ではなく、最後に残った1冊を先に手に入れた者が王の跡取りになると決めたそうだ」

「それじゃあ、お母さんは不利になるね。せつかく2冊まで集めたのに」

「仕方がないさ。ラセツが死ぬという大事件があったのだ。ルール変更もやむをえないだろうよ」

「今までの2冊は骨折り損になったね」

「そうでもない。最後の1冊を父がどこに隠したのか、2冊の中に手がかりが書かれているかもしれないではないか。この競争は、依然として私が少し有利なのさ」

ススムは「ふうん」と言いかけたのですが、背後から突然ガタンと音が聞こえ、驚いて振り返ることになりました。

「あつ禅師」

その言葉どおり、下の階へ続くハシゴの扉を押し開け、ゼロ禅師が顔をのぞかせていたではありませんか。

「やあススム君、戦いはどうなったのかな？」

「ガゴジはどうなったの？」

「わしと呪文合戦を続けていたのだね。なぜか突然姿が見えなくなってしまったのさ。そんな呪文をかけた覚えはわたしにはなく、不思議に思っているのだよ」

「呪文合戦かあ。おもしろいだろうね。見たかったなあ」

「いやいやススム君、そんなに期待してもらえるものではなかったのだよ。ガゴジが呪文で大グマを作り出したものだから、わしもさっそく対抗しようとしたのだが、呪文を間違えてね。」

出てきたのはなんと、小さなイタチだったじゃないか」

「へえ」

「だから負けを覚悟したのだが、意外にもこのイタチが健闘してくれてね。大グマの背にのぼり、ひっかくは、かみつくは、なかなかの勝負だったのだよ」

お母さんが口を開きました。

「ススムの話では、ついさっきここへ妖怪王がやってきてな。家来ともどもナユタを地底へ連れ帰ったそうだ」

「すると、あんたとナユタの間の争いは決着がついたということかな？」

「とんでもない。最後の1冊をめぐって、これからも続くのさ。まあしかし、今夜はこれですんだ。さあススム、私の背にお乗り。家に帰ろう」

「禅師はどうするの？」

ゼロ禅師はにっこりと微笑みました。

「わしは歩いて帰るよ。市職員たちに会って、妖怪退治の自慢話でも聞かせてもらうことにしよう。ススム君たちは気にせずお帰り」

ススムたちは、その言葉に甘えることにしました。本当の話、疲れきってススムは、もう少しでまぶたがくつついてしまいそうだったのです。

猫坂城から家まで、お母さんは普段よりもずっと静かに、体を揺らさないように走ったに違いありません。お母さんの背中の上で、ススムはいつの間にか眠り込んでいたではありませんか。

寝息を立てながら、ススムは夢を見ていたかもしれせん。

それがどんな夢であったのか知るすべはありませんが、お母さんの背中でゆりかごのようにゆられ、小さな声で口ずさまれる子守唄に包まれていたのです。

とても楽しい夢だったのは、間違いありません。

本を見つけた

学校で授業を受けているススムのところへ、ある日なんと、お母さんから電話がかかってきたのです。

担任の先生に呼ばれ、どうしたのだろうと首をかしげながら、ススムは職員室へと走ってゆきました。

「もしもし、お母さん？」

受話器を耳に当てると、間違いなくお母さんの声で返事がありました。

「ススム、ちょっときくのだが、まさかおまえのところへ私の毛皮が来てはいまいね？」

「毛皮って、妖怪ギツネの毛皮のこと？ また部屋の中に干していて、行方不明になったの？」

「そう人を責めるものではないよ。小さなほつれができたので、修理しようと道具を探していたのさ。目を離れたのは、ほんの何分間かにすぎないのだよ」

「またお姉ちゃんが着ちやったのかなあ」

「しかしミチコは、今朝もいつものように学校へ出かけたろう？ 原因は何か他のことに違いない。まあいい。おまえのところへ行っていないのなら、他を探してみよう。邪魔をしたね」

「うん」

電話はここで切れてしまいました。

教室へと戻りながら、お母さんの毛皮のなぞを解こうと頭を悩ませたのですが、ススムはいやな予感がして仕方ありませんでした。

電話がかかって来たり、訪問者があつたり、学校にいても、この日はススムにはとても忙しい一日でした。

訪問者があつたのは授業中のことで、開いたままだった窓からパタパタと飛び込んできたのです。

もちろんあのフクロウでした。先生や同級生たちに見つからないように、ススムは大急ぎで机の中へ隠さなくてはなりませんでしたが、狭苦しい場所に押し込まれ、不満そうでしたが、フクロウは文句を言いませんでした。ススムだけに聞こえる声で、そつとささやいたのです。

「おいススム、大事件だぞ」

「どうして？ お母さんの毛皮のこと？」

「もちろんさ」

「お母さんから大体のことは聞いたよ」

「ミチコがちゃんと学校にいることは、オレ自身が行って、いま見てきたところだ。今回はミチコは関係ない」

「うん」

いつの間にかススムは、フクロウとの会話に夢中になっていたに違いありません。知らず知らず声が大きくなっていることに気がつかなかったのです。

それが先生の耳に入らないわけがありません。

ジロリと目を上げ、先生はススムをにらみつけたのです。そして声を上げました。

「その君、何をコソコソしゃべっているのだね」

ススムは胸がドキンとしたのですが、もう手遅れです。ひどく怒られるに違いありません。

ところがここで意外なことが起こりました。

「うるさいよ。話の邪魔をしないでくれ」

そういう声があたりに響いたのですが、声の主はもちろんフクロウでした。ススムの机の中からピョンと飛び出し、教室中を見回したのです。

「だめだよ、フクロウさん」

ススムは止めようとしたのですが、遅すぎました。小さなクチバシを動かし、フクロウはあっという間に呪文をと覚えてしまったではありませんか。

何が起こるのでしょうか。

いろいろと悪いことを想像して息をのみましたが、何秒もたつてから、ススムはおそろおそろまわりを見回すことができました。

そして気がついたのです。先生をはじめ、同級生の誰一人として身じろぎもしません。息をすることも言葉を発することもなく、凍りついたように動かないのです。

まるで人形ばかりが並んでいる部屋のような眺めではありませんか。

ススムはまだキョロキョロしていますが、フクロウは平気な様子です。

「ではススム、話の続きをしよう」

「この魔力はあんたがやったことなの？」

「先生や同級生たちを黙らせたことかい？ もちろんオレの仕業さ。人間を黙らせるのは得意中の得意なんだ」

「それならいいけど……。それで、なくなった毛皮をお母さんは探してるの？」

「そうとも。かなりの大騒ぎになりつつある」

パタパタと羽ばたき、石像のように動かない先生の鼻にフクロウがとまったので、ススムはクスリと笑ってしまいました。

「フクロウさん、その鼻はとまり心地がいいかい？　大騒ぎって何なの？」

「お師匠様は、例の本を2冊ともあの毛皮の内部に隠しておられた」

「うん」

「ナユタなら、こう考えるのではないかね？　毛皮ごとあの2冊をどこかへやってしまえば、3冊目を探すにあたり、お師匠様はかなりの苦勞を強いられるであろう。なにしろ、有力な手がかりを失うのであるから」

「あの2冊の内容が、3冊目を探すのに役立つの？」

「お師匠様はそう考えておられる。ナユタもそう考えておろう」

「じゃあ何かの呪文を使って、ナユタはお母さんの毛皮を遠くからあやつったんだね」

「その可能性が高い。毛皮の行方を探すため、お師匠様は地底から家来たちを呼ぶことにした。だからススム、おまえもお手伝いをするのだ」

「僕が？　学校があるのに？」

「何を言う？　今日の授業はもうあと1分で終わりだ。時計を見なよ」

あわててススムが視線を走らせると、なんとフクロウの言うとお

りだったではありませんか。

クラス全体にかかっていた呪文をフクロウがとくと同時に、授業の終わりを知らせるベルが鳴り始めたのです。

校舎の外へ出ると、すぐにフクロウが口を開きました。

「ようしススム、これを着るんだ」

クチバシの先で引っかけ、フクロウが翼の下からさっと取り出したのは、以前も見たことのある銀ギツネの毛皮でした。

「あつそれ…」

「前にも一度着たことがあるだろう？　まず忘れずにこの指輪をはめるんだ。そうしないと取り付かれて、おまえ自身が妖怪ギツネになってしまうからな。よし、それでいい」

毛皮の中へ体をもぐりこませると、とたんにおなかのボタンがパチンパチンとまってゆくを感じながら、ススムは言いました。

「僕はどこを探せばいいの？」

「どこでもいいさ。妖怪ギツネの毛皮には、仲間を呼び寄せる力がある。それが勝手に働くから、適当に歩いているだけで、しだいしだいに目標へと近づいてゆくのだ」

「お母さんの家来たちも、みんなこの毛皮を着て、町の中を歩き回る予定なの？」

「だから今夜は、猫坂の町には妖怪ギツネがわんさか集まることになる。見かけたら、あいさつぐらいしろよ」

「うん、わかった」

こうしてススムの冒険が始まったのです。

体中の筋肉をバネのように使い、学校の塀を軽々と乗り越え、ススムは町の中へ飛び出してゆきました。

妖怪ギツネの目を通して見る町の風景は、普段とはまったく違っていました。

妖怪ギツネの視力は、どんなに小さな物も見逃さず、耳はどれほど小さな音でも聞き逃すことはなく、鼻はありとあらゆる匂いをかぎわけける力がありました。

たとえば、通りのずっと向こうの家で調理されている料理の種類でさえ、ススムは知ることができたのです。

しかし遊んではいられません。お母さんの毛皮の行方を追わなくてはならないのです。食べ物匂いの誘惑を押しつけ、ススムは走り続けました。

といっても、道路を行ったわけではありません。お母さんがいつもやるように、ススムも電柱の頂上をジャンプして駆けていったのです。

だけど太陽が傾くころになっても、妖怪ギツネの姿どころか、手がかりさえつかむことはできませんでした。

体は疲れていましたが、ススムはそれ以上にあせりを感じ始めていました。もしもあの2冊を取り戻すことができれば、お母さんはどれほどがっかりすることでしょう。

ススムの目があるものを見つけたのは、太陽がすっかり沈み、あたりが暗くなるころのことでした。何百メートルも遠くですが、ススムと同じように、電柱の上を走っている者がいることに気がついたのです。

足に力を込め、ススムはスピードを上げました。相手はあまり速くはなく、だんだんと近づいてゆくことができました。

あちらも妖怪ギツネの姿をしています。

しかも大きさといい、毛の色や模様といい、お母さんのあの毛皮であることは明らかでした。いつも目にしているススムが見間違えるはずはありません。

足をゆるめ、少し距離をとって、ススムはあとをついてゆくことにしたのです。

あの毛皮の足取りや走り方が、どうも奇妙に思えたからです。きちんとしているとは、とても言えず、まるで酔っ払っているかのような走り方ではありませんか。

遠くから魔力であやつられている毛皮とは、ああいう走り方をするものかもしれません。

何分かの間、ススムは駆けつづけたのですが、やがてもう一つお

かしなことに気がつきました。あの毛皮を追跡しているのは彼一人ではなかったのです。

もう一人の追跡者も、同じように妖怪ギツネの姿をしていました。

ススムがいるのよりも一本西の道路ですが、やはり電柱の上を走っているではありませんか。その視線は、ススムと同じように、あの毛皮を見すえているのです。

相手も同時にススムの存在に気がついたようでした。今度はチラチラとこちらに視線を向け始めたのです。

「あれはお母さんの家来の一人なんだろうか」とススムは思いました。

でも油断はできません。とにかく今は、まず毛皮の行き先を突き止めるべきでしょう。

もう一人の追跡者が突然進路を変え、こちらへ近づいてくる気配を見せたとき、ススムは少し驚きました。あつという間にこちらの道路へやってきて、ススムの隣に並んだではありませんか。

そしてススムに話しかけてきたのです。

「やあ、君はとても上等な毛皮を着ているじゃないか」

ススムにはよく意味がわかりませんでした。

「そうなの？ でもあんたの毛皮だって、僕と同じ銀色の毛だよ」

「もちろんさ。妖怪王国では、銀ギツネの毛皮は王子しか身につけることが許されていないからね」

「王子って？」

「王子といえば王子さ。僕は妖怪王国の王子ナユタだ。ラセツの息子さ。君は…、ススムだね」

驚いてススムは電柱の上から落ちてしまいそうになりましたが、なんとかバランスを取り戻すことができました。

「僕がススムだと、どうしてわかったの？」

「それぐらい簡単さ。その毛皮はヤマメから貸してもらったのかい？」

「ヤマメってだれ？」

「あれ知らなかったのかい？ 妖怪ギツネの毛皮を着て、君の家の柱の中に住んでいる女妖怪のことさ」

「ああ、お母さんのこと？ お母さんの名前って、ヤマメというのか」

「魔力を使っ、て、ヤマメは君の母親の姿に化けているんだっ、たね」

「うん、ちよつと事情があるんだ…」

「そうかい？ とにかくススム、君がいま着ている毛皮は、本当はヤマメの息子の所有物なんだよ。それを貸してもらえるなんて、君

はヤマメから相当気に入られているらしいね」

「へえ、そうなの」

「それはそうとススム、実は君に少し相談したいことがあるんだ」

「何さ？」

「もちろん例の本のことだ。あの3冊目だよ。あの本をめぐって、僕とヤマメは激しく争っているわけだ」

「うん」

「でもその争いを少しの間、休戦したいんだよ。足の引つ張り合いはやめて、本を手に入れることに専念したいんだ」

「どうして？」

「噂で聞いたのだが、3冊目の本を、妖怪王はとんでもなく困難な場所に隠したのだそうだ。一筋縄どころか、持てる魔力をすべてそいでも、おいそれとは近づけない所らしい」

「へえ」

「しかも本は、非常に強力な護衛によって守られてもいるらしい」

「護衛ってなんだろうね。呪文？ それとも怪物かなあ」

「それはわからない。その両方かもしれない。だからススム、本を手に入れるまでは、君と僕の二人で協力しないか？ 二人で力をあ

わせて、本を手に入れるんだ」

「そのあとはどうするの？ 君かヤマメの息子か、どちらが次の王になるのさ？」

「それはまたそのときに考えればいいじゃないか。本が手に入ったあとで、ジャンケンをして決めたっていい」

「そんなことでいいの？」

「ははは、かまやしないさ。母と違って、僕はあまり王位にこだわりはないんだよ。たとえ王になれなくたって、王の弟というだけで十分幸せな人生を送ることができるじゃないか。そうは思わないかい？」

「うーん、僕にはよくわからないや。僕は妖怪じゃないもん」

「そうだったね。それでススム、休戦の申し入れを受け入れてくれるかい？」

「だけとお母さんがどう言うかなあ」

額にしわを寄せてススムは考え始めたのですが、次の出来事が起こったのは、その瞬間のことでした。ナユタが声を上げたのです。

「おやススム、見てごらんよ。毛皮の動きが変わったぞ。それにほら、あれは一体なんだ？」

視線を向けて、ススムも目を丸くすることになりました。

あたりはすっかり暗くなっていました。空はまだ明るく光っています。

その光を受けて姿を現し、ある物が輝き始めていたのです。毛皮は、それに向かって一直線に進んでいるのです。

それは巨大な城だったのですが、それまで何もなかったところに突然現れたばかりでなく、そのあまりの光景に、ススムもナユタも思わず立ち止まってしまったのです。

この城はまるで幻のように高い空に浮かんでいたのですが、それが普通の向きではないのです。鏡に映った像のように上下逆になり、屋根を下へ向けて逆立ちをしているのでした。

あれではまるで、空に貼り付けられているかのような眺めではありませんか。そういう上下逆さまの奇妙な城が、二人の前に不意に姿を現したのです。

ふだんは魔力で姿を隠している城が、あの2冊を受け入れるために門を開いたのでしょうか。

城の姿を目撃して、ススムの声は少し震えていたかもしれません。

「ナユタ、あれは何なの？」

「なんと、真の猫坂城とはあれのことだったか」

「猫坂城って？」

「3冊目の本は猫坂城に隠されている。それは僕も知っていた。だ

から先日、僕は猫坂城へ行き、カワラを一枚一枚はがして探したのさ。そこへ君とヤマメがやってきて、最後は妖怪王まで姿を現す大騒ぎになってしまったじゃないか」

「うん」

「だが僕は間違っていたようだ。いま気がついたよ。3冊目の本が隠されているのは、地上にある猫坂城ではなく、空から逆さまに生えているあの城のことだったんだ」

「あつ、あの毛皮がジャンプしたよ。あの城の中へ入ってゆくみたいだ」

「あの毛皮に呪文をかけたのは僕さ。今朝、ヤマメがほんの少し目を離れたすきに、仮の魂を与えてやった。内部に隠されている2冊が毛皮をあやつって、3冊目が隠されている場所へ案内してくれることを期待してね」

「そうだったのか」

「それが図にあたったわけだ。僕はただ、毛皮のあとをついていけばいいと思っていた。しかし毛皮が、あの城の中へ入っていきこうとするとほね」

「あつ、毛皮がジャンプしたら、空中城の門が開いたよ」

「城は2冊を受け入れるつもりだな。しかしススム、急がないとあの門はすぐに閉まってしまうぞ。城内へ入るのなら今しかない。いいか？ 全力でジャンプするんだ」

ススムには考えている余裕などありませんでした。気がついたときには全身の筋肉をいっぱいに使い、ナユタのあとをついて、空中へ身をおどらせていたのです。

驚いたのは、空中城の内部には人っ子ひとりおらず、シーンと静まり返っていたことでした。

ススムはおそろおそろ口を開きましたが、声はまわりの壁に吸い込まれるばかりだったのです。

「ねえナユタ、ここには誰もいないのかな」

「そうらしいね。それよりもおもしろいことがある。ススム、上を見てごらん」

言われたとおりにして、ススムは小さく悲鳴を上げてしまいました。

ここは、空の上に逆さまに浮かんだ城の庭なのです。見上げたススムの頭上に猫坂の町の風景がそっくりそのまま広がっていたのは、言ってみれば当たり前かもしれません。

町の様子はいつもと変わらず、道に行く人々や自動車、走る電車の姿だっで見ることができました。

ススムは言いました。

「上下逆さまに見上げる町の風景って、奇妙なものだねえ」

「さあススム、早くあの毛皮を探そう。広い城だから、二人で手分

けをしたほうがいいな」

それはススムにはあまり気の進まないことでした。勢いでここまで来てしまったけれど、本当は薄気味悪く感じて仕方がなかったのです。

「だけど……」とススムは言いかけたのですが、なんということでしょう。気がつくとなユタはもう駆け出し、曲がり角を通過してサッと姿を消すところだったではありませんか。

あわてて追いかけてましたが、ススムはうまく追いつくことができず、姿を見失ってしまいました。

立ち止まり、ススムは途方にくれました。どんな敵がいるかも、何が隠れているかもわからない城に独りぼっちになってしまったのです。

ただどじつとしていても、どうにもなりません。ゆっくりと慎重にですが、とにかく歩き始めることにしたのです。

城の内部にはいろいろな部屋がありました。広い部屋、狭い部屋、今は何もなく空っぽだけれど、倉庫と思われるところ。

台所や食堂だって見つけることができました。でもやはり人っ子ひとりいないのです。

だけどそれも、いつまでも続くわけではありませんでした。

ある広間を通り抜けようとしたときでしたが、「しいっ」という声と共に突然しっぽを引っ張られ、ススムは驚いて振り返ることに

なりました。

誰かの手がススムのしっぽをつかんでいるのです。ススムは、太い柱の影へとそのまま引き入れられることになりました。

そこにいたのは、ナユタだったではありませんか。いつの間にか毛皮を脱ぎ、少年の姿に戻っていますが、その手がススムのしっぽをつかんでいたのです。

ナユタが言いました。

「ススム、これ以上は先へ行くんじゃない」

「どうしてさ？」

「あれをくらんよ」

柱の影から首を伸ばして、ススムはおそろおそろのぞき込むことになりました。

そしてなんと、まず目に入ったのが1冊の本だったのです。

お母さんが持っている2冊とよく似た形をしています。表紙の色はわずかに違うようです。3冊目であるのは間違いありません。

だけどそれが、すぐに手の届く場所にあるわけではないのです。

さっきのあの毛皮がそこにいるのですが、なんと本は、その口の中にしっかりとくわえられているではありませんか。巨大な妖怪ギツネの口の中というわけです。

妖怪ギツネは腹ばいになり、油断なくまわりを見回しています。

ススムはささやきました。

「ねえナユタ、あの毛皮はさつきよりも一回り大きくなったような気がしない？」

「君も気がついたかい？ 3冊の本が一ヶ所に集まったことで発生した魔力を吸いこみ、やつはより強い妖怪へと変化をとげてしまったようだ。普通の妖怪ギツネを相手にするようには、もはやいかないぞ」

「じゃあどうするの？」

「それは僕たち二人で考えるしかないのさ。助けてくれる人はどこにもいない」

柱の影に隠れたまま二人は悩みましたが、いい知恵はなかなか浮かびませんでした。面倒くさくなって、ススムはとうとう自分の毛皮を脱いでしまいました。

そのとき、ススムのポケットに入っていたある物がナユタの目にとまったのです。

「そうかススム、君も魔力の杖を持っているのだったね」

「お母さんが貸してくれたんだよ。近ごろは妖怪が多くて物騒だからって」

すぐにナユタも自分の杖を取り出しました。

「ススム、この2本の杖を用いれば、あの本を手に入れることができるかもしれないぞ」

「どうやって?」

「それがわからないから、杖に相談しようというのさ。君の杖を貸してくれるかい? ほら、こうやって2本を並べて床に置いてみよう」

「そうしたらどうなるの?」

「まあ見ていてごらん。ほら、2本の杖が話し合いを始めた。本当に会話しているかのように、2本が交互にプルプル小さく震えているじゃないか」

本当にナユタの言うとおりだったのです。2本の杖はしばらくの間ふるえ、話し合いを続けました。

やがて結論が出たのでしょう。ピタリと動かなくなりました。

ススムが言いました。

「話し合いはすんだらしいね」

「どういつ結論が出たのやら。さあススム、自分の杖を手取るんだ。ここからは杖の言う通りに行動することになる。何が起ころう、あわてるのではないよ」

「うん」とススムはうなずいたのですが、本当は胸がドキドキし始めていました。

魔力の杖が2本とも、ぼんやりと輝き始めたのは、そのときのことでした。

「これから何が起こるのだろう」と、ススムとナユタは息をのんで見つめたのです。

杖はどうやら、二人を何かに変身させるつもりのようにでした。光はやがて二人の体を包み始めたではありませんか。

光がついに消えたとき、目を丸くして、二人は互いの体を見つめ合うことになりました。続いて自分の姿にも気がつき、もう一度目を丸くしたのです。

なんと二人とも若い僧侶に姿を変えていたのです。どちらも頭は丸坊主で、黒い僧服を着ていました。

「ねえナユタ、この格好で何をすればいいのかな？」

「君も僕も肩からカバンをさげているね。中身を調べてみようよ。何かわかるかもしれないよ」

二人はカバンの中を調べました。そして少し相談をし、ついに立ち上がり、歩き始めたのです。

むかう先が、本をくわえている巨大な妖怪ギツネの目の前だったのは、いうまでもありません。

妖怪ギツネはすぐに二人に気がつきました。首を持ち上げてジロリと視線を走らせましたが、もちろん本は離しません。

二人は歩き続けました。妖怪ギツネまでの距離はどんどん近くなっています。

ススムは思わず冷や汗が出ましたが、体が震えるようなことはなく、恐ろしさを表情からなんとかうまく隠すことができました。

驚いたのは、ナユタがまるで、妖怪ギツネなどそこにはいないかのごとく行動することでした。ススムを連れ、相手のすぐ目の前に、当たり前のように座ったではありませんか。

向かい合って、二人はあぐらをかいたのです。最初に口を開いたのはナユタでした。

「ああススム、腹が減ったな。僕はリンゴを持ってるんだ。食うかい？」

カバンの中に手を入れ、新鮮で真っ赤なリンゴをナユタは取り出しました。

「うん」

手を伸ばし、ススムは受け取るうとしました。ところがナユタは手渡してはくれなかったのです。

「やめた。やめたよ。リンゴ丸ごと一つやるのはもったいないな。ただもらっただけじゃなくて、何かと交換してくれよ」

「交換？ 何がいいかなあ」

自分のカバンの中をのぞき込み、ススムはゴソゴソと探し始めました。そして指先でつまんで取り出したのが、なんと1匹のカエルだったのです。

「そのリンゴ、このカエルとなら交換してもいいよ」

「カエルかい？ きれいな緑色をしているな。ペットによさそうだな。けど、そんないいカエルをただでもらっては申し訳ない気もするな。僕は君にこれをやるよ」

そういつてナユタは、カバンの中から鉛筆を取り出したのです。

ススムが言いました。

「へえ、きれいな色の鉛筆だねえ。それに新品だ。とてもうれしいよ。じゃあお返しに、僕はこれをあげるよ」

その言葉と共にススムがカバンから取り出したのは、ほかほかと湯気の立つ作りたてのハンバーガーなのでした。

会話のはじめから、妖怪ギツネはじつと聞き耳を立てていました。最初はあまり興味もなかったのでしょうか。

だけどリンゴが現れ、それがカエルに変わったところで意外さに興味を引かれ、次に鉛筆が来て、最後にハンバーガーが現れたときには、見事に不意をつかれてしまったのです。

ハンバーガーのおいしそうな匂いは、妖怪ギツネの鼻を強烈に刺

激したに違いありません。もうどうにもあらがうことができず、大きく口を開け、妖怪ギツネは、ススムの手から思わず奪い取ってしまったのです。

するともちろん、本はパタンと床に落ちてしまうことになります。

この瞬間をナユタが見逃すはずはありませんでした。とつさに本をつかみ、大きな声で呪文をとねたのです。

「本よ、僕とススムを安全な場所へ今すぐ連れていってくれ」

意味に気がつき、妖怪ギツネは目をむきましたが、もう遅かったのです。

ナユタが呪文をとねえ終わったかと思うと、空中城の風景も妖怪ギツネの姿も一瞬で消え、思いがけないまったく別の場所に自分がいることにススムは気がつきました。

この場所に見覚えがないのか、ナユタはキョロキョロしています。が、ススムは違いました。おなじみの場所だったのです。

ゼロ禅師の声が突然聞こえました。

「ススム君、これはこれは、いつの間にやってきたのだい？」

ススムは振り返りました。ここはゼロ禅師の寺の中だったのです。

「ああ禅師」

「いつの間にやってきたのか、わしはまったく気がつきなかったよ。」

「おや、隣にいるのはナユタ君かな？」

ナユタはにつこりと笑いました。

「やあぜ口禅師、今夜はネコマタもガゴジも一緒ではないから、気にすることはないよ」

「ああ、ガゴジとは、君の呪文の先生のことだったね。しかし君たち二人は、こんな時間にここで何をしているのかな？」

説明しようと唇を開きかけたのですが、言葉がススムの口から出ることはありませんでした。空中城から追ってきたに違いありません。窓を突き破り、あの妖怪ギツネが突然部屋の中におどりこんできたのです。

大きな音と共に窓ガラスが飛び散りましたが、すぐに立ち止まり、妖怪ギツネはススムたちをにらみつけることになりました。怒りと憎しみで、その目は蛍光灯のように輝いているではありませんか。

さすがのぜ口禅師も驚きを隠せない様子です。

「ススム君、これは君の家に住んでいる妖怪ギツネではないのかな？」

「それがちょっと事情があつて、今は別の妖怪に変化しちゃってるんだよ」

「そうか。その妖怪がその本を追ってここへ来たわけだね」

ナユタが言いました。

「禪師、気をつけたほうがいい。こいつは並みの妖怪ギツネとは魔力の強さが違う」

「それはわしも感じていたよ。そばにいただけで、まるで静電気でも受けているかのように肌がチリチリする。ススム君、君は魔よけの指輪をしているのが見えるが、あの銀ギツネの毛皮はどこにあるのだい？」

「えっ？　しまった。空中城に忘れてきた」

ナユタが口を開きました。

「心配することはないさ、ススム。僕がすぐに呼び戻してやるよ」

そついい終わると同時に、ナユタは呪文をとなえたに違いありません。何秒も立たないうちに、まるで空飛ぶジウタンのようにフワリと飛んで、銀ギツネの毛皮が窓から飛び込んできたではありませんか。

大急ぎでススムがそれを身につけたのは、いうまでもありません。

妖怪ギツネはキバを見せてうなっていますが、今はゼロ禪師とにらみ合っているだけです。ゼロ禪師の呪文の力に警戒しているのかもしれません。

そのすきに、ススムとナユタは大急ぎで言葉をかわしたのです。

「ススム、この本を持って、君はすぐにヤマメのところへ行くんだ。そうすればヤマメの息子が王になることができる」

「でもそんなことをして、君はどうなるのさ？」

ナユタはゆつくりと首を横に振りました。

「ヤマメの息子が僕のどちらが王になるとか、そんなことを言っている余裕はもうないんだよ。見てごらん。本の魔力を受けて、あいつはこんなに強力な妖怪に成長してしまった。

僕とゼロ禅師が力をあわせても、もはや退治できるかどうかかわからない」

「そんなにすごい妖怪なの？」

「だがその本を無駄にすることはできない。ヤマメのところへ持っていく、息子を王位につけてやってくれ」

「でも…」

「行くんだススム。ヤマメなら、本を安全に隠すことができる場所を知っているだろう。そのあと気が向いたら、僕とゼロ禅師の手伝いに来るよう頼んでみてくれ」

何か答えようと思ったのですが、もうススムはどんな言葉も思いつくことができませんでした。黙ってうなずき、本を口にくわえ、駆け出すほかなかったのです。

裏口から飛び出し、ススムはいつものように電柱の上へと駆け上がりました。足に力を込めてスピードを上げると、ゼロ禅師の寺はあっという間に小さく遠くなってしまいました。

ススムはもちろん全速力を出しました。ゼロ禅師の寺から家まで、
そう遠い距離ではありません。

ただどなんということでしょう。ちょうど電線の工事が行われて
いて、ススムは何百メートルか遠回りをしなくてはならなかったの
です。

一度ススムは、チラリと寺のあたりを振り返りました。ゼロ禅師
とナユタがどんな戦いをしているか気になったからです。

でもススムの期待は、大きく裏切られることになりました。妖怪
ギツネは、なんと彼のすぐ背後にいたではありませんか。

ススムには、口をポカンと開ける暇さえありませんでした。気が
つかなかっただけで、寺からずっとあとをつけられていたに違いあ
りません。

妖怪ギツネは、さつきよりもさらにひとまわり巨大化したように
見えます。牙をむき、ものすごい顔で追いかけてくるではありません
か。もう妖怪ギツネというよりも、怪物ギツネと呼ぶほうがふさ
わしいかもしれません。

それだけではありません。次の瞬間、ついにススムに攻撃を仕か
けてきたのです。

ススムの体に引っかけ、ケガをさせようというのでしょうか。怪物
ギツネは、ツメの生えた長い前足を伸ばしてきます。

全力で走りながら、ススムは必死でよけるしかありませんでした。

それでも怪物ギツネは攻撃をくりかえします。ススムはなんとか攻撃をかわし続け、自分の家の屋根がやっと視界に入ってきました。

このころには、ススムの毛皮はもうかなりボロボロにされています。長いツメでいくつも傷をつけられ、引き裂かれていたのです。

それでも、かろうじてまだ走り続けることができました。ただ、次の瞬間、ススムは最後の致命的な攻撃を受けることになったのです。

ススムの毛皮は、とうとう完全に引き裂かれてしまいました。体が空中へポンと放り出され、それでもなんとか転落はまぬがれて、ススムはギリギリで電線からぶら下がることができました。

いまや、細い電線だけがススムの体を支えているのです。ぶら下がることで両手はふさがり、魔力の杖はポケットの中にあり、本はズボンのベルトに押し込んであるのです。

これでは反撃も何もできたものではありません。

怪物ギツネはいったんススムの頭の上を通り過ぎましたが、すぐにまた戻ってきました。あの大きな体なのに、電柱の頂上に器用に立ち止まり、うれしそうにニヤリと笑って見下ろすのでした。

もうこれまでかと、ススムも覚悟を決めるしかありませんでした。でもそこに味方が現れたのです。

その味方も妖怪ギツネの姿をしていました。ススムの家のある方向から地面の上を全速力で駆けてきましたが、前足を伸ばして本を

はたき落とそうとする憎い敵の鼻先をかすめて、ススムをサツと連れ去ったではありませんか。

気がついたときには、ススムはその妖怪ギツネの背中の上にいました。聞き覚えのある声が、すぐにススムの耳に届くことになりました。

「ススム、私の背中におつかまり。落ちないように、しっかりとつかまるのだよ」

お母さんの声だったのです。

「お母さんなの？ あれ？ この毛皮はどうしたの？」

「フクロウに命じて、新品を一つ取り寄せたのさ。それがようやく間に合ったというわけだ」

「怪物ギツネが追いかけてくるよ」

「あれが元は私の毛皮だったのかい？ よくも巨大化したものだな」

「本の魔力を吸い込んだからだよ。ほら、3冊目がここにあるよ」

電柱の上を駆けながらチラリと目を上げ、お母さんは満足そうに微笑みました。

「これで私の息子が王になったも同然というわけか。もつとも、その前にあの怪物ギツネをなんとか退治しなくてはならんが」

「退治するのはとても難しいとナユタが言ってたよ。魔力を吸い込

んで、まったく新しい妖怪に生まれ変わっているからだって」

「ああ、私の目にもそう見えるよ。とにかくまず、その本を父のところへ届けよう」

「お父さんって、妖怪王のこと？」

「もちろんさ。父の目の前にこの本を見せ、私の息子の即位を認めさせてやる。怪物ギツネ退治は、そのあとで考えよう」

「でもお母さん、この本は僕とナユタが協力して手に入れたんだよ。お母さんの息子とナユタのどちらが王になるかは、手に入れたあとで決めることにしていたんだ」

「それは私の知ったことではないね。いま私はその本を手に入れたのだ。おまえがなんと言おうと、私は父のところへ持っていく。邪魔するのならおまえでも容赦せぬし、もしもナユタが異議をとなえたら、頭からバリバリ食い殺してやるまでのこと」

「お母さん……」

「ススム、息子のこととなれば、母親とはこれほど必死で、おろかで恐ろしいものなのだよ。おまえも覚えておくがいい」

「僕の本当のお母さんはもう死んじゃったよ」

「ふん、そう思っているがいいさ。ところでススム、怪物ギツネはまだ追いかけてきているのだな？」

「もちろんそうだよ。お母さんに出し抜かれて、頭から湯気を出し

てる」

「いいぞいいぞ。もつと怒ればいい。怒れば怒るほど冷静さを失うのだから」

「これからどうするの?」

「今も言っただろう? 私たちは妖怪王国へ向かうのだよ」

ところがお母さんのもくろみ通りにはいかなかったのです。恐れをなして王国の門番は、ススムたちの鼻先で入口を固く閉ざしてしまったのです。

怒り狂った怪物ギツネがススムたちのあとを追っているという知らせは、すでにここまで届いていたでしょう。門番は言いました。

「いくらヤマメ様であっても、今はお通しするわけにはいきません。あの怪物ギツネを王国へ一歩たりとも入れるわけにはいかないのです」

「私が妖怪王の娘であってもか?」

「ヤマメ様を入れるなどは、その妖怪王様の命令なのです。こうしている間にも、いつ怪物ギツネが姿を見せるかもしれません。その本を持って早くお逃げにならないと、つかまってしまいますぞ」

こうまで言われてしまうと、さすがのお母さんも返す言葉がありませんでした。身をひるがえし、猫坂へと続く道を取って返すほかなかったのです。

お母さんはとても機嫌を悪くしていました。

「なんということだススム、私たちは妖怪王国への立ち入りを拒否されたのだぞ」

「あの怪物ギツネが入ってきたら困るからでしょう？ 仕方がないよ」

「仕方がないですむものか。私はおまえのように物分りよくはなれぬ」

「これからどうするの？」

「まず第一に、怪物ギツネに追いつかれる前に猫坂へ戻ることだ」

「だけとお母さん、この道を走っていて怪物ギツネに出会うことはないの？ やつは僕たちを追いかけてくるんじゃない？」

「妖怪王国と猫坂の間には、2本の街道がある。私たちは行きは東街道を通り、今は西街道を走っているところさ。だからやつと鉢合わせする心配はない」

「でも、いずれ追いついてくるよ」

「だからその前に、退治する方法を考え出さなくてはならないのさ」

「どつやって？」

「まあ見ておいで。私にアイディアがある」

ところがお母さんのアイデアもうまくいきませんでした。

ススムを背中に乗せて走り続け、猫坂製鉄という会社の溶鉱炉の入口へ怪物ギツネをおびき寄せたまではよかったのです。

溶鉱炉というのは、高い温度でドロドロに溶けた鉄の入っている巨大な容器ですが、怪物ギツネをそこに突き落としてしまおうという作戦でした。

しかし怪物ギツネは予想以上に頭がよく、お母さんの期待通りに足を滑らせてはくれなかったのです。

結局、煙を吸い込んだススムがゲホゲホとせきをしただけに終わってしまい、二人はまったく成果なく製鉄所を離れるしかありませんでした。

ススムが言いました。

「お母さん、このあとどうするの？ 怪物ギツネはまだ追いかけてくるよ。僕はもう煙を吸い込むのはいやだからね」

「文句を言うのはおやめ。私も精一杯やっているのだよ」

「あつ、足の先に引っ掛けて、怪物ギツネがビルを一つぶっ壊したよ。うわあ、今度は街路樹を根こそぎにした」

「いちいち実況中継しなくてもよろしい。打っ手がなく、私はイライラしているのだ」

「本当にどうするの、お母さん」

「ええい仕方がない。こうなったら最後の手を使うことにする」

突然カーブして進む方向を変え、お母さんが違う進路を取り始めたのは、このときのことでした。

ススムは黙って目をこらしましたが、自分たちがゼロ禅師の寺へと向かっていることに気づくのに、時間はかかりませんでした。

数分後には、寺の屋根が視界に入ってきたのです。

それまでにススムは、お母さんとの間で相談を終えていました。怪物ギツネを迎え撃つためにこれから何をするか、作戦を教えられたのです。

そのとっぴな内容に、ススムは思わず目を丸くすることになりました。

「お母さん、本当にその作戦でいいの？ そんなことをしたら本が……」

「せっかく手に入れたのが無駄になってしまうと言いたいのだろうか？ だが仕方がないではないか。怪物ギツネを退治しない限り、私たちは平穩に暮らせないし、妖怪王国へ帰ることもできないのだよ」

「でもお母さんの息子は？」

「あの子はわかってくれるだろう。なあに、これであの子の即位がなくなるわけではない。ナユタとまた対等の立場に戻ってしまうというだけさ。」

よいなススム？ 作戦は頭に入れたな？」

「うんわかった。じゃあ僕を寺の庭に降ろしてよ」

それは本当にギリギリで、一瞬の余裕しかありませんでした。本を手にしたススムを庭に降ろし、お母さんは再び怪物ギツネの鼻先に戻って走り続けたのです。

うまくやったので、お母さんがもはや本を持っていないことに怪物ギツネは気づかず、そのままあとを追いつけました。

その間に、ススムは寺の建物の中へ飛び込んでいったのです。

「禅師いる？ 大変なんだ。大急ぎで必要な道具があるんだよ」

ススムの口から話を聞いて、ゼロ禅師はひどく驚いた顔をしました。

「何だつてススム君？ そんなものをどうするのだい？」

「もちろん使うんだよ。この本の中に隠して、怪物ギツネの腹の中へ押し込んでやるんだ」

「ヤマメがそれを承知したのかい？ 彼女の息子の即位はどうなるのだい？」

「怪物ギツネを退治するためには仕方ないとヤマメも言ってるよ。退治しないと、猫坂の町が壊されちゃうもん」

「それは確かにそうだね」

二人は耳をすませました。またどこかで建物の破壊される音が聞こえてきたのです。時間をかせぐために、ヤマメは必死になって町中を逃げ回っているに違いありません。

さすがのヤマメも、無限に体力が続くわけではありません。今に疲れ切ってしまうでしょう。ススムとゼロ禅師は準備を急がなくてはなりませんでした。

「さあススム君、ついておいで。君が求めている物はこの寺の物置にあるに違いないが、探すのに時間がかかりそうだ。手伝ってくれるかい？」

懐中電灯を手に、二人は地下へ続く階段を降りてゆきました。

物置は広く、ドアを開けてのぞき込んで、ススムは目を丸くしたのです。

「禅師、これは何なの？ 物がいっぱいあるね」

「代々の住職たちが何百年も用いてきたガラクタさ。さあ探し物を始めよう。手や体がホコリだらけになるが、我慢するほかないね」

そうやって二人は体を動かし始めたのですが、思いがけない声に背後から突然話しかけられ、驚いて振り返ることになるには、1分もかかりませんでした。

声はこういったのです。

「おい、そこのおまえたち二人」

相手の姿を見て、ススムは思わずゼロ禅師と顔を見合わせました。ゼロ禅師も同じように目を丸くしているではありませんか。

「これはこれは小鬼さんじゃないか」

ゼロ禅師のあいさつに、小鬼は不満そうに鼻を鳴らしました。

「ふん」

ススムには始めて目にするものでしたが、小鬼は身長40センチもない姿をしています。体が小さいだけで、頭に生えたツノや牛に似た顔、手足の長いツメは大きな鬼たちと変わりません。

だけどそこに、ずるそうな表情が加わっているぶん、一筋縄ではいかない相手かもしれません。

ゼロ禅師が意味ありげに目くばせをするので、ススムはしばらく口を閉じていることにしました。

ゼロ禅師は言葉を続けました。

「ところで小鬼さん、体は小さくとも、あんたはさぞかし名のある妖怪のようにお見受けするが」

もちろん小鬼は胸を張りました。

「おまえはなかなか目が高いじゃないか。オレの名はツヅラといって、鬼の世界じゃあちよつとした大物なんだぜ。そのツヅラ様がこ

の物置をすまいにしてるんだ。さっさと出てゆくか、探し物をしたきゃあ、うまい食い物でもよこしな」

「食い物だって？　どんなものが欲しいのかな」

「そうさなあ。新鮮なニワトリ2羽で手を打とうじゃないか」

「ニワトリだって？　こんな貧乏寺にはインスタントラーメンしかないよ」

「それでは話にならねえ。探し物をするのはあきらめな。オレは一寝入りしたいんだ。さっさと出てけ」

ゼロ禅師とススムはあきれた表情で、もう一度顔を見合わせることにになりました。

とうとうススムが口を開きました。

「ねえツヅラ、僕の友達にナユタというのがいてね。このナユタが……」

ところがツヅラは、突然鼻でせせら笑ったのです。

「そんな名前を出したって、怖くなんかないぜ。ナユタの後ろ盾だったラセツはもう死んだじゃないか。ラセツのいないナユタなんてただのガキに過ぎないね」

「じゃああんたは、怖い物なんてないの？」

「ナユタじゃなくて、ヤマメの息子と知り合いなのだとおまえが言

えば、オレも少しは怖がるかもな」

「どうして？」

「ヤマメつていやあ、恐ろしく腕のいい魔力使いとして有名じゃねえか。あのラセツを倒した女でもあるしな」

「あんたはヤマメに会ったことがあるの？」

「あるわけねえよ。いつも隠しているから、ヤマメの顔を見たことのあるやつは一人もない。妖怪王でさえ、自分の娘の素顔を見たことがないんじゃないかという噂だぜ」

「へえ」

「それだけじゃねえぞ。ヤマメの息子つてのが、これまた薄気味悪いときたもんだ」

「息子の顔も、誰も見たことがないの？」

「誰も知らないのは顔だけじゃないさ。ヤマメの息子については、どこに住んでいるのかも、それどころか名前だって不明なんだぜ」

「なぜ？」

「そもそもは王位争いで、ラセツに見つかって暗殺されないようにするためだったらしい。だから顔も名前も、居場所も内緒にしてあったんだな。それが噂に噂を呼んで、今では妖怪王国全体が疑心暗鬼になってる」

「疑心暗鬼って？」

「ヤマメの息子の正体がわからなくて、みんな不安でたまらなくなっている、ということさ。ナユタが次の王になればいいが、もしナユタが負けたら、どこのどんな怪物が王になるかもわからないわけだからな」

「へえ」

ここで思いがけず、ゼロ禅師が口をはさんだのです。

「ススム君、その小鬼に、君の魔力の杖を見せてやったらどうかな？」

よく意味はわかりませんでした。が、ポケットから取り出し、ススムはゼロ禅師の言う通りにしたのです。

小鬼の反応は、びっくりするようなものでした。

カメレオンのように両目を飛び出させ、ススムの杖に見入ったのです。特に注目したのが杖の根元にある王の紋章だったのは、いうまでもありません。

「げげっ、それはヤマメの杖じゃないか」

「うん、ヤマメが僕に貸してくれたんだよ」

「なんでおまえに……。そうか、おまえとヤマメの間には何かかわりがあるんだな」

「ねえ小鬼さん、お願いだから僕と禅師の探し物を邪魔しないでね」

「邪魔だと？ とんでもない。あとでヤマメにはよろしく言っといてくれ。オレが邪魔をしただなんて、冗談でも言っくんじゃねえぜ」

「うふふ、わかったよ。それで探し物なんだけど…」

「ああ何でも言ってくれ。オレも手伝うよ。この物置に1000年住んでるんだ。どこに何が置いてあるか、すみずみまで知っているよ」

「こっやって、ススムとゼロ禅師は目的の物を手に入れることができました。」

「あまり大きな道具ではありません。手のひらに乗るほどのガラスびんだったのです。」

「ビンの口はかたく閉じられ、封がされています。中身は黒い粉がぎっしりと詰まっていますが、正体はわかりません。」

「禅師、この黒い粉は一体なんなの？」

「うんススム君、それはね…」

「お母さんが寺に姿を現したのは、ちょうどこのときのことでした。ものすごい勢いで窓から飛び込んできたのです。」

「ススムは目を丸くして迎えました。」

「ヤマメさん、怪物ギツネはどうなったの？」

「ときどき足先で引っ掛けて建物を壊しながら、今も町の中を走り続けているよ。ついさっきナユタがやってきて、追われる役を私と代わってくれた。ナユタに本を渡すふりをしたら、怪物ギツネはすぐに信じてだまされてくれた」

「それはいいけど、これはどう使うの？ 目当ての道具は見つけたよ。ほら」

「おお、あったのか。ではススム、私の背にお乗り。ポケットにそっと入れ、そのビンは壊さないように気をつけるのだよ。中身は大変に危険なものだからね」

「うん、わかった」

ゼロ禅師に見送られ、ススムとお母さんは寺を離れたのでした。

お母さんの背中の上で、ススムが声を上げました。

「うわあ、怪物ギツネが電車をひっくり返したよ」

「どこだススム？」

「あそこの駅のところ。今ナユタは線路ぞいを走っているんだね」

「あの線路はこの先、左へカーブしているのだったな。うまく近道ができそうだなぞ」

「ねえお母さん、このガラスびんの使い方を説明してよ」

「おまえのポケットの中にはヒモがあるか？」

「うんあるよ。いつも持つておくようにとお母さんが言ってるじゃないか」

「それはこういうことがあるからさ。そのヒモで、ガラスびんと本をしっかりとしばり合わせるのだよ」

「本はもったいないね」

「仕方がないさ、妖怪王国の王になろうという者が、猫坂の町を見殺しにしたなどと言われては評判が下がるからね」

「どうして？」

「妖怪王国と猫坂は、大昔から兄弟のように付き合ってきたからさ。猫坂の町に今でもたくさん妖怪が住んでいるのは、それが理由なのだよ」

「へえ」

「さあススム、用意はできたかい？　しっかりとしばって、ああそれでいい」

「この黒い粉の正体は何なの？」

「カビの胞子さ」

「胞子って？」

「カビの種のようなものだよ。そのカビは紙が大好物なんだ。特に

何百年もたって、古くて乾ききつた紙がね」

「じゃあ力ビはこの本を食べるんだね」

「その本だけじゃないさ。怪物ギツネの体内にあと2冊入っていることをお忘れでないよ」

「ああそうか。でも本がカビに食べられて、後はどうなるの?」

「怪物ギツネは、本の魔力のおかげで生きていることができるのだよ。それがなくなるのだから、ただではすまないさ。」

さあススム、線路に着いた。怪物ギツネがこちらへやってくるぞ。ああ、その目の前をナユタが必死で走っている姿も見える。いけないガキだが、今回だけは協力するしかないな」

「お母さんって、本当にラセツやナユタが嫌いなんだね。実の妹や『おい』なのに」

「それは余計なお世話さ、ススム。さあ私におつかまり。ついに怪物ギツネと一騎打ちだ」

武者ぶるいどころか、ススムは怖くて怖くて仕方ありませんでした。でもお母さんと一緒だから、なんとかやることができたのかもしれません。

物影から突然現れたススムたちの姿に怪物ギツネは驚いたようでしたが、すぐに表情を変え、進路を変えて迫ってきたのです。ススムの手の中に本を見ることができたからでしょう。

目を緑色に輝かせ、怪物ギツネは足に力を込めたのです。お母さんの声がススムの耳に届きました。

「ススム、油断をするのではないよ。あと数秒で私たちはやつとすれ違う。私たちはやつの体の下をくぐり抜けるから、うまくタイミングを計って、おまえはその本をやつの鼻先にポンと放り投げるんだ」

「それで大丈夫なの？」

「やつの目には本しか見えていないさ。あのでかい口でパクンとのみこむことだろう」

「そのあとはどうするの？」

「ふふふ、あとは明日のお楽しみということさ」

お母さんの言うことは正しかったようです。猛烈なスピードで迫ってくる怪物ギツネに向かって、お母さんは言葉どおりの走り方をし、ススムもうまく作戦を実行することができました。

放り投げられた本とビンを、作戦通り怪物ギツネがパクリとのみ込んでしまったときには胸がすつとしましたし、ススムはうれしさのあまり、お母さんの背中の上でこおりしたほどです。

作戦が効果を発揮するには、お母さんの言うとおり一晩かかってしまいました。

3冊の本をすべて手に入れて満足した怪物ギツネはおとなしくなり、町の一角に立ち止まったのです。

一日中走り回って、さすがに疲れていたのでしょう。腹ばいになって目を閉じ、いつの間にか眠ってしまいました。

しかしそのまま、怪物ギツネは二度と目を覚ますことはなかったのです。

翌日、朝日が差し始めるころ、猫坂の人々が驚いたのは、昨夜の同じ場所に、なぜか怪物ギツネの姿がもはやないことでした。そこには怪物ではなく、岩山が一つあるだけだったではありませんか。

学校帰りにわざわざ遠回りをして、友達と一緒に岩山見物をしてから家へ帰ってきたススムは、もちろんお母さんに質問しました。

お母さんはすぐに答えてくれました。

「ああ、あれかい？ 体の内部からカビに食われて、怪物ギツネは化石になった。つまり石に変わってしまったのだよ。あの岩山は、どこかギツネに似た形をしていただろう？」

「うん、みんな不思議がってた」

「元がギツネなのだから当然のことさ」

「あの岩山の内部では何が起こっているの？」

「本を食べたカビは、猛烈な勢いで繁殖したに違いない。すぐに怪物ギツネの体全体をおおいつくしたさ」

「でも、どうしてそれが化石になったの？」

「そこが魔力というものの不思議なところさ。理由は誰も知らないが、魔力はときどきああいう化石現象を引き起こすのだよ。しかしおかげで怪物ギツネを退治できたのだから、よかったではないか。」

今朝の新聞にも出ていたが、あの岩山を開発して遊園地を作ろうという計画が、猫坂の町ではさっそく持ち上がっているそうだ。私にはカビの繁殖力よりも、人間の金銭欲や凶太さのほうがよっぽど怖いと感じられることがあるよ……」

本を見つけた（後書き）

次回の投稿は10月12日（水）を予定しています

塩塚の怪異

ある山奥に『塩塚』と呼ばれるものがありました。

何十トンもの塩がまるで山のように積み上げてあるのですが、「これには絶対に手を触れてはいけない」と昔から言い伝えられていて、近寄る者もなかったのです。

しかしそれも、この日までのことでしかありませんでした。

ある不心得者がこの塩塚に興味を持ち、なんとスコップを持ち出したではありませんか。

「この塩を売れば、金になるに違いない」

この男は、そんなことを考えたのかもしれませんが。

ガシッ、ガシッ。

スコップの先は塩塚へと食い込んでゆきました。表面は少し汚れていましたが、内側からは雪のように白い塩が顔を出したのです。

男が売り歩く塩は、かなりの評判になりました。それなりに味がよくったのです。

しかもスコップで掘り出しているのだから元手はゼロ。男はたちまち大もつけをすることができたに違いありません。

ゼロ禅師の仕事の中には、大昔から妖怪を封じ込めてある場所に

異常はないかと、見てまわることも含まれていました。

寺を離れ、年に1度、猫坂市のまわりをひとまわりするのです。

だけど今回はススムも一緒でした。ちょうど学校が休みだったので、おもしろがってついてきたのです。

塩を盗まれ、大きく穴の開いた塩塚の前で、ゼロ禅師は立ちつくしてしまいました。

「禅師どうしたの？　大きな穴だねえ」

「ススム君、誰かがこの塩を盗み、そのせいで、中に閉じ込められていた妖怪が逃げ出してしまったようじゃ。ごらん。塩の表面にスコップの跡がある」

「本当だ。でも穴の奥のほうには跡がないよ」

「あれは、塩がなくなって重しのなくなった妖怪が抜け出していった跡だからさ。大変なことになったぞ」

「どうして？　ここにはどんな妖怪が封じ込めてあったの？」

「ああススム君、それはね……」

ところが二人の会話は、激しい羽音と、けたたましい声でかき消されてしまったのです。

「おーい禅師禅師、妖怪禅師」

見上げると、空から一羽のフクロウが舞い降りてくるところでした。

ススムが声を上げました。

「あつフクロウだ。禅師、あれは僕の家に住んでいる妖怪ギツネの家来なんだよ」

木の枝にとまり、フクロウは不満そうな顔をしました。

「オレは家来じゃないぜ、ススム。弟子と言ってくれ。しかしそんなことより、猫坂の町でいま大事件が起こってるんだぞ」

ゼロ禅師は顔色を変えました。

「どんな事件なのかな？」

「市民たちが何の前触れもなく、突然ハトに変身するという異変が相次いでいるんだ」

「ハト？ ハトだって？」

「被害者はもう何十人も出てる。早くなんとかしないと、今に猫坂中の人間がハトになっちまうかもしれないぞ」

ゼロ禅師とススムが大急ぎで町へ帰ったのは、いうまでもありません。

そして町ではまさしく、フクロウの言う通りのことが起こっていたのです。

被害者の数はすでに100人を超えていました。そしてなんと、その中にはススムの姉のミチコも含まれていたのです。

ゼロ禅師は調査を始めましたが、手がかりはありません。夕方になって、疲れた表情でススムの家を訪ねたのです。

「こんばんは、ススム君はいるかな？」

「ああ禅師、お姉ちゃんやその他の人たちの行方はわかったの？」

「いや、それがまだ何もつかめないだよ。みんなあつという間にハトに変わり、パタパタと羽ばたき、どこかへ飛んでいつてしまった。行方はまったくわからない」

「ふうん」

「ミチコさんは何をしていたハトになったのか、詳しく教えてくれるかい？」

「こっちへおいでよ。お姉ちゃんの部屋で説明するよ。そのほうがわかりやすいでしょう？」

「そうだねススム君……。ああ、これがミチコさんの部屋だね」

「この机の前に座って、お姉ちゃんはマンガの本を読んでいたんだ。暑いから、この窓は開けてあった」

「ほう、ちょうど机のまん前にあるね。何の本を読んでいたのかな？」

「月刊のマンガ雑誌だよ。でも日本中で何万部も売れている本だから、手がかりにはならないと思う。ハト変身事件が起きているのは、猫坂の町だけなんだろう?」

「そのとおりだよ、ススム君。おや? 机の上に皿が置いてあるね。マンガを読みながら、ミチコさんは何か食べていたのかい?」

「たぶんホットケーキだと思う。お姉ちゃんの好物なんだ。いつも自分で作って食べてるよ」

「ホットケーキというと、ハチミツをかけて食べるあれだね」

「でもお姉ちゃんはお変わってるよ。ハチミツじゃなくて、いつも塩をかけて食べるんだ。そのほうがおいしいんだって。珍しいよね」

「塩だって? はあ、机の上のこの小ビンに入っている白い粉だね」

「うん、たぶんそうだと思う。ちょっとなめてみようか?」

「いやいやススム君、やめたほうがいい。それがミチコさんのハト化の原因かもしれないよ」

「どうして? この塩が?」

「この家の柱には妖怪ギツネが住み着いていたね。すまないが呼んでくれるかい?」

ススムが言われた通りにしたのは、いうまでもありません。スス

ムのあとをついて、妖怪ギツネは機嫌よくミチコの部屋までやってきてくれました。

「なんだ禅師、私に用とは珍しいな」

「ああギツネさん、少し手を貸してもらいたくてね」

「手だと？ 私には足が4本あるだけだぞ」

「これからわしは、この塩を少しなめてみようと思う。するとある変事が起こるだろうが、そうなったとき、ススム君と共にわしのあとをついてきてくれるかい？」

きつと翼が生えて、わしは空を飛んでゆくことだろうと思うが」

「ふうむ、なんだか知らんがおもしろそうな話だな。ちょうど退屈していたところだ。何でもやってみせるがいいさ」

そしてゼロ禅師は言葉どおりにしたのでした。

口の中に塩を入れ、ピンを机の上に戻した瞬間、ゼロ禅師の小柄な体が一面の羽毛におおわれ、両腕が翼に変化してしまったのも、驚くことではないのかもしれない。

ポップと一声鳴いたかと思うとゼロ禅師は羽ばたき、窓から飛び出していったではありませんか。

あまりのことにススムは呆然としていましたが、妖怪ギツネはぼんやりなどしてはいませんでした。

「さあススム、早く私の背中にお乗り。今からあのハトを追いかけてゆくのだから」

ススムの体重を背中に感じると妖怪ギツネは全身の力を使ってジャンプし、窓から外へ飛び出したのです。

ギツネの鋭い眼は、ハトの姿を見失うことなどありませんでした。距離をとりながらも、きちんと着いてゆくことができたのです。

ススムが口を開きました。

「ねえお母さん、ゼロ禅師はどこまで飛んでゆくのだろうね」

「それは私にもわからないよ。しかし、そこにミチコや他の人々もいるのは確かだろうね」

「お母さんの弟子のフクロウはどこへ行ったの？ 僕と禅師にこの事件のことを知らせるために、山の中まで来てくれたんだよ」

「あれは私が行かせたのさ。それにフクロウは今、ほらおまえの肩の上にいるじゃないか」

そう言われてやっと、ススムは気がついたのです。

「あれ本当だ。フクロウさん、いつの間に来たんだい？」

大きな目玉をギョロリと動かし、フクロウはススムを見つめました。

「すこし前からおまえの肩にいたさ。それはそうとお師匠様、これ

からどうなさるおつもりで？」

「それは敵の出方しだいだな。そもそも敵の正体すらまだわからぬというのに」

ススムが声を上げました。

「あつ、何か見えてきたよ。禅師はあそこへ向かっているみたいだ」

お母さんとフクロウが顔を上げると、ススムの言うとおりでした。

ここはもう猫坂をかなりはずれた場所なのですが、月の光に照らされて、見たこともない建物が目の前にそびえているではありませんか。

「ねえお母さん、あれは何なの？ おかしな形の建物だねえ」

フクロウがクチバシを開きました。

「あれはなススム、アメリカの1870年代にはやった様式をそっくりそのままマネた建物だ。時代は南北戦争の直後で……」

お母さんが口を開きました。

「黙れフクロウ。おまえの物知りぶりはもうわかった。問題はあの建物の建築様式ではなく、内部に何者がひそんでいるのかということだ」

「あつお母さん、あの建物の一番上の階は、大きな鳥小屋になっているみたいだよ。窓にはぜんぶ金網が張ってある」

フクロウがあきれた声を出しました。

「そして金網のむこうはハトがいつぱいときたもんだ。ねえお師匠様、ご存知ですか？ ハトとフクロウは大昔からたいそう仲が悪いんですぜ。オレはもうハトを見ただけで寒気がして、背中がぞくぞくしてきました」

「背中がぞくぞくするのなら、あとでカゼ薬を飲んでおけ。残念ながら、私は弟子に甘い顔をする趣味はないのでな。いやなら今すぐ妖怪王国へ帰れ。私は新しい弟子をとるさ」

「いやだなあ、お師匠様。ただの冗談ですよ」

「なら下らんことを言っていないで、あの屋敷の様子を探ってこい。呼び集められたハトは最上階に閉じ込めてあるのだろう？ 他の階を見てこい。屋敷の主人が誰なのか、それが知りたいのだ」

お母さんに命令されて、いかにも気のすすまないふうに、フクロウはパタパタと姿を消しました。

でもフクロウはなかなか帰ってこなかったのです。5分たっても10分たっても、戻ってくる様子はありませんでした。とうとうススムもお母さんも待ちくたびれてしまったのです。

「ねえお母さん、フクロウは一体何をしてるんだろうね。まさか敵に捕まったのかな」

「そこそこの呪文が使えるから、そんなことはないと思うがね。しかしそれにしても遅すぎる。私たちが見にくいしかないね」

「ねえ、禅師が敵に食べられたりしてないだろうね」

「ほうススム、なかなか楽しみなことを言ってくれてるではないか。それが事実なら、どれだけうれしいか」

「お母さん…」

「そんな非難がましい顔をするものではないよ。お忘れかい？ 私はいいつのせいで、ワサビを口いっぱい食べさせられたのだよ」

「あれはもともお母さんが悪いんじゃないか」

「ふん、そんな話は聞きたくないね。とにかく一緒においで。おまえはゼロ禅師が気になるのだろぅが、あんな頼りにならぬ弟子でも、私はフクロウの面倒を見てやらねばならん。」

「おまえも大人になったら気をおつけ。弟子を持つとは面倒なものだよ」

「そう？ 僕の目には、息子を持つことのほうがよっぽど面倒が多いように見えるけどなあ」

「子供のくせに、生意気なことを言うのはおやめ。さあ屋敷が近づいてきた。そこにドアがある。ススム、私の背中から降りて、ノックをしてごらん」

もちろんススムは、言われた通りにしたのです。

少し待つと返事があり、執事がドアを開けてくれました。

頭のはげた老人で、きちんとネクタイをして正装しています。ススムは古い映画のシーンを思い出してしまいました。

口を開こうと思ったのですが、ススムはうまいセリフを思いつくことができませんでした。助けを求めて振り返ったのですが、なんということでしょう。もうススムの背後にお母さんの姿はなかったではありませんか。

「あれれお母さ…」

ススムのポケットの中から小さな声が聞こえてきたのは、このときのことでした。

「私はここにいるよ、ススム。魔力を使って、うんと小さく変身しているのさ。私のことは気にせず行動おし。いざというときには、必ず飛び出して助けよう」

それを聞いて安心し、もう一度執事のほうを向いて、ススムは微笑むことができたのです。

「ええと、このお屋敷のご主人はいらっしゃいます？」

「はい。先ほどからあなたをお待ちしております。お話があつてみえたのでしょうか？」

屋敷の主人というのは、若い少年でした。ススムとほとんど同じ年頃だったのです。

書斎なのでしょうか。大きな机があり、壁のまわりを囲んでいる

本棚には本が何十冊も並んでいる部屋にススムを迎えてくれたのです。

部屋の中で香をたいているので、その匂いが強くただよっているのが鼻につきはしますが、それ以外におかしなところはありませんでした。

さっそくススムは口を開きました。

「君がこのお屋敷の主人なの？」

「そうさ。そして君は、あのお坊さんを追いかけてやってきたのだね」

「お坊さんって、ゼロ禅師のこと？ もう一人フクロウが来なかった？」

「いや、それは知らないな。ここには来ていないようだよ」

「本当に？ どこへ行っちゃったのかなあ」

「あのお坊さんはゼロ禅師というのかい？ 今はこの屋敷の3階に、他の人々と一緒にいるはずだよ。実はある作戦を考えて実行したんだが、うまくいかなくてね」

「作戦？」

「もちろん塩塚から塩を盗み、妖怪を野放しにしまった憎い犯人を見つげ出す作戦さ」

「ははあ。でもうまくいかなかったって、どういふことなの？」

「あの塩塚は、僕一族が代々所有してきた山の中にある。実は、先祖がカシャという妖怪をあの中に封じ込めてね」

「それはどんな妖怪なの？　あまり名前を聞いたことがないけど」

「形は僕も知らないよ。でも人の死体を盗んでゆく悪いやつだそう
だ」

「人の死体って？」

「文字通りの意味さ。盗んでどうするのかは知らないが、葬式がす
んで墓地へ運ばうとすると現れ、力ずくで奪ってゆくのだよ」

「へえ」

「それをやめさせるために、僕の先祖がなんとか捕まえ、あの塩塚
の下に封じ込めたんだ」

「それが塩泥棒のせいで外へ出てしまったんだね」

「だから協力してくれるかい？　なんとかカシャをおびき寄せて、
捕まえなくちゃならないんだ」

「もう一度塩塚に閉じ込めるんだね。でも僕のお姉さんやゼロ禅師
は、どうしてハトになっちゃったの？」

「塩を盗んだ犯人を捕まえるためだったのさ。盗んだ塩を、犯人も
自分で食べるだろうと思ったからね。塩塚の塩には、食べるとハト

に変身する呪文をあらかじめかけておいた。

でも無駄だった。ハトになり、帰巢本能でこの屋敷へやってきた人々の中に犯人はいなかったよ。

だから全員、いずれ釈放するつもりだが、とにかく今はカシヤを捕まえるのが先だ。ススム、君も手伝ってくれるだろう？」

ススムはもちろん首を縦に振りました。さっそく準備が始まったのです。

死体を盗む妖怪をおびき寄せるのだから、まず死人が必要です。その役は執事にやつてもらうことにしました。

いかにも年寄りで、写真を撮ってひつぎの上に飾るのに似つかわしかったのです。

他の召使いたちの手も借りて、屋敷のおもても葬式にふさわしく飾り付けることができました。

屋敷の中で一番広い部屋に集まり、お葬式をするマネをしました。あとはひつぎを荷車に乗せて、丘の上の墓地まで運ぶだけです。

この荷車は小型で、人の力で引くほかなかったのですが、墓地へと通じる山道はとても細く、トラックや自動車は通ることができなかったのです。

葬列が墓地に着いたのは、もう真夜中近い時間でした。

都会と違って、田舎の空は真っ暗で、一面に星が輝いています。

その中央にまん丸な月が光っているのですが、興奮しているせいか、ススムは疲れなどまったく感じませんでした。

この地方には、お葬式のとくに変わった習慣がありました。死者を墓地にほうむった後、親族の若者が翌朝まで墓地で寝ずの番をするのです。

だからススムたちが墓地にとどまっていたても、おかしい眺めではないのでした。屋敷の主人だという少年は、すでにススムに自己紹介をすませていました。

「僕の名はタマオというだよ。そう呼んでくれ」

「じゃあタマオ、カシヤはいつごろ死体を取りにやってくると思う？」

「それはわからない。だが僕は、カシヤには背後からあやつっている黒幕がいるのではないか、という気がして仕方がないんだ」

「黒幕って？」

そうやってタマオと話しながらも、実はススムは、ポケットの中から小声でささやくお母さんの指示にもちゃんと耳を傾けていたのです。

「いいかいススム、私の言うことをよくお聞き。このタマオという少年はどうも怪しい。人間をハトに変える呪文など、ただの子供に使えるはずがない……」

なかば上の空のススムの様子に、タマオが気づかないわけがあり

ません。

「どうしたんだいススム？ 急にかがんで足元の小枝を拾って、ポケットの中に入れたりして。何か理由があるのかい？」

「ううん、なんでもないんだよ。気にしないでいいよ」

「そうかい？ 今も言ったけど黒幕とはつまり…、しいつ、何か音が聞こえたぞ」

「どこから？」

「あの茂みの影さ。ついにカシャが現れたのかもしれないぞ」

タマオの言うとおりでした。茂みの枝や葉が大きく揺れ、何かが姿を見せようとしているのです。

思わず息をのんだのですが、現れた敵の姿は、ススムをひどく驚かせることになりました。

カシャとはなんと、猫と鬼の中間のような形をしていたのです。まるで巨大なトラネコを二本足で歩かせ、頭に鬼の角を乗せたような姿だったではありませんか。

これにはススムも意表を突かれてしまいました。

「タマオ、あれはなんだい？」

「あれがカシャだよ。ススム、僕たちは少し下がったほうがいいね。カシャはひつぎをねらっているよ」

ススムとタマオは、さっそく数メートル後ずさりすることになりました。ススムたちの存在など気にする様子もなく、ドスドスとやってきて、すぐにカシヤが墓をあばき始めたのは、いうまでもありません。

それは恐ろしい力だったのです。墓石はあっという間に倒され、ひつぎがあらわになってしまいました。

カシヤがそのフタを引きちぎるのを、二人は息をのんで見つめることになりました。

ひつぎには仕掛けがしてありました。

内部には死体など入っていません。その代わりに、勢いよく飛び出す火薬仕掛けの大きなアミがセットしてありました。これはワナだったのです。

突然、バンという大きな音があたりに響きました。それと同時に、目にもとまらない速さで広がったアミが、カシヤへと飛びかかっていったのです。

普通のアミではありません。特別製のとても頑丈なものです。

ところがなんということでしょう。

その強いアミも、妖怪の腕力の前にはまったく無力だったのです。あっという間に引き裂かれ、カシヤは自由の身になってしまいました。

タマオが叫び声を上げました。

「これはまずい。ススム、すぐに逃げるんだ」

もちろんススムはその言葉に従ったのですが、うまくゆきませんでした。

カシャの体は、人間よりもふたまわりは大きいのです。そのぶん速く走ることができるに違いなく、ススムとタマオはすぐに追いつかれてしまいました。

おまけに二人は、気がつくと巨大な岩壁の前にいたではありませんか。通せんぼをされてしまい、しかも岩壁は垂直で高く、手をかけて登ることができるようなデコボコはまったくありませんでした。

「タマオどうしよう」

「ポケットの中に何か持っていないかい？　小さなナイフでも何でもいいんだ。武器にできそうなものなら」

「うーん、こんなものならあるけど……」

そういつてススムが見せたのが、魔力の杖だったのです。

「なんだススム、そんなものを持っているのなら、最初からお見せよ。どれ、僕が使ってカシャを退治してやる」

気がついたときには、ススムは魔力の杖を取り上げられていました。手の中に握り、タマオはうれしそうに振り回すのです。

ススムは声を上げないではいられませんでした。

「タマオ、遊んでいる暇なんかないよ。早くカシャをやっつけないと」

「ああススム、忘れていたよ。カシャというのは、そいつのことかい？」

次に起こった出来事は、ススムを驚かせるどころか、呆然とさせるのに十分でした。

とがった牙の見える口を動かし、ゴニョゴニョと呪文をとねえたかと思うと、カシャの形は突然変化し、まったく別のものになってしまったではありませんか。

目の前に見えているものを信じることができず、ススムは口をポカンと開けるしかなかったのです。

なんとカシャは、ガゴジの姿へと変わっていたのです。

「ガゴジ？ あんたはナユタの家庭教師だね。どうして？」

それに答えたのはタマオでした。

「カシャの姿に変身するようにと、僕が命じておいたからさ」

そして呪文をとねえ、今度はタマオ自身も姿を変え、本来の姿を見せたのです。それがナユタだったのは、いうまでもありません。

もうススムは本当に何を言っているのか、見当もつきませんでした。

「ナユタ…」

「そうさススム、これで僕は、君の『魔力の杖』を手に入れたわけだ。杖のない君など、もう怖くはないね」

「杖がなくなつて、僕にはお母さんとゼロ禅師がついているよ」

「お母さん？ ヤマメのことかい？ 姿が見えないが、どこにいるのだね？ ゼロ禅師は屋敷の中に閉じ込めてあるがね。ハトの姿では、何の呪文もとなえることができまいよ」

「すべて計画してあつたことなんだね」

「その通り。塩塚から塩を盗んだのは僕さ」

「カシヤはどうなつたの？」

「閉じ込められていた年月が長すぎたのだろう。さすがの妖怪ももう死んでいたから、別の場所にほうむってやつたさ。それはそうとこの杖だ。」

「この杖はほら、こうしてやるのさ」

次にナユタは、とても信じられないような行動を取つたではありませんか。力を込めたかと思うと、手の中の杖をポキンと折つてしまったのです。

ススムには「あっ」と声を上げることしかできませんでした。

あれはお母さんから借りた大切な物です。折られると魔力が完全になくなってしまうことも、ススムは知っていました。

「あはははは」

ところがこのとき、大きな笑い声があたりに響いたのでした。

女の声でした。次の瞬間、ススムのポケットから飛び出し、お母さんが姿を現したのです。

でもナユタは、顔色ひとつ変えるわけではありませんでした。それどころか、うれしそうに笑い始めたではありませんか。

「やあ親愛なる伯母上。いずれ顔を見せると思っていたよ。だが一足遅かった。あんたの大切な杖は、このとおり真っ二つになっちゃったよ」

だけとお母さんもニヤリと笑うのです。

「ナユタ、自分の手の中にある物をよくごらん。それが私の杖だというのかい？」

今度こそナユタは顔色を変えることになりました。ヤマメの杖だと思っていたものは、なんとただの木の枝でしかなかったのです。

「くそっ、いつの間にすり替えたのだ」

「かがんで、ススムに小枝を拾わせたときさ。ススム、ポケットの中にもう一度手を入れてごらん」

ヤマメの言葉に従い、ススムはパツと顔を輝かせました。彼の指は、キズ一つない完全な杖をつかみ出すことができたのです。

ナユタの声があたりに響きました。

「ええい、失敗だったか」

ガゴジも声を上げました。

「坊ちやま、どうなさいます？」

「どうもこうも、こうなればヤマメと戦うしかないさ」

「わしもお手伝いいたします」

「ああ、すまん」

そう答えながら、服の下からナユタが自分の杖を取り出したのは、このときのことでした。

ナユタとヤマメは向かい合い、今にも呪文をとねえあつかと思われました。ところがここで、また思いがけないことが起こったのです。

2本の杖が、突然強い光を発し始めたではありませんか。そして2本とも、あっという間にナユタやススムの手を離れ、まるで意思を持っているかのように空中へ飛び上がったのです。

それを見上げ、思いがけなさに全員が呆然としてしまったのは事実です。でもとっさに自分を取り戻したのは、ヤマメが最初でした。

意外な出来事に驚いて、まるで隙だらけのナユタとガゴジを見て、ヤマメはほくそえむことになりました。すかさず二人に飛びかかったではありませんか。

いくら魔力を使うことができて、不意を突かれてはどうすることもできません。ヤマメの長い足にガツンガツンと見る間になぐり倒され、ナユタもガゴジも気を失ってしまったのでした。

棒切れのように地面に伸びてしまった二人を満足そうに見下ろしていましたが、ヤマメはやがてススムを振り返りました。

「ススム、2本の杖はどうなった？」

「空のかなたへ飛んで、両方とも見えなくなってしまったよ」

「2本並んで、仲良く飛んでいったのだな。方向はどっちだった？北か？するとその方角に、杖をあやつって飛ばせた者がいるというわけだ」

「杖は盗まれちゃったの？」

「そうさ。どちらも強い力を持ったすばらしい杖だからね。この世の妖怪という妖怪がみな欲しがっている。私たちは、まんまと隙を突かれたというわけさ」

「これからどうするの？」

「この伸びている二人を、まずなんとかしなくてはな。うん？あれはなんだ？」

「どうしたの？」

「ススムごらん。ガゴジの服のポケットがいま動いたのだよ。中に何か入っているのではないか？」

身構えるススムたちの目の前で、ついにポケットの中身が姿を現しました。

でも敵ではなかったのです。なんとフクロウだったではありませんせんか。

パタパタと羽ばたいてススムの肩にとまり、フクロウはクチバシを動かしました。

「ああひどい目にあつた。お師匠様、こんな目にあうのは、もう二度とごめんですよ」

「おまえは今までどこにいたのだ？ 私たちは大変だったのだぞ」

「オレもそれなりに大変だったんですよ。屋敷を偵察に出て、窓かドアか、壊れた壁の穴か、とにかく入口を探していたんです。

ところがそんなものは見つからず、ウロウロしていたら突然誰か後ろからガツンと殴られて、気絶してしまいました。気がついたらこのポケットの中にいて、今やっと、はい出してきたというわけでした」

「おまえが頭を殴られたカタキは、私が取ってやったさ。それでフクロウ、おまえに頼みたいことがある」

「はい、お師匠様。なんでもお申し付けください」

「まずナユタとガゴジだ。体をしぼり、どこかに閉じ込めておけ。呪文を口にすることができないように、猿ぐつわをすることも忘れるな」

「はい」

「屋敷に閉じ込められているハトたちは呪文をといて、全員解放してやれ。ゼロ禅師には、ここで起こったことを説明してやってよい。あの男は今後も多少の役に立とう。わかったか？」

「はい、お師匠様。お任せください」

「では私とススムは出かけるぞ」

「どこへ行かれるので？」

「飛び去った2本の杖を追いかけるのさ。なんとしても取り戻さなくてはならん。さあススム、出かけよう。私の背にお乗り」

「うん、お母さん」

フクロウに見送られながら、ススムとヤマメの旅が始まったのです。

塩塚の怪異（後書き）

次回の投稿は11月3日（木）を予定しています。

「妖怪禅師」は次回の投稿で完結する予定です。

新王の誕生

この旅は長く続くように思えました。だからススムは口を開いたのです。

「ねえお母さん、もう夜が明けようとしているよ。長い旅になるのなら、家へ連絡しないと、お父さんやお姉ちゃんが心配するよ」

「それは大丈夫さ、ススム」

「どうして？」

「私たちはついさっき川を渡っただろう？」

「うん、大きな川だったね。呪文をとнаえて、お母さんはいつものように水面を歩いて渡った」

「あの川をすぎて、私たちは『死者の国』へと入ったところさ」

「えっ？」

「そんな驚いた声を出すものではないよ。あの川は、人間世界と死者の国をへだてているものでね」

ススムは思わず振り返りましたが、川はすでに遠く、もう水面がわずかに光っているだけでした。

「あれは『さんずの川』だったの？」

「そうとも言っね」

「じゃあ僕たちは死んじやったの？」

「ふふふ、そうではないさ。生きたまま死者の国へ足を踏み入れることができる呪文を、私は自分自身とおまえにかけておいたのだよ」

「まさか本当に？」

「本当さ。私にしか用いることのできない高度な呪文でね。ススム、私は妖怪王国でも1、2を争う呪文家なのだよ。そのことを、おまえはもつと誇りに思ってよい」

「もう思ってるよ」

「おやおや、それは光栄なことだな。ナユタやガゴジですら、こんな呪文は用いることができぬ」

「それはいいけど、僕たちは元の世界へ帰ることができるの？」

「もちろんさ。だが前をごらん。2本の杖は光を発しながら、はるかかなたを飛んでいる。あとを追うには、あの川を越えるしかないかったのさ」

「だけど荒れ果てた風景だねえ。まるで砂漠みたいで、とがった背の高い山がいくつもある」

「油断をするのではないよ。ここは私ですらまだ来たことのない世界だからね」

こうやって二人は、死者の国を駆け続けたのです。

やがて前方に小さな店が見えてきたとき、意外さのあまり、ススムは目を丸くすることになりました。

「お母さん、こんなところにも店があるよ」

「ああ、あそこで少し休もう。私もいささか疲れた」

「杖はどうするの？ もうとっくに見えなくなつたよ」

「心配はないさ。杖たちは、きっかり北を目ざして飛んでいた。明日の朝、また北を目ざして出発しよう」

「ねえ、本当にお父さんやお姉ちゃんに連絡しなくていいの？」

「人間の世界と死者の世界では時間の流れ方が違うのだよ。たとえば私たちがこちらで一週間過ごしたとしても、人間の世界では5分とたつてはおらぬさ」

「へえ」

「だからミチコたちのことは心配ない。さあ店に入ろう。何か食べる物があればよいが」

外から見るほど店の中は狭苦しくはなく、ランプの光で照らされていて、見回しながらススムはほっとすることができました。

ただ店の中は空っぽで、主人らしい女が一人いるだけだったので。

「あのう、おばあさん……」

ススムは話しかけようと思いました。

ところがススムの言葉は途中で止まってしまったのです。女がヤマメの姿に気づいたからでした。

「これはこれは、ヤマメお嬢様ではありませんか」

ヤマメも表情を変えました。

「おやオウナ、おまえはオウナなのか？」

「お嬢様、おなつかしゅうございます」

「ふふふ、元気だったかという質問は変だな。ここは死者の国であるから」

「まさかヤマメ様も亡くなられたので？」

「そうではない」

ヤマメは事情を説明し始めたのですが、2本の杖のことに話がおよぶとオウナが目を丸くしたのは、いうまでもありません。

「そのようなことがあったのですか。それはまさしくラセツの仕業に違いありません」

ここでススムは口を開いてしまいました。

「ねえオウナさん、どうしてラセツがここにいるの？」

ところがオウナは、不思議そうな顔をするばかりなのです。

「ヤマメ様、いま口をきいたのは誰です？ ヤマメ様は誰かをお連れなのですか？ 私の目には誰も見えませぬが」

「ああオウナ、私にはまさしく連れがいるのだよ。ススムという名で、生きた人間の子供だ」

「人間の子供ですと？ なぜそのような者をお連れなのですか？」

「事情はいろいろとな。ススム、おまえはもう気がついておろう？ 死者の国の住人たちは、生者であるおまえの姿を見ることができないのさ」

「僕の姿は、透明人間みたいに透明になっているの？ どうして？」

「それが死者と生者の関係だからさ。人間の世界へやってきた死者は幽霊と呼ばれ、よほど暗い月の夜でないと姿を見ることができないだろう？」

「ふうん。生者である僕は、この国では幽霊みたいな存在なんだね」

「しかもこの国には月がない。だからおまえが姿を見られることは、まずないと思っっている」

「へえ」

オウナが口を開きました。

「声から察するに、ススムとはまだ本当に子供のようすな。おお、それで思い出しました。ヤマメ様、息子様はお元気にしておられますか？」

息子様の名前も存じ上げず、私はお顔を見たこともないが」

「ああ、私の息子は元気にしているよ」

「息子様は、妖怪王国にお戻りになりましたか？」

「いや、まだだ」

「すると、今もどこかに姿を隠したままで…。ああ、おいたわしや」

ススムが言いました。

「ねえオウナさん、ヤマメの息子って、なぜ妖怪王国から逃げ出さなくてはならなかったの？」

「ああ、それはススム、ヤマメ様の息子様がナユタのどちらが次の王になるかで王国全体の意見が割れて、とうとう戦争になってしまったからさ」

「戦争？」

「それはそれは激しい戦いだったのだよ。国土は荒れ果て、ラセツ軍の攻撃により、王宮まで破壊される始末。ついにヤマメ様は、息子を国の外へ逃がすしかなくなった」

「どうやって?」

「王宮にはメイドが一人いてな。これを信用できるものと見込んで、まだ赤ん坊だった息子をヤマメ様はお預けになった。息子様を連れて妖怪王国を出、いずれかの国に落ち着き、メイドは自分の子として育て始めたそうな。」

ヤマメ様、このメイドは今でも達者にしておりますのか?」

「いや、先日死んだ」

「おお、なんとヤマメ様」

「だが心配はないのだ、オウナ。すかさず、別の者が息子の面倒を見る役目を引き継いだのでな」

「ほほう、さようでございますか。ヤマメ様もいろいろご苦労がありで」

「こういう時代だからな。仕方がないさ」

「いやいや、仕方がないではすみませぬ。ああヤマメ様、すぐにお食事を用意いたしましたよう。また明日は早朝から、杖を追って旅をされるのでしょうか?」

翌朝、ヤマメの背に乗って再び荒地を駆けてゆきながら、オウナの言った言葉をススムは思い返していました。

「このまままっすぐ北へ向かいなされ。やがて、ひととき巨大な岩

山に行き当たりましょう。その頂上には城があり、これがラセツ一味が根城にしている場所なのです。

元は『死者国王』の城でしたが、やってきたラセツにあつという間に占領されてしまいました。今では死者国は、ラセツによって支配されているのですぞ」

ただ残念なことに、オウナも城内の様子までは知らなかったのです。

オウナの言葉どおり、岩山と城が見えてきたのは、もう夕方近くのことでした。

城壁の上に立つ見張りに見つからないように注意して、丘の影や大きな岩の後ろをたどって、二人は近寄ってゆきました。

やがて安全な場所で立ち止まり、ヤマメはススムを背中から降ろしたのです。

「ススム、あの城をごらん。何か様子がおかしいとは思わないか？」

「うん、兵士がたくさん出て、たいまつを手には歩き回ってるね。誰かを探しているのかな？ 僕たちがここへ来ていることを知っていると思う？」

「それはどうかな。しかし連中が殺気立っているのは事実のようだ。おやおや、ごらんススム、ラセツのやつが塔の上にいるのが見えるよ」

「本当だ。あつ、兵の一人を殴り倒したよ」

「生前から妹は気が短かったが、まるで変わっておらぬな。死んでも直らん性格というやつか」

「あの兵士は、何かラセツの機嫌を悪くすることを報告したんだろうね。あつ、もう1回殴られた」

「さあススム、見物はそのくらいにして、私のほうを」

「どうしたのお母さん」

ススムを手近な岩の上に座らせ、ヤマメはその瞳をまっすぐに見つめたのです。

「これからおまえに、少し面倒なことを頼まなければならない」

「何を？」

「この国では、誰もおまえの姿を見ることができない。おまえは空気のよう透明なのさ」

「うん、わかってるよ」

「今からあの城へ忍び込んで、中の様子を探っておいで。ラセツや兵たちが何を話しているのか、何が連中をいらだたせて、これほどの警戒をさせているのか、その理由が知りたい」

「僕が行くのか？」

「今のおまえは完全に透明なのだよ。足音に気をつけさえすれば、

誰にも見つかることはないさ。さあ行っておいで」

気はまったく進まなかったのですが、ヤマメにさとされ、ついにススムは腰を上げるしかなくなってしまうました。

立ち上がり、何度も何度も振り返りながら、敵の城を目ざして歩き始めたのです。ススムが振り返るたびに、しっぱを振ってヤマメは答えてくれましたが、岩の陰になって、やがてそれも見えなくなってしまうました。

ススムはつぶやきました。

「お母さんのバカ」

こんなに危険な役目をいつけられたことで、ススムはひどく腹を立てていました。でもそれを面と向かって口にする勇気がなかったのです。

とうとうススムは、高い城壁のふもとまでやってきてしまいました。いくら姿が見えないといっても、ここから先へ進むには、かなりの危険をともしなうに違いありません。

城には城門があります。それがうまい具合にちょうど開いたのは、このときのことでした。

ガラガラと音を立てて、荷馬車が入ってゆこうとしたのです。サツと駆け出し、あとをついて、ススムが城内へ入っていったのは、いうまでもありません。

岩陰に潜んで、ヤマメはススムの帰りを待ち続けました。よほど

気になるのか、城の方角へ何度も目を向けますが、そのたびにため息をついているではありませんか。

ススムの姿がやっとヤマメの視界に入ったのは、なんと2時間もたつてからのことでした。息をはずませながら、ススムは駆け戻ってきたのです。

「ああお母さん、やっとわかったよ」

「どうだった？」

「ラセツたちは、魔力の杖を探しているんだ。城の中に井戸があつて、そのそばで水を飲みながら兵たちが立ち話をしているのを聞いた。杖が光りながら飛んできたことは、国境の見張りから知らせを受けて、ラセツも知っているらしい」

「杖はどこへ飛んでいった？」

「それがお母さん、もつとすごいことがあるんだよ。見張りの兵が偶然目撃したらしい。

2本の杖は輝きながら空を飛び、だけど突然、その兵の目の前で溶け合い、合わさって、新しい1本の杖に変わってしまったというんだ。

まるで2つのロケットが合体するときのような眺めだったらしいよ」

「2本の杖が合わさり、1本になった？」

「ラセツたちが大騒ぎをしているのは、それが理由なんだよ。溶け合った杖は、魔力が元の2倍に強くなるんでしょ？」

「その通りさ。その杖を持つ者は、もはや誰にも引けを取らぬ魔力使いとなるぞ」

「その杖が、この岩山のどこかに墜落したことも目撃されているんだよ」

「なんと本当かい？ ススム」

「本当だよ。兵たちがそう言っているのを聞いたもん。だからラセツは兵たちにたいまつを持たせ、岩山中を探させているんだって」

「なあススム、もしもラセツがその杖を見つけたら、どうなると思う？」

「ものすごく強い魔力使いが誕生するね」

「それだけではないさ。非常に危険な魔力使いとなろう。杖の力を用いて、あの川を越え、人間世界へだって攻め込んでくるかもしれない」

「まさか」

「まさかではないよ。ラセツとは、強くなることと、権力を得ることとにしか興味の無い女だ。ラセツに杖を持たせると、本当に困ったことになる」

「姉妹なのに、お母さんとラセツはあまり似てないんだね」

「似ていてたまるか。私は父親似で、ラセツは母親似なのさ」

「じゃあお母さんの母親って、ラセツに似た姿をしていたの？」

「そうだよススム。とにかく偵察はご苦労だったね。とても助かったよ。危ない目にはあわなかったかい？」

「ううん、結構おもしろかったよ」

「それはよかった。ではススム、私たちも杖を探しに出かけよう」

「どうして？」

「もちろん、ラセツに杖を渡すわけにはいかなからさ」

「そんなことを言っても、岩山は広いんだよ。あのたくさんの兵たちよりも先に、僕たちたった二人で見つけることができるはずだよ」

「それはわからないぞ」

「どうしてさ？」

「考えてごらん。ラセツが杖を探しているのはなぜだと思う？ 杖がもはや光を発していないからさ。杖は光るのをやめてしまったに違いない」

「なぜなの？」

「さあな。持ち主の手を遠く離れてしまったからかもしれん」

「持ち主であるお母さんが近くへ行けば、また光り始めるかもしれないの？」

「まあね」

「ふうん」

あまり納得してはいませんが、ススムはお母さんの言う通りにするしかありませんでした。いくらいやでも、お母さんと一緒にでないと、人間世界へ帰ることだってできないのです。

ススムを背中に乗せ、お母さんは再び歩き始めました。

「ああそうだ、お母さん。ラセツの城の中で、僕はナユタの姿を見たよ」

「なんだって？」

「ナユタだよ。ラセツの隣にいて、一緒になって兵たちに指示を出してた。いつの間にこっちへ来たんだろうね」

「それは本当なのかい？ ナユタはどんな様子だった？」

「どうって、いつもと同じだったよ。どうかしたの、お母さん？ 気分でも悪いの？」

「いや、なんでもないのだよ。しかしラセツめ、思い切ったことをしたものだ」

「どうして？」

「おまえにはわからないかい？ 私のように呪文が使えるわけではないラセツが、ナユタをこちら側へ呼び寄せるには…、おや？ あれは何だろう？」

お母さんが立ち止まったので、ススムも耳をすませることになりました。ゴロゴロと突然、空からカミナリの音が聞こえてきたではありませんか。

見上げると、西の空から真っ黒な雲が近づいてくるところだったのです。

「お母さん、あれ…」

「雷雲か？」

城の方角から兵たちの大きな叫び声が聞こえてきたのは、この瞬間のことだったのです。

ススムもヤマメもとっさに振り返ることになりました。二人とも同時に気がついたのです。

「お母さん、塔の上で光っているのは、あの杖じゃないかな？」

「ああ、そのようだ。屋根の頂上に立っているね」

「あそこにずっとあったのかな？」

「ふん。とんだ『灯台下暗し』というやつか」

「ほらお母さん、ラセツもあの杖に気がついたよ。ナユタを連れて塔を登ってゆく。屋根へ上がるつもりだよ。どうするの？ このまま杖を取られちゃうよ」

「いやススム、もはやどうしようもないね。杖がラセツの手に落ちるのは時間の問題さ。しかし私は、少し気になることがある」

「なにが？」

「あの黒い雲さ。ずんずんこちらへ近づいてくるではないか」

「それがどうしたの？」

「雲の中からカミナリの音が聞こえるであろう？ 雲はもうすぐ塔の真上に達する。杖は、あの屋根の頂上に立っているのだよ」

「あつ」

ススムが声を上げると、稲妻が塔を襲うのとはほとんど同時でした。

このとき、ラセツとナユタは共に杖に手をかけていたのです。

稲妻のせいで真つ白な光があたりをいっぱい照らし、ススムは何も見ることができなくなっていました。

やっと光が消えたとき、兵たちもいったんはどよめきを上げました。しかし奇妙なことに、すぐにそれも静かになってしまったので

す。

兵たちは、ラセツとナユタの死体に気がついたのです。カミナリに打たれ、屋根から転落し、二人とも大地に横たわっているのです。

死者の国でも人は死ぬものなのか、とススムは不思議な気持ちになりましたが、目の前の光景を否定しても仕方ありません。ラセツもナユタも、もはやピクリともしないのです。

「ねえお母さん……」

ススムは何か言おうとしましたが、言葉が続きませんでした。ヤマメの口から次に出たセリフが、ススムをひどく驚かせたのです。

「父め、はかったな」

「どうして？ 父って、妖怪王のこと？」

「ススム、あの黒い雲に見覚えはないか？ 父がいつも身にまとっているものではないか」

「そうか」

「さあススムおいで。二人で城へ乗り込もう。今さら私に逆らう者はおるまい」

ススムを背に乗せて、ヤマメが城に達するころには、妖怪王も兵たちの前に姿を見せていました。といっても、いつもの黒い雲で身を隠したままです。

そこへススムたちが合流し、兵たちが急いで開いた門を通って、城内へと入ってゆくことになったのです。

もちろんすぐにヤマメは口を開きました。

「父上は、自分で自分の娘を殺したのですね」

妖怪王は答えました。

「ラセツのような者を生んだのはわしの責任だ。だから自分で始末をつけたのさ」

「だがここは死者国。いつときは動かなくなっても、死者が二度死ぬことはありません。ラセツも、いずれまたよみがえってきましよう」

「だがそのときにはヤマメ、おまえの息子が王となっていよう」

ここでススムは口をはさんでしまいました。

「ねえ王様は、どうしてここにいるの？」

「ははは、わからないかいススム君？ 君とナユタの手の中から杖を奪い、ここまで飛ばせてきたのは、わしなのだよ」

「じゃあヤマメと僕は、王様の手のひらであやつられていたんだね」
ヤマメが言いました。

「私たちだけではない。あやつられていたのはナユタも同じさ」

「どうしてなの、お母さん？」

「ススム、ラセツはどうやってナユタを死者国へ呼び寄せたのだと思う？」

「さあ？ 呪文でも使ったのかな」

「ラセツには無理な呪文さ。そのように高度な呪文は、父や私のような者しか使うことができない」

「じゃあ？」

「わからないかい？ 幽霊の姿をとって人間世界へ行き、ラセツはみずからナユタを殺したのだよ」

「まさか…」

「そうするしか、ナユタを死者国へ連れてくる方法はないではないか。なんて母親だ」

黒い雲の中から王の手が伸び、ススムの肩に軽く触れたのは、このときのことでした。

「ああススム君、塔の上から、わしの家来が杖を取って戻ってきたよ」

振り返るとその通りでした。ヨロイを身につけた鬼が一匹、うやうやしくささげもって近づいてくるのです。

サイズも見かけも以前と変わらない杖ですが、表面の黒さはより深くなり、つややかさも増したようではありませんか。もちろん、カミナリによってキズ一つついていっているわけではありません。

「ススム君、それを受け取りたまえ」

言われた通りにしましたが、すぐにススムは不思議そうな表情を浮かべるようになりました。

「でも王様、これはヤマメの息子が受け取るべき物なんじゃないの？ ヤマメの息子が次の王になるんでしょう？ 僕じゃないよ」

「いや君が受け取るのさ」

「どうして？」

「それはススム君、君がヤマメの本当の息子だからさ。そうだろう、ヤマメ？」

その言葉に、ヤマメはすっかり目を丸くしています。

「ご存知だったのですか、父上？」

「ははは、知らいでか」

「やれやれ、私は一人芝居をしていたのかもしれない」

「そうでもないさ。どうだいススム君、びっくりしたかい？」

ところがススムは、ゆつくりと首を横に振るではありませんか。

「うっん、そうでもない。実を言つとね、ゼロ禅師から少し耳打ちをされていたんだ。もしかしたら、僕の正体はそうなのかもしれないって」

「ほう」

妖怪王は感心した顔をしています、ヤマメは違いました。

「あのジジイめ、余計なことをしおって」

妖怪王が振り返ります。

「まあよいではないかヤマメよ。害はなかったのだ。ゼロ禅師のことは許してやるのだな」

「はい、父上がそうおっしゃるのでしたら」

「さて、これでわしの仕事はすんだようだ。自分の城へ帰ることにするよ。あとは頼むぞ、ヤマメ」

「はい、みなの方によろしくお伝えください」

「ああわかった。しかしヤマメ、おまえもたまには城に顔を見せるがいい。みなも会いたがっている。そのときはススム君を同伴することを忘れるな。王国の妖怪たちも、新王の顔を見たがっているのだな」

「はい父上」

王の前でヤマメが深く頭を下げてお辞儀するので、ススムは目を丸くしたものでした。

ラセツとナユタのいない今、死者国の妖怪たちも、もはやヤマメに敵対することはありませんでした。ラセツとナユタをほうむった後、新しい杖をポケットに入れたススムとヤマメを、手を振って見送ってくれたのです。

ススムを背に寄せ、今度はあまり急ぐことなく、ヤマメは荒地を駆けてゆきました。またあの川を目指し、再び渡って、人間世界へと帰るのです。

店を訪ねると、もちろんオウナは歓迎してくれました。ススムが妖怪王国の跡継ぎに決まったことを伝えると、姿は見えなくとも手を取り、喜んでくれたのです。

オウナの店を出て、再び二人は荒地を進み始めました。ヤマメが口を開いたのは、このときのことでした。

「ススム、妖怪王国の王になることを、おまえは本当に承知してくれたのだね？　不満に思っていないのだね？」

「それが気になるの、お母さん？」

「それでも母親だからな。子の将来は気にかかるさ」

「うふふ、まるで人間の母親と同じだねえ」

「笑いたければ笑え。おまえは自分の運命をのろってはいないのだ

ね？ 父が死ぬとおまえは人間世界を離れ、妖怪王国の住人となるのだよ」

「運命をのろつてはいないけれど、心残りなことがなくはないよ」

「それは何か？」

「お母さんのことだよ」

「私？」

「うん、僕はお母さんの素顔を一度も見たことがないんだもん」

立ち止まり、ヤマメは笑い始めました。

「なんだ、そんなことか。おまえはいいときにこの話題を出したぞ。人間世界は目が多く、いつどこで誰に目撃されるともわからん。人間でなくても、野鳥や野良猫に私の真の姿を見られるのもまずいでな」

「どうして？」

「前方をこらん。あの川が見えているね。私たちはまだ死者国にいるということだ。ここのなら、私の姿を見せてやつても問題はない」

「なぜ？」

「それは見ればわかる。さあ毛皮を脱ぐことにしよう。よくこらんススム。これが私の素顔さ」

ススムの目の前で、ヤマメはするすると毛皮を脱いでいったのです。

それはどういう姿だったのでしょうか。ヤマメはどんな顔をしているのでしょうか。

「お母さん」

なつかしさのあまり、ススムは声を上げてしまいました。ヤマメの顔とは、彼を思わずそうさせてしまうものだったのです。

ススムの目の前にはあのなつかしい顔。赤ん坊のころからずっと一緒だった人。病気で死んでしまったと聞かされていた人の顔があったのです。

もう二度と会うことはないと思っていた本当のお母さんが、そこにいたではありませんか。

ススムは叫びました。

「やっぱりお母さんは、僕の本当のお母さんだったんだね。そうじゃないかという気がずつとしてた。妖怪王国から逃がすときに僕をメイドに預けたというのは、ウソだったんだね」

「そうさ。おまえを連れ、私自身が王国を抜け出したのだよ。人間たちの間に隠れて生き延び、ラセツを倒すことができる日を待っていたのさ」

「お母さん……」

「さあススム、泣くのはそのくらいにおし。将来のために、おまえにはまだたくさんすることがあるのだよ。まず、呪文や魔力をもつと覚えなくてはならん。おまえには家来も必要になるう」

「お母さんのフクロウみたいなやつ？」

「あんなできの悪いのではなく、もっとちゃんとした家来をつけてやるさ。おまえには呪文の教師も必要だが、それはゼロ禅師にやらせればよからう」

「禅師が引き受けてくれるかな？」

「引き受けるさ。あいつはすっかりおまえに情が移っている。断るはずがない」

「本当に？ 自信があるの？」

「あるともさ。私の手並みを見ておいで……」

こうしてススムの物語は終わるのです。彼がいかにして新しい妖怪王へと成長していったかは、また機会があればお話しできるかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4058i/>

妖怪禅師

2011年10月18日21時53分発行